

奇譚クラブ

新風俗文獻誌

1961
4月号

ロケータビヤ華やかなモンターニ
絵異常光線の鏡

奇譚クラブ

KITAN CLUB

4

定価 百五拾円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



緊縛写真集

クラフ集

限定版特別号 第三弾!

「緊縛写真グラフィック集」

特価五百円 略号「クラフ」

表紙三度刷、内容グラフィック印刷

画題「縛り人形」 絹川文代 花坂道子



限定版特別号
につき一切書店
売りは致しませ
ん。直接発行所
宛お申込み願
います。厳重包
の上急送致しま
す。

お申込先
大阪市阿倍野郵便局
私書函第十四号
天星社
振替口座
大阪五〇〇四二番



◎豪華な内容とモデル陣◎

- | | | |
|-------------|-------------|------|
| 巻頭裸身緊縛一頁大扉 | ながしめ | 絹川文代 |
| 荒縄全裸緊縛 | 落ちた腰巻九態(野外) | 大塚啓子 |
| 円い乳房 | 浴室におびえて九態 | 愛川悦子 |
| 恍惚境 悦虐の末 | 縄の陶酔 | 絹川文代 |
| いためられた乳房 | 耐えられない? | 桜井葉子 |
| 月経帯の強制二態 | 手吊りと逆手吊り五態 | 大塚啓子 |
| 全裸悦虐態 | 白痴美の誘惑 | 大塚啓子 |
| はねかえす縄 | うろうろ許して! | 大塚啓子 |
| 雪白の肌は縄にまみれて | 六態 | 大塚啓子 |
| 優姿ハダカ縛り | 忘却の彼方 | 絹川文代 |
| 股間縛り背正面二態 | 捕われの麗人二態 | 絹川文代 |
| 湯責め二態 | 浴室にて責める四態 | 大塚啓子 |
| 何にしようと言ふの | 新人書態集八景 | 桜井葉子 |
| いじめぬく二態 | メンスバンドの猿轡 | 絹川文代 |
| 観念横臥の図二態 | 変形手足しばり四態 | 絹川文代 |
| 裸身をさらして六態 | 豊満くらべ九態 | 桜井葉子 |
| 亀甲縛り正背面二態 | 怨めしき縄目二態 | 大塚啓子 |
| 後手首腰縄四態 | 新人緊縛ポーズ集六態 | 桜井葉子 |
| 隅から隅まで四態 | 鏡面万華鏡様(裏と表) | 愛川悦子 |
| 四十項目 | 百十五ポーズ | |

絢を競う艶姿115ポーズ

限定版特別号

オ四弾!!

別冊奇譚クラス
(番号別特)

特価
五百円



第一口絵

- 犬曳きショール
- 鬼面の鎖
- 耐苦のハシゴ
- 墓地に揺れる奴隷
- 迫り来る淫靡器
- 木立ちの中の囚女
- 煙に咲いた麗顔
- 非情の鞭
- 電灯に揺れる苦悶
- 回転木馬
- 刺青される女
- 苦悶の宙吊り
- アクロバチスト急造
- 恐怖のコンクリート部屋
- 空倉庫の怪事
- 暴露の部屋

第二口絵

- 黒皮の羊羹
- ゴム紐との闘い
- 受難の麗顔
- 変形舞踏 縛り
- 消えぬ灯
- 森の精
- 強まりゆく痛覚
- 迫り来る羞恥
- 妻という名の犬
- 姐上のいけにえ
- 狙われる美囚
- 車中のもがき
- 踏みみじられる女
- ハンモック椅子
- 耐苦の座褥
- 32 燐燐と燐肌

表紙裏 第二表紙 姫君遊園之図
第三表紙 新製品奇譚機

第一グラビヤ

羞美	あきらめ	怨嗟	固定	漆黒	花華	哀婉	とらわれ	哀美	置き人形	従順	屈辱	不泣き	苦痛	哀願	華麗
四方清美	柳初子	柳初子	山路ミヨ子	大塚啓子	館容子	絹川文代	加賀利江子	春日・伊吹	萩千恵子	藤田節子	前本妙子	大井小夜子	桜井葉子	村田那美子	中富綾子

第二グラビヤ

乱れ咲き	恨みのまなざし	第63号囚	黒いロープ	部屋飾り	稀花一輪	黒(くろかみ)髪	拘束の日常	哀艶像	白い彫塑	苦(くばく)縛	美しき呻吟	艶体反転	哀しき黙問	囚人	囚妻	ロープとの闘い	いもむしの抗議	捉った羚羊	佳麗なあがき
四方清美	花本京子	柳初子	柳初子	山路ミヨ子	山路ミヨ子	大塚啓子	須川令子	絹川文代	加賀利江子	萩千恵子	春日・伊吹	前本妙子	大井小夜子	桜井葉子	桜井葉子	前本妙子	熱海容子	加茂良子	絹川文代

口絵シーン解説の頁

四馬孝氏の作品三十二点に
対し、その場面々々の情景を
活字に依って描出し、興趣を
倍加する三十二篇の解説文。

お申込先

大阪市阿倍野郵便局
私書函第十四号
天星社
振替口座 大阪五〇〇四二番

限定版特別号、第一弾！

『緊縛フオトアラベスク』

略号（あらべすく） 特価 五百円

△収載内容△二十六項目、写真七十七葉

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1、鏡……………愛川悦子 | 14、奔放な肢体……………大塚啓子 |
| 2、銘花二輪……………花坂道子 | 15、鏡台と腰巻……………花坂道子 |
| 3、鉄鎖……………大塚啓子 | 16、腰巻と鏡台……………花坂道子 |
| 4、諦観……………大塚啓子 | 17、奇妙な休憩……………絹川文代 |
| 5、庭園にて……………絹川文代 | 18、田代悠子表情集（二）……………絹川文代 |
| 6、謎の微笑……………田中芳代 | 19、脱がされた高手小手……………愛川悦子 |
| 7、田中悠子表情集（一）……………田代悠子 | 20、亀甲縛り……………愛川悦子 |
| 8、誇る脚線美……………田代悠子 | 21、吊責折檻……………村井知可子 |
| 9、この足どうかしら……………田代悠子 | 22、立木縛り……………村井知可子 |
| 10、裏と表と……………愛川悦子 | 23、豊醇……………愛川悦子 |
| 11、落陽の丘……………愛川悦子 | 24、乱れ髪三景……………大塚啓子 |
| 12、ポリウムの花園……………大塚啓子 | 25、椅子と絨緞……………愛川悦子 |
| 13、緊縛美の綾……………大塚啓子 | 26、姐上の美鯉……………絹川文代 |

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルの各種緊縛ポーズを網羅し、文字通り表紙から裏表紙に至るまで、可憐なモデル嬢の緊縛姿態にて埋めました。（限定版特別号は一切書店売りを致しませんから、直接発行所宛お申込み願います）

美人モデルのかもと出す緊縛美

しばられたオンナばかりの集大成

限定版特別号、第二弾！

『緊縛写真と緊縛画集』

略号（緊縛） 特価 五百円

★ 四馬孝緊縛画集 ★ （二十五枚）

- | | |
|-----------------|---------------|
| 女体耐久テスト…………… | 女の掟…………… |
| 素晴しき会食…………… | 三醜女の逆恨み…………… |
| オシメカバーと赤ん坊…………… | 遠慮はいらねえぜ…………… |
| 白いいけにえ…………… | 女体の荷物…………… |
| アクロバットの訓練…………… | トランク詰の裸女…………… |
| 女学生の嫉妬…………… | 吊し責めの美女…………… |
| 女体は美しき玩具…………… | 浴場の悦楽…………… |
| 人間燭台の実験…………… | 鞭の御馳走…………… |
| 物置小屋の怪…………… | 淫虐な美容師…………… |
| 生埋めの私刑…………… | 狂気の復讐…………… |
| 奴隷という責め…………… | ヤキを入れてやる…………… |
| 水責めにあう美女…………… | 電気責めテスト…………… |
| 回転する女体…………… | |

★ 素晴らしき写真集 ★ （八十四葉）

- | | |
|------------------|-----------------|
| 序曲「手吊」のポーズ…………… | さあどうでもして…………… |
| 第二楽章逆手吊と足吊…………… | 陳列された女体…………… |
| 緊縛感のクローズアップ…………… | 忘れられぬ豊満美…………… |
| 拘束女体の経過…………… | 黒蛇地獄…………… |
| 股間縛り競艶…………… | 女のふんどし…………… |
| 麗わしき系列…………… | 女のサポーター…………… |
| 狂った果実…………… | 吊り人形の哀歓…………… |
| 晒し者なんだわ…………… | 断然これは凄い…………… |
| 腰巻の乱舞曲…………… | 女囚第十四号罷り通る…………… |
| 女の飲び八態…………… | |



奇譚クラブ

(四月特大号 第十五卷第四号)

目次

色刷巻頭口絵「芳汗採取用蒸し上げ袋」……………四馬孝画
目次裏「川柳名場面風景」佐保忍作 滝れい子画

異常光線の鏡
滝れい子「煙草責」画集

「長煙管」……………葉巻「巻煙草」

「マドロス・パイプ」……………滝れい子画

南村俊平傑作集

「日本風料理の味」……………佐渡守行状記

「少女兵狼藉」……………南村俊平画

第一口絵

四馬孝責画選

「息づまる一瞬」……………「地底の水地獄」

「非常の掉」……………四馬孝画

外誌紹介「ハイヒール」……………「脚線美」

遠藤春一画伯個展

「年令職業別女性」……………鈴鳴鳥居

「ガレージの花」……………猿轡実験室

少年受難シリーズ雪中で銃殺される日本人少年

第二口絵

華やかなモンタージュ 構成・辻村 隆

通天閣の見える橋……………モデル……………梨花悠紀子

門のある家から……………モデル……………梨花悠紀子

或る街角で……………モデル……………梨花悠紀子

美と叫喚の謎……………モデル……………四方清美

息づく陰翳……………モデル……………前本妙子

光と影の悪戯……………モデル……………加茂良子

弄……………モデル……………絹川文代

猿轡美人……………モデル……………絹川文代

自由なき後手……………モデル……………大塚啓子

縄に差らう……………モデル……………前本妙子

豊……………モデル……………絹川文代

黒縄と縄目……………モデル……………絹川文代

お前なんか獣みたいだ

素足がそんなに美味しいかい

フッフ、くすぐったいじゃないか

切腹の幻想……………モデル……………絹川文代

荒療治……………モデル……………四方清美

グラビヤ・フォト・セクション

M・フォト

懸賞入選作品「白雲山のいきにえ」……………樺田荒夫……………60

処刑あれこれ……………中谷 純……………78

告白的隨筆「贗相の四季」……………須藤律夫……………83

奇譚三十九夜物語……………第四夜……………辻村 隆……………86

連載小説「狩獵者」……………佐渡 槐……………98

マソヒズム天国……………田沼醜男……………106

映画に見る変装(その女装について)……………よしお・うえむら……………112

愛好者の記録……………とやま・かずひこ……………114

キリシタン悲話「島原恋歌」……………鶴藤 恵……………116

新稿 ある夢想家の手帖から……………沼 正三……………128

ふんどし万才……………清水ゆり子……………133

当代女武勇列伝……………諸岡堅雄……………136

責めと穴の魅力……………乾 長好……………146

連載小説 宇宙のどこかで……………佐治麻造……………148

馬化狂通信総決算……………倉仁成人……………163

続・アクロバット残酷記……………水田真紀子……………168

イチジク浣腸にも申す……………中井照夫……………177

酒と浣腸……………辰見喜徳智……………179

夢三夜……………第二夜・女体ですま……………收 高志……………180

告白 女装アラベスク……………和華 憂子……………188

創作 女優志願……………三条卓史……………192

グロテスク・フィクション……………伊帆保磨……………207

浣腸の憶出……………乾 長好……………210

隨筆 奇譚クラブの五人のモデル……………近藤 一……………214

切腹研究夜話(十二)……………中康弘道……………225

緊縛用鑑賞女性……………辻村 隆……………228

読者通信……………236





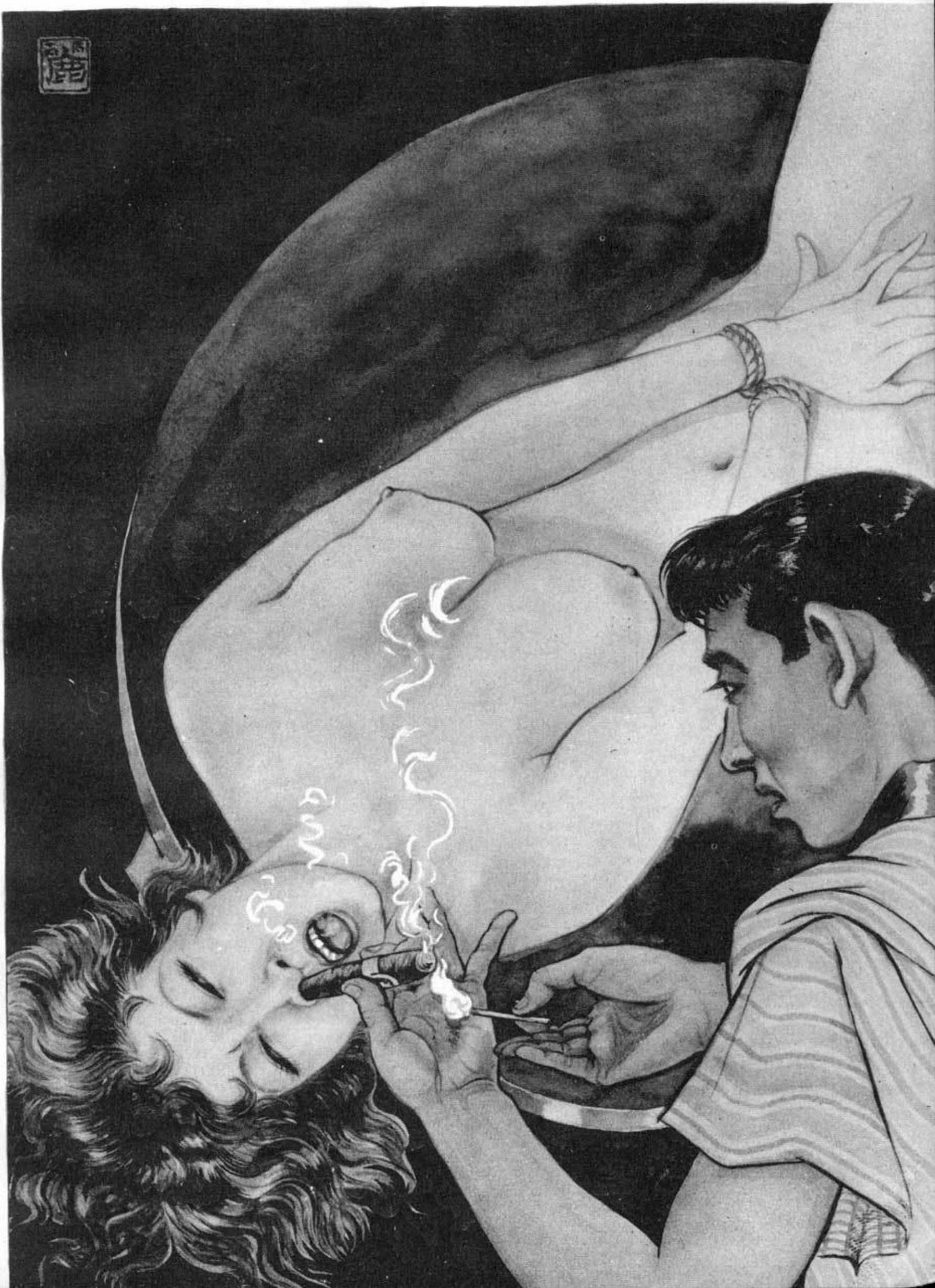
長煙管〈煙草責〉

若い女性と煙草というファンタスティックな夢を描いたもので、喫煙の奨励ではありません。



葉 卷 〈煙草責〉

近頃の若い女性で喫煙する人が多くなりましたが、
殆ど紙巻煙草ですね。葉巻を鼻でとは……。





巻煙草 〈煙草責〉

煙にむせて灰が顔の上に落ちてくる。短くなったらどうだろう。ヒドイ責ではなく、なごやかなプレイだ。

〈煙草責について〉

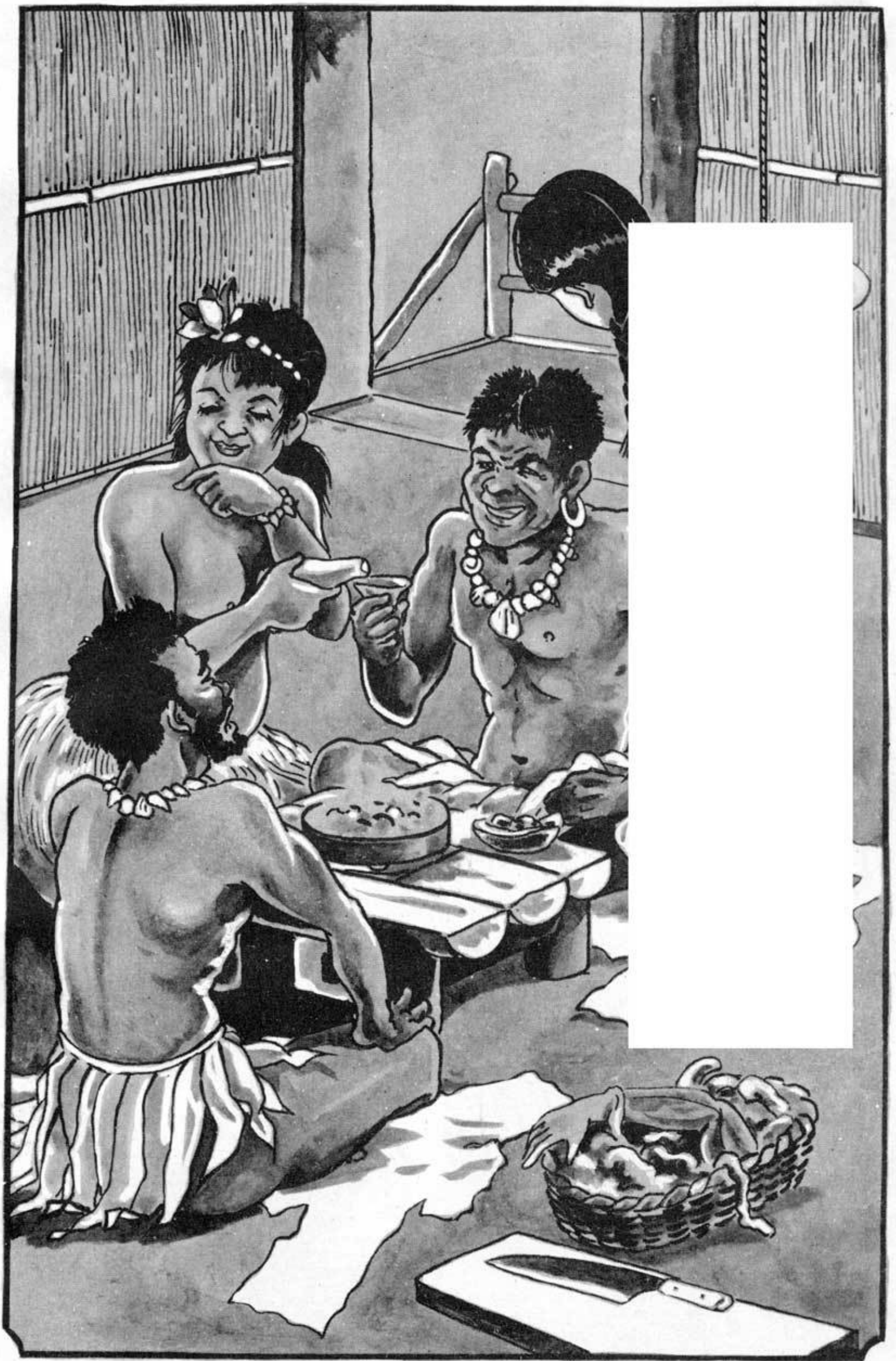
口に火のついた煙草をくわえさせられると、息をする度、フーと煙を吐き出し、だんだん顎がだるくなります。



マドロスパイプ

「そのパイプを落すなヨ、」撫でるようなムチが
軽く肌に当る度に、思わずパイプを落としそうにな
ってハッとする



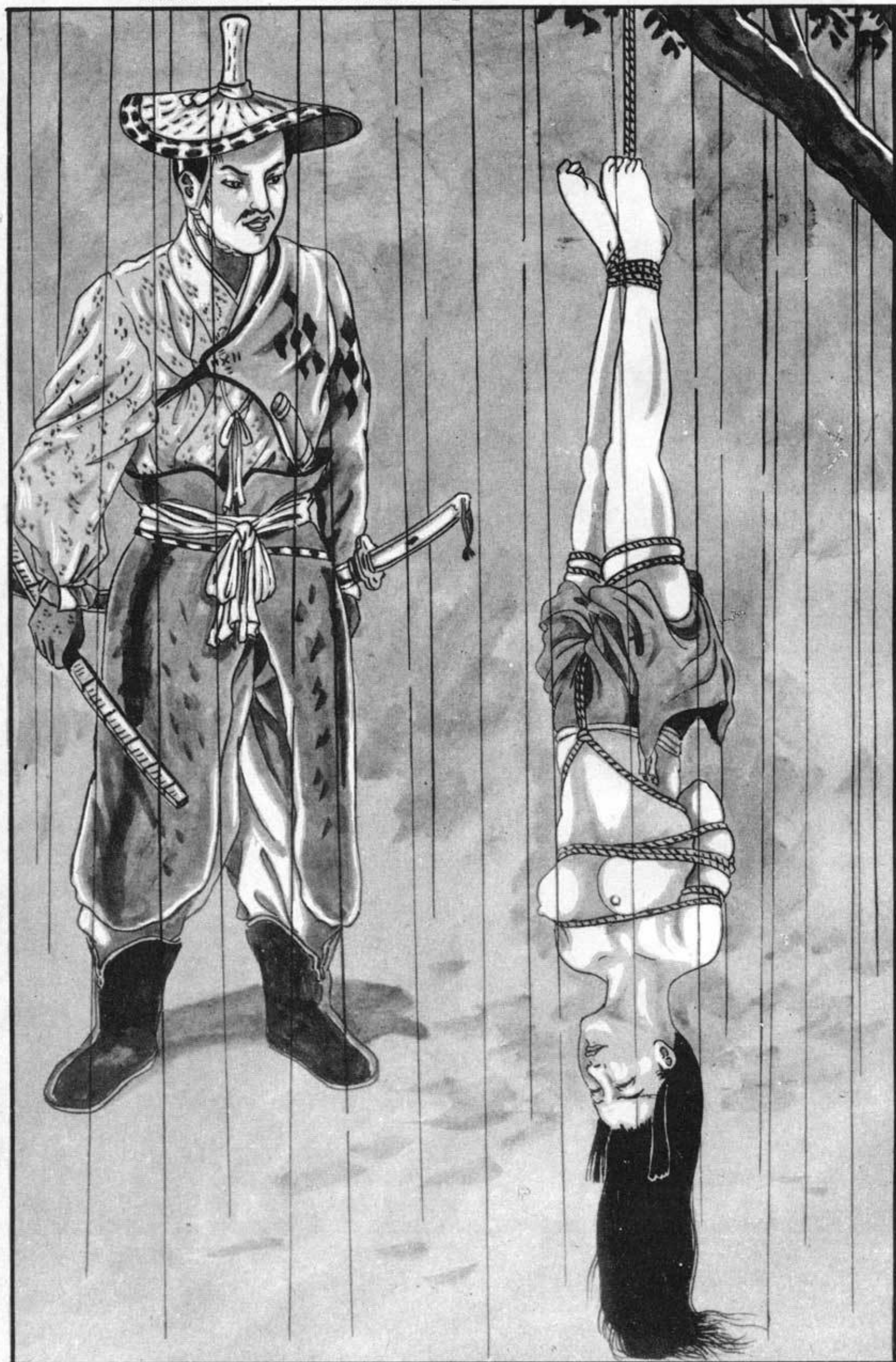


日本風料理の味

「うめえだろう、こりや、以前此处にいた日本の
兵隊から習ったんだ。」

佐渡守行状記

「山吹色がほしいと吐かしおる此奴、さらば余も
代償を求めるのは当然じゃ」





少女兵狼籍

掠奪・暴行の戦争の習しとはいいながら、戦勝した少女軍の暴行ぶりはひどいものでした。

華やかなるモンタージュ

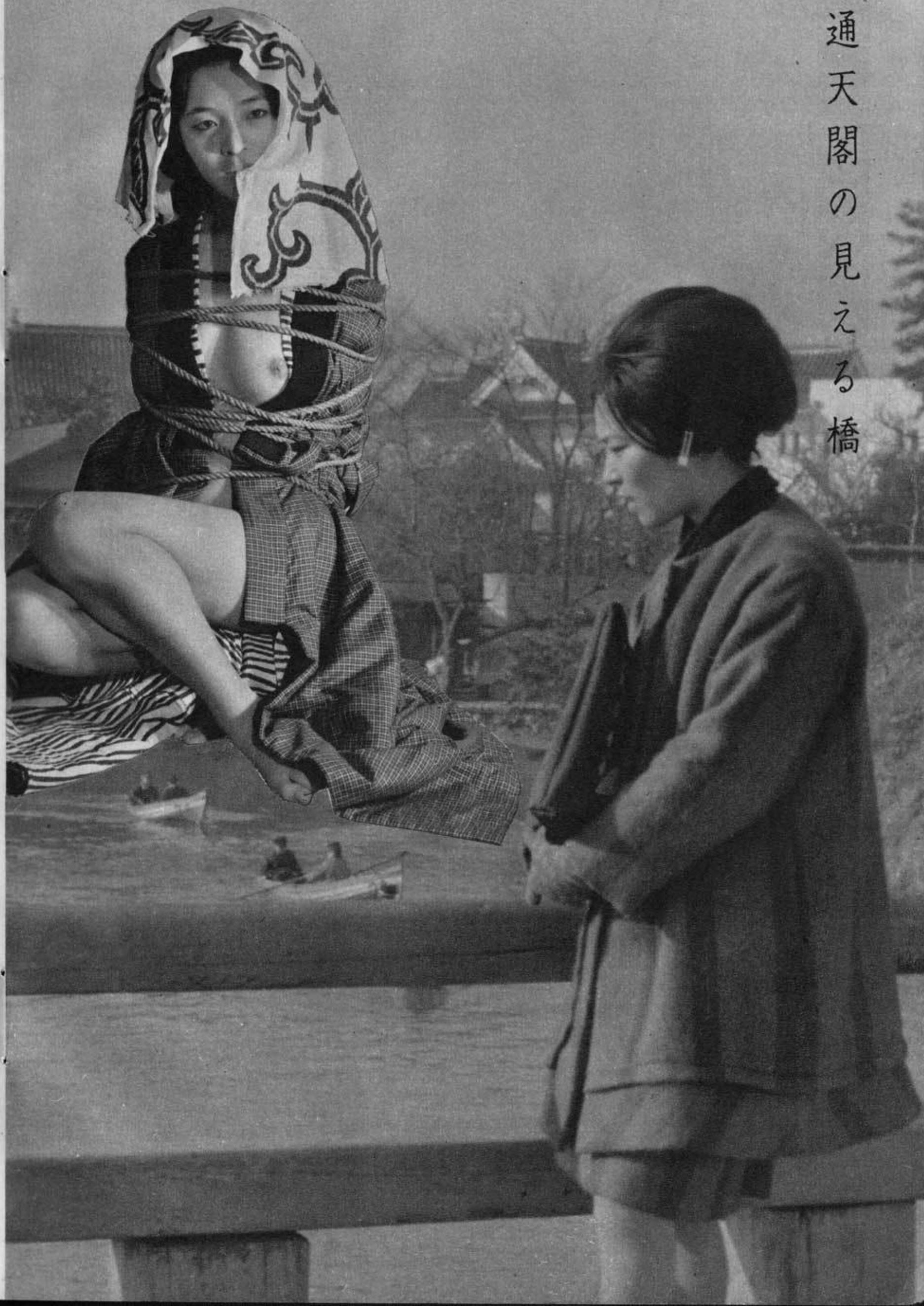
構成 辻 村 隆



モデル

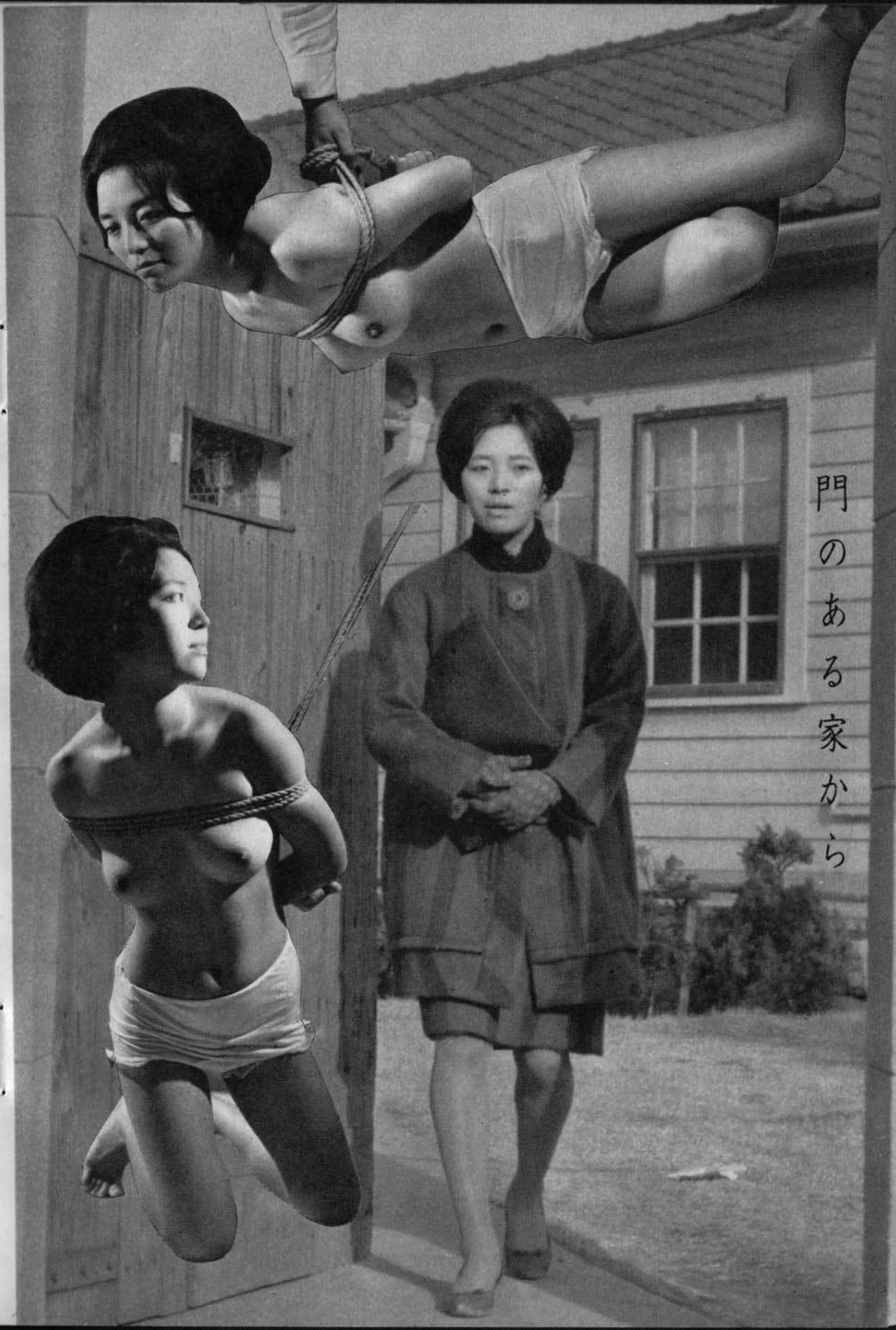
梨花悠紀子

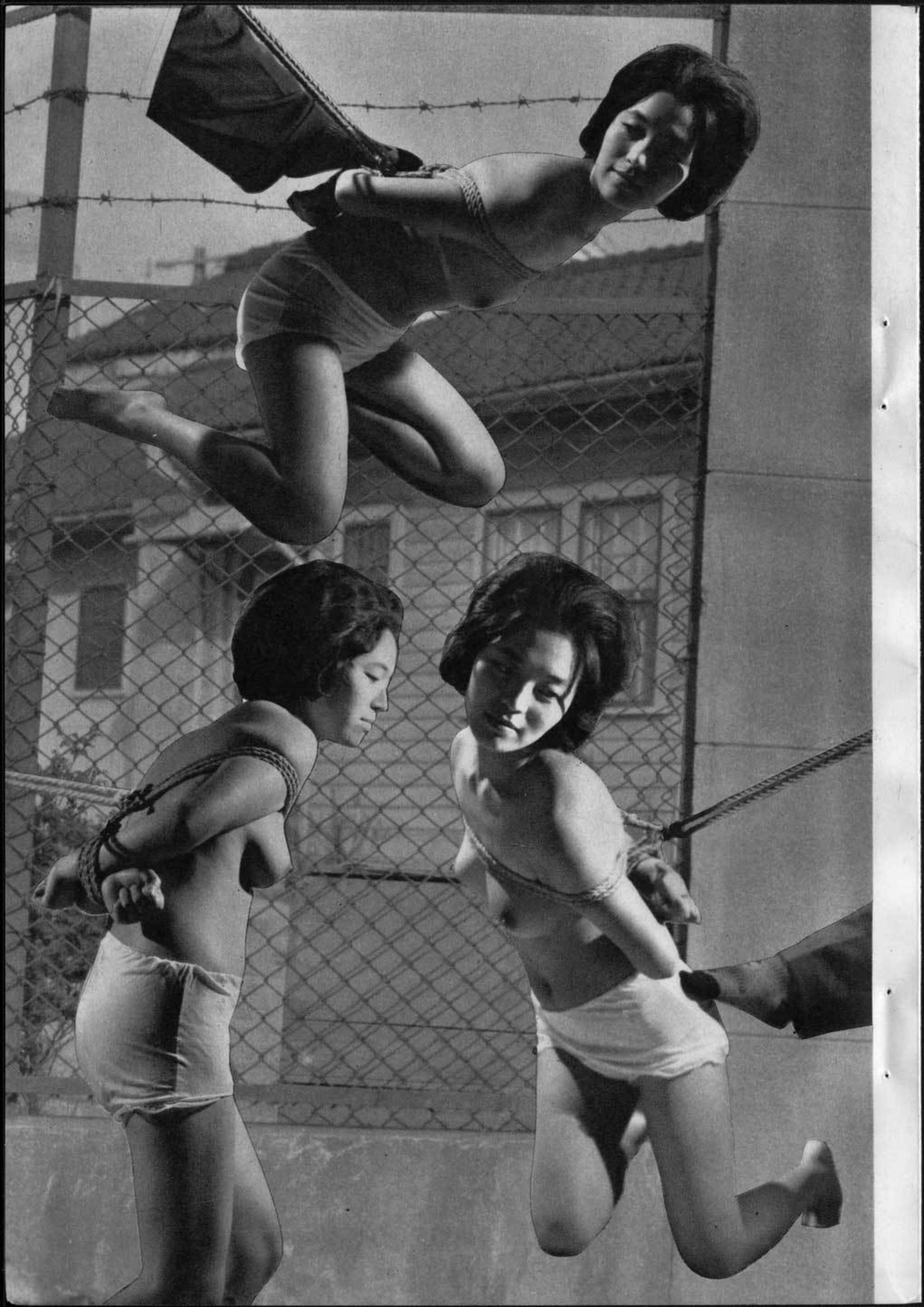
通天閣の見える橋





門のある家から



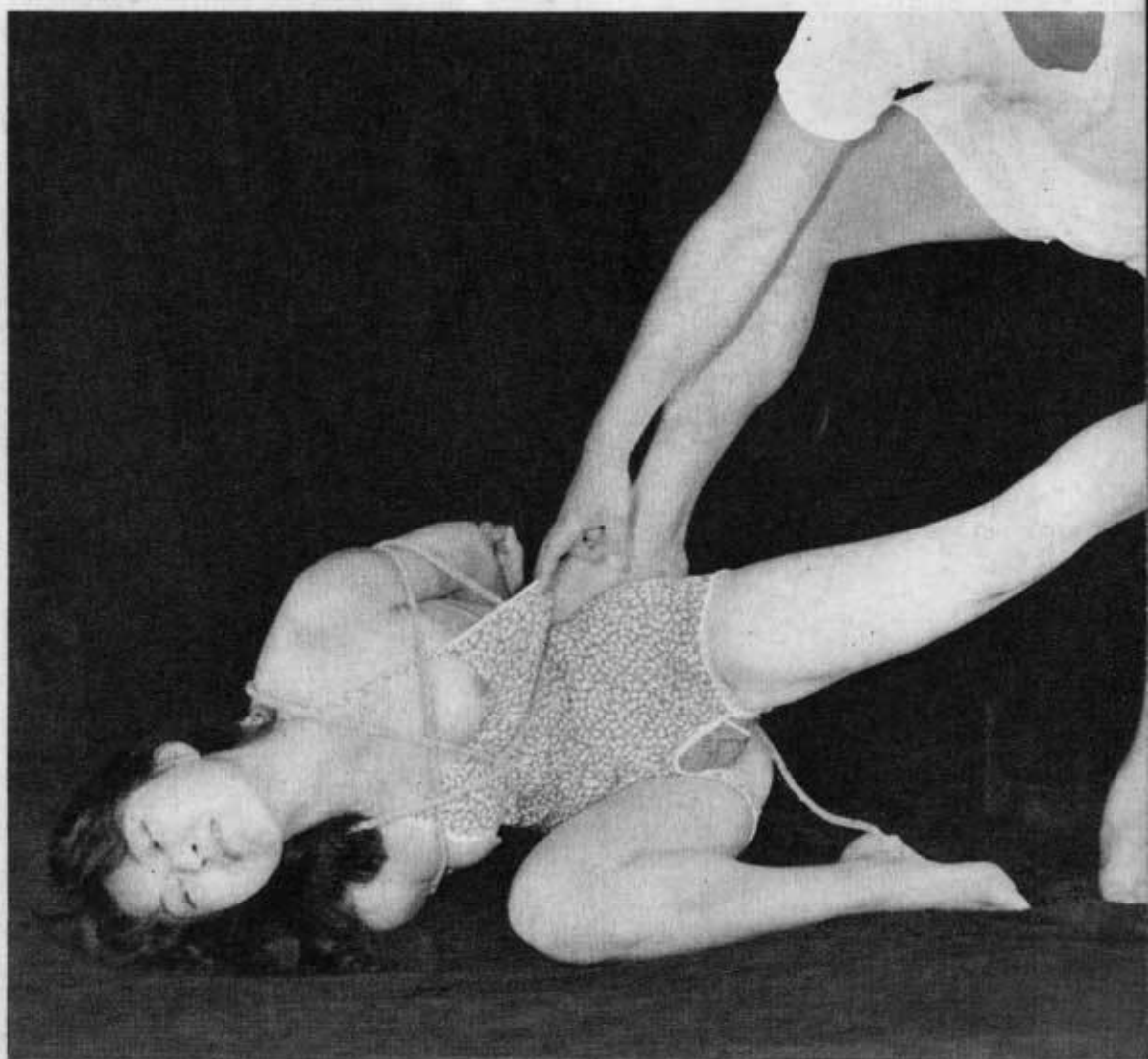


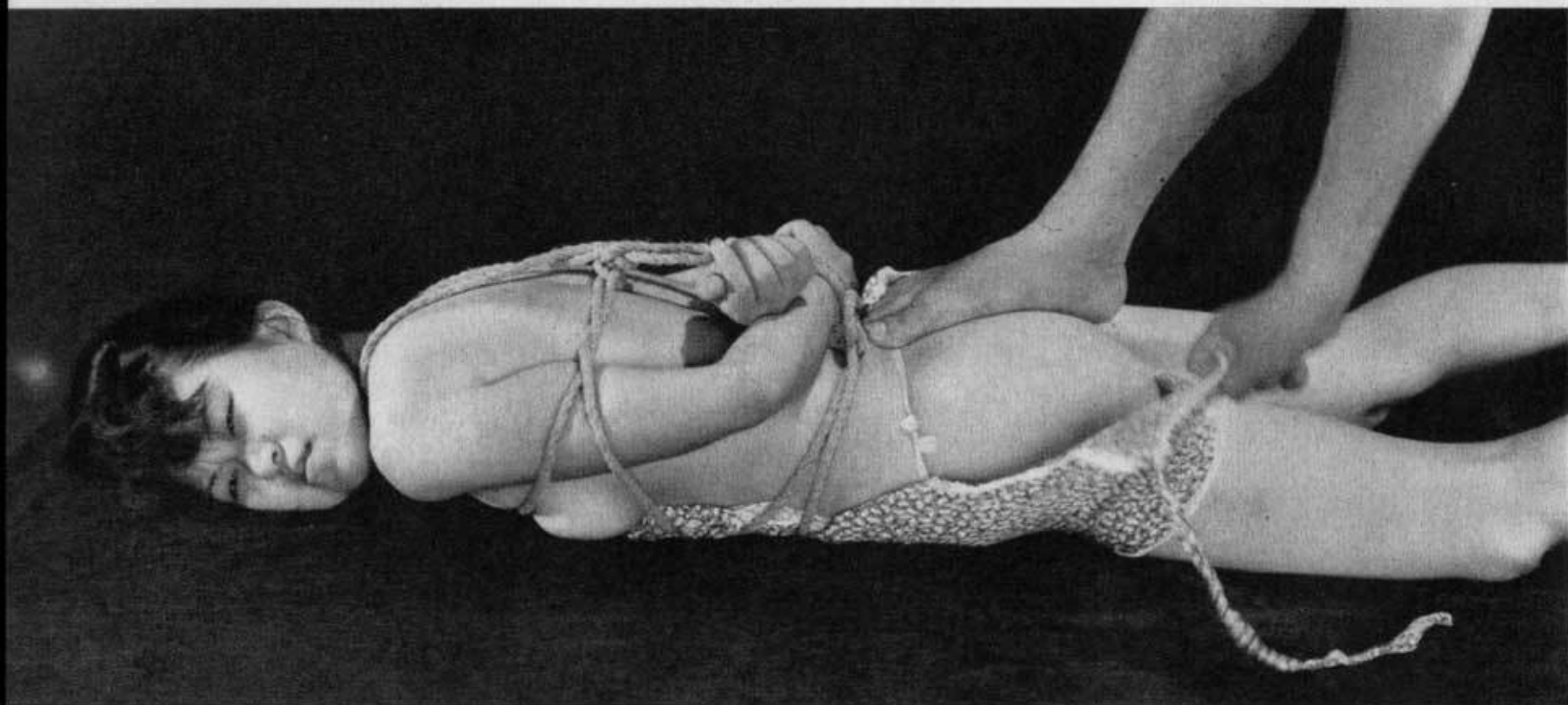
或る街角で

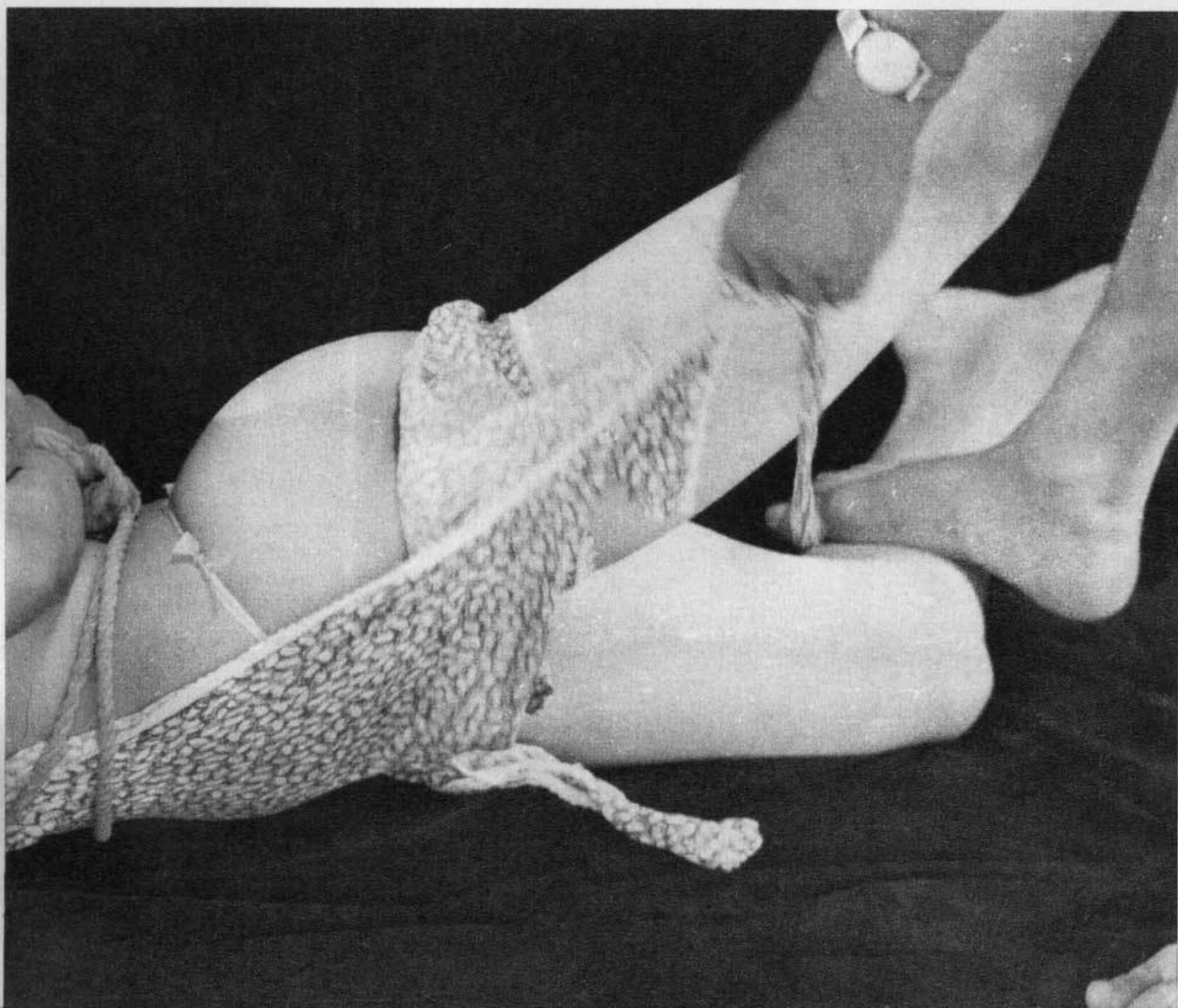
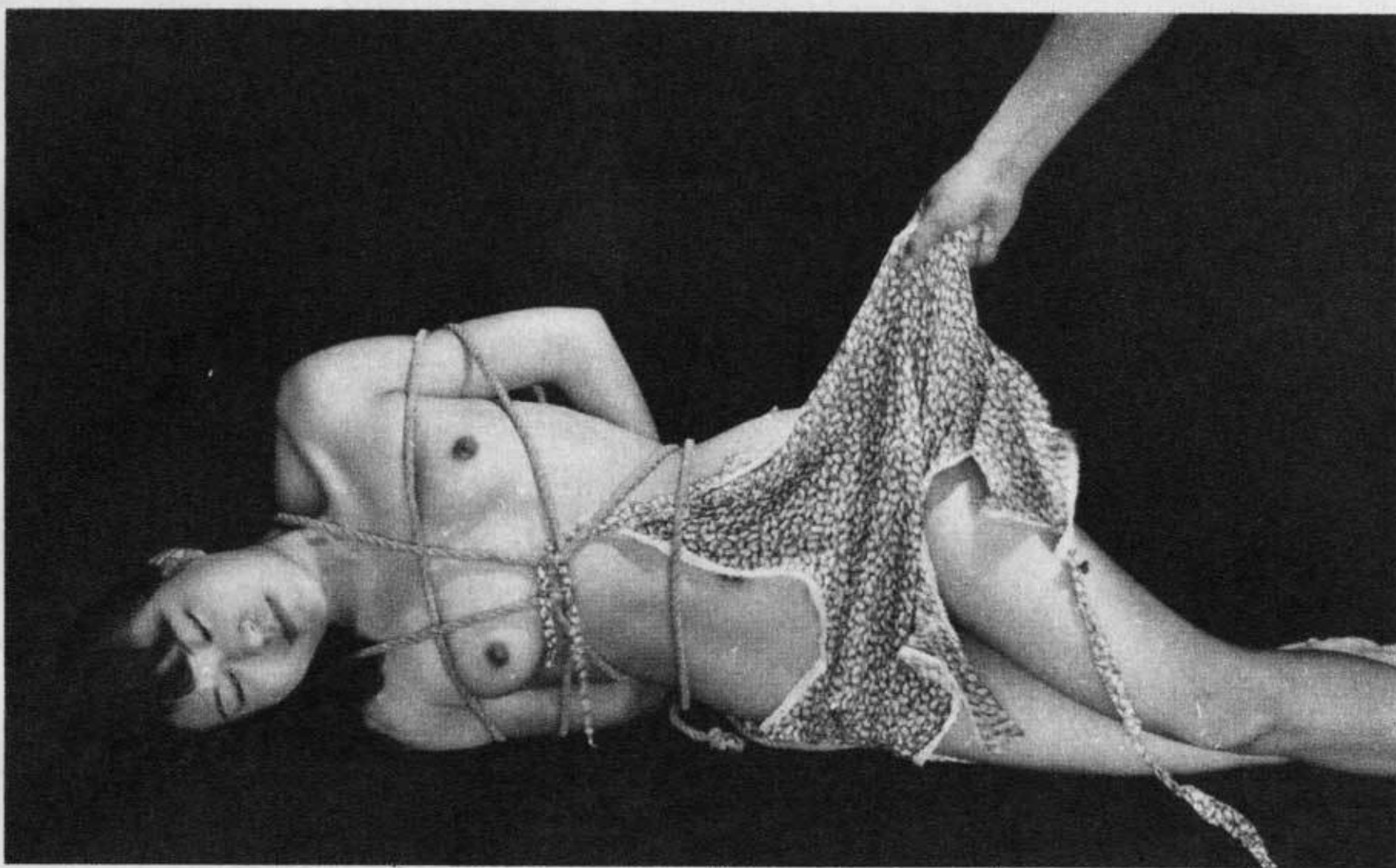


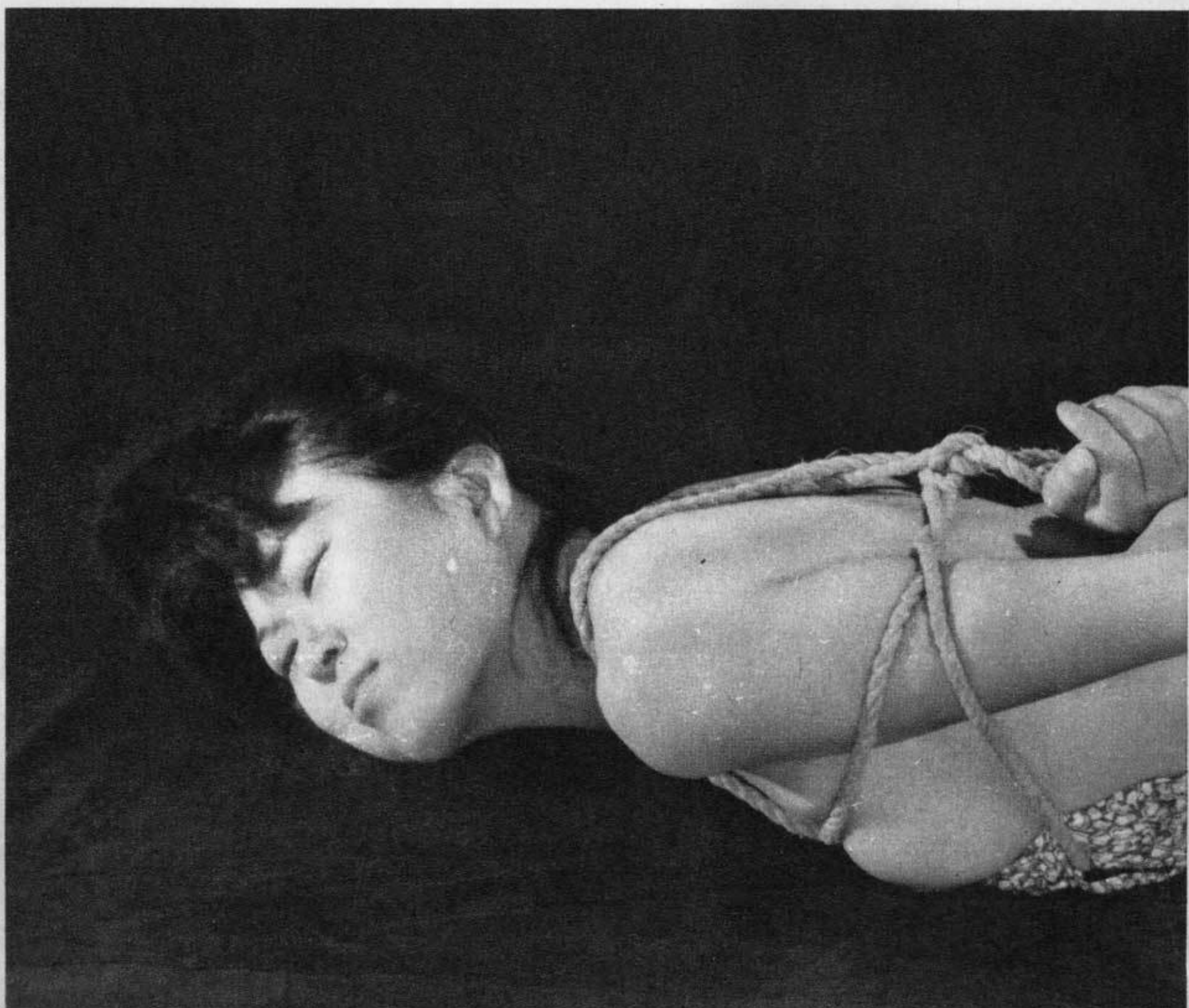
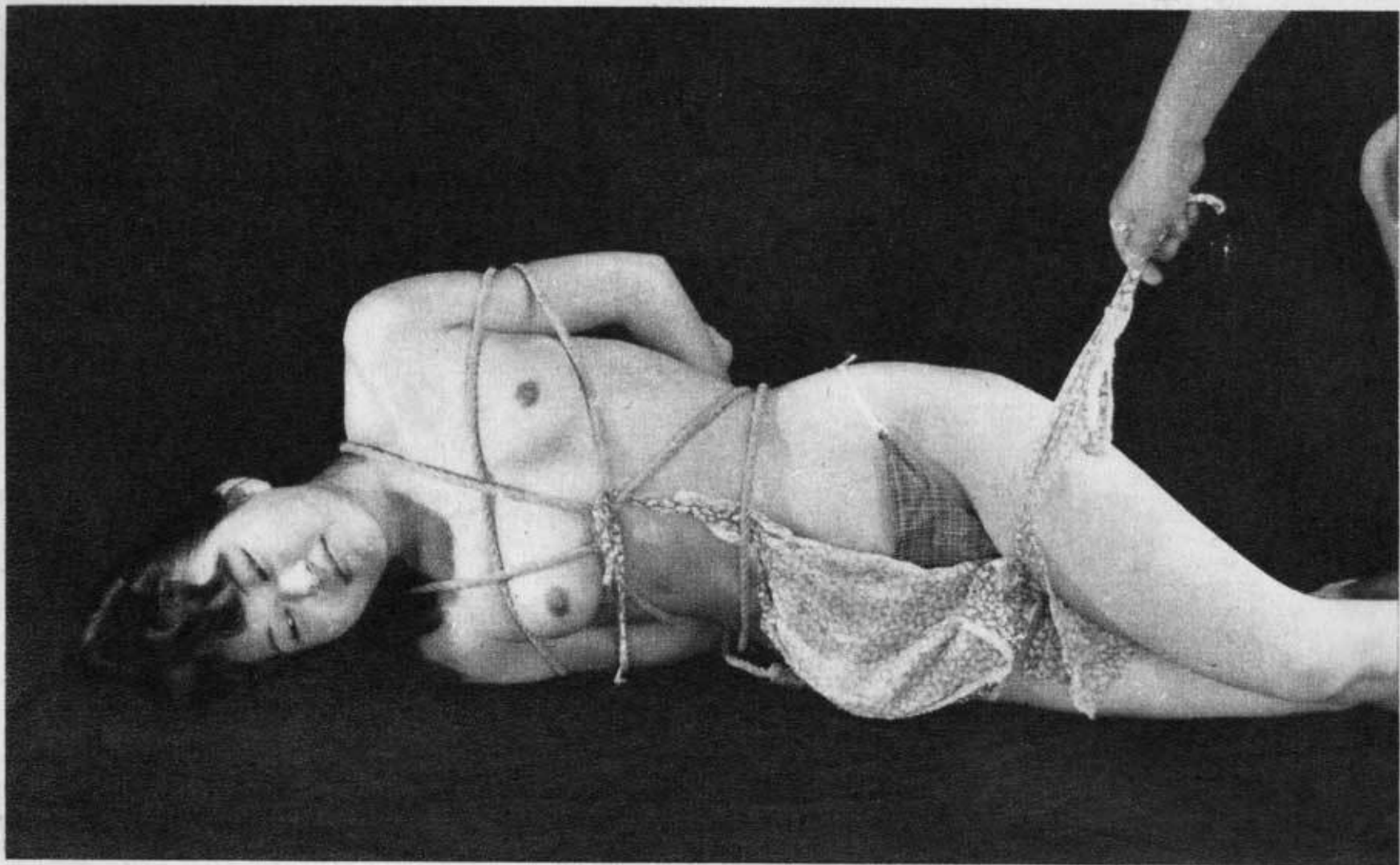


美と叫喚の謎











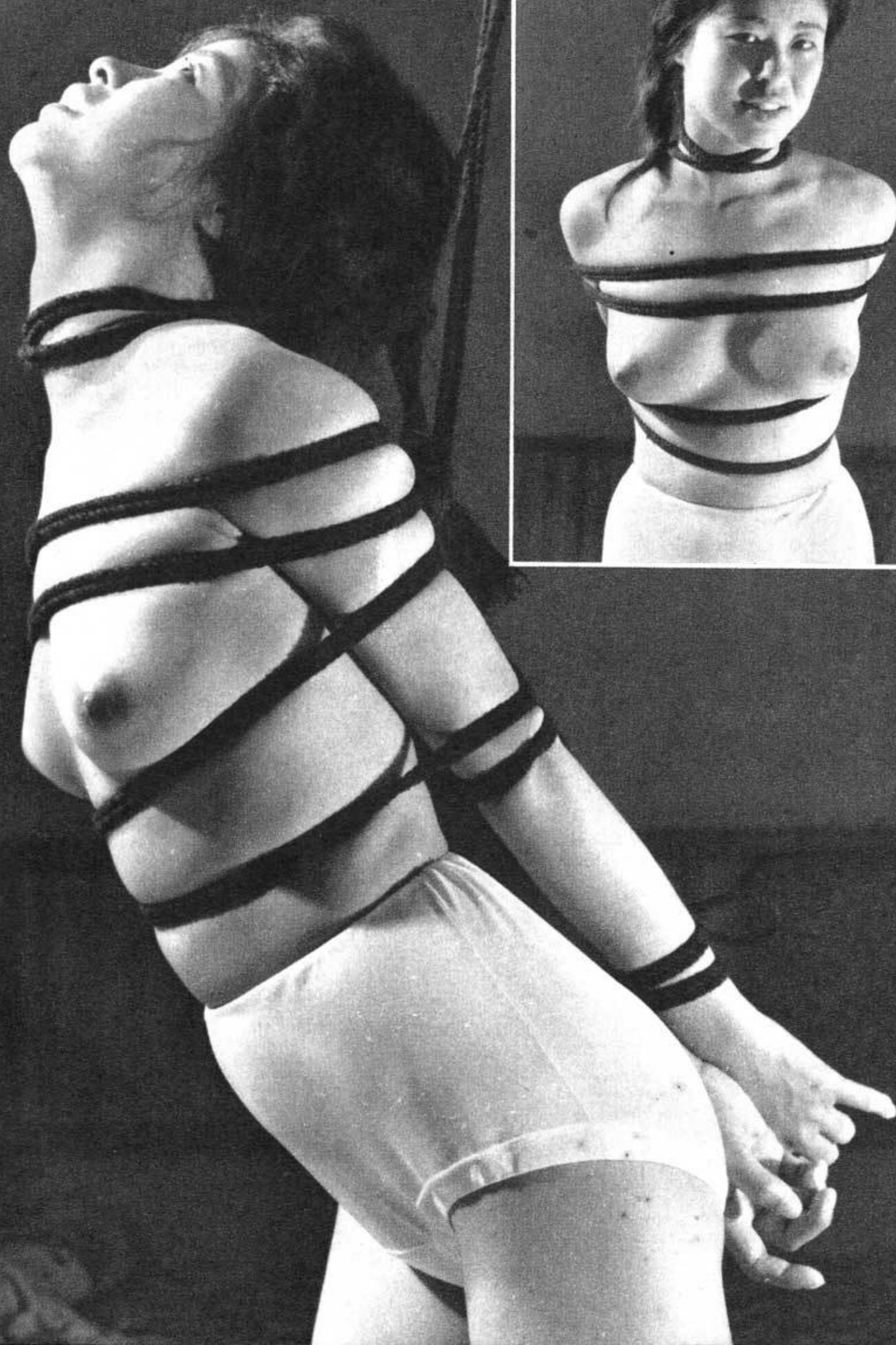
息
づ
く
陰
翳

モデル 前本 妙子



光と影の悪戯

モデル 加茂 良子

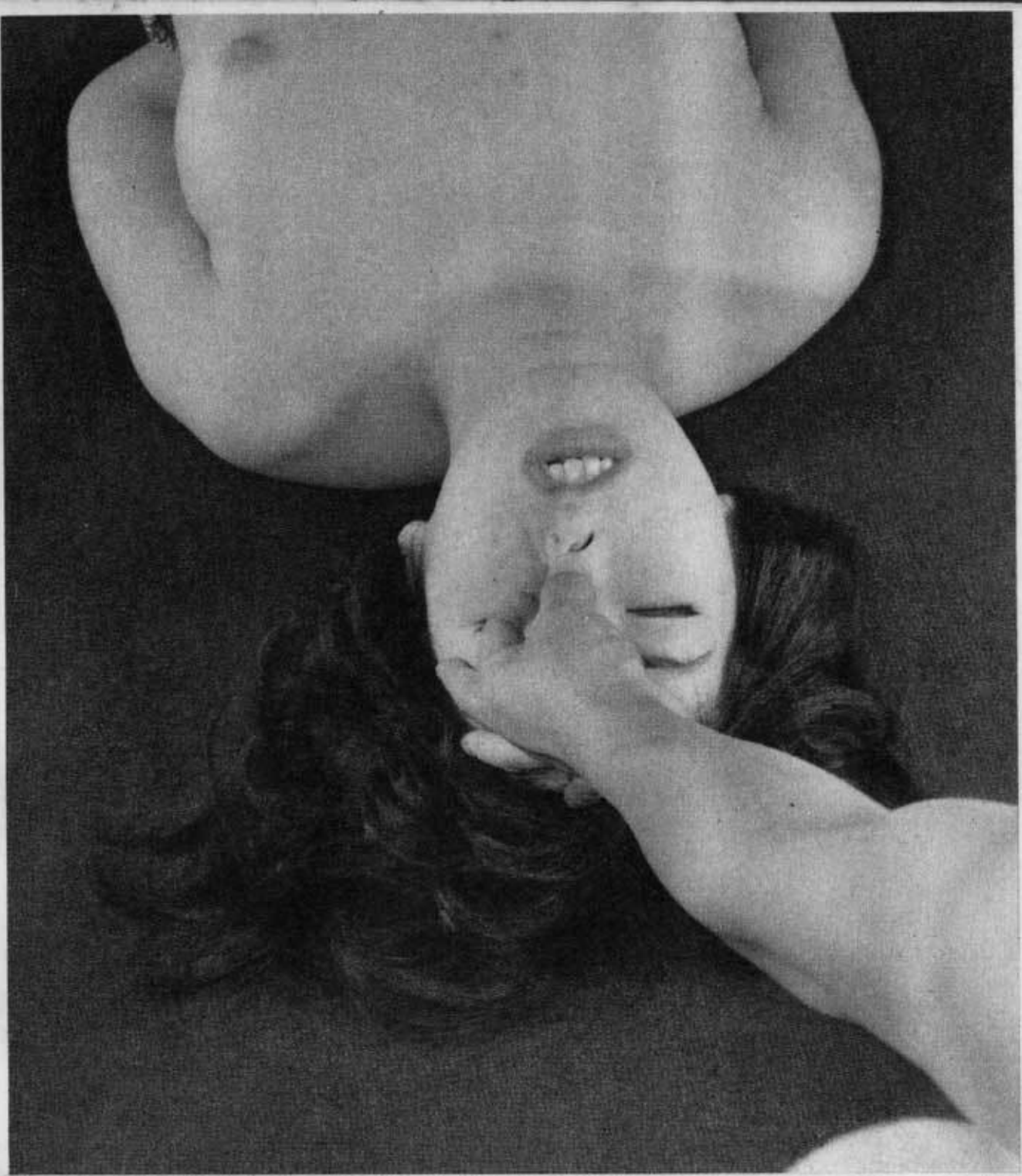




弄

花

モデル 絹川 文代



息づまる一瞬

裸電球の破れた倉庫の中では、一本のローソクだけがゆらゆらと人の気配につれて、その灯をゆらめかした。



地底の水地獄

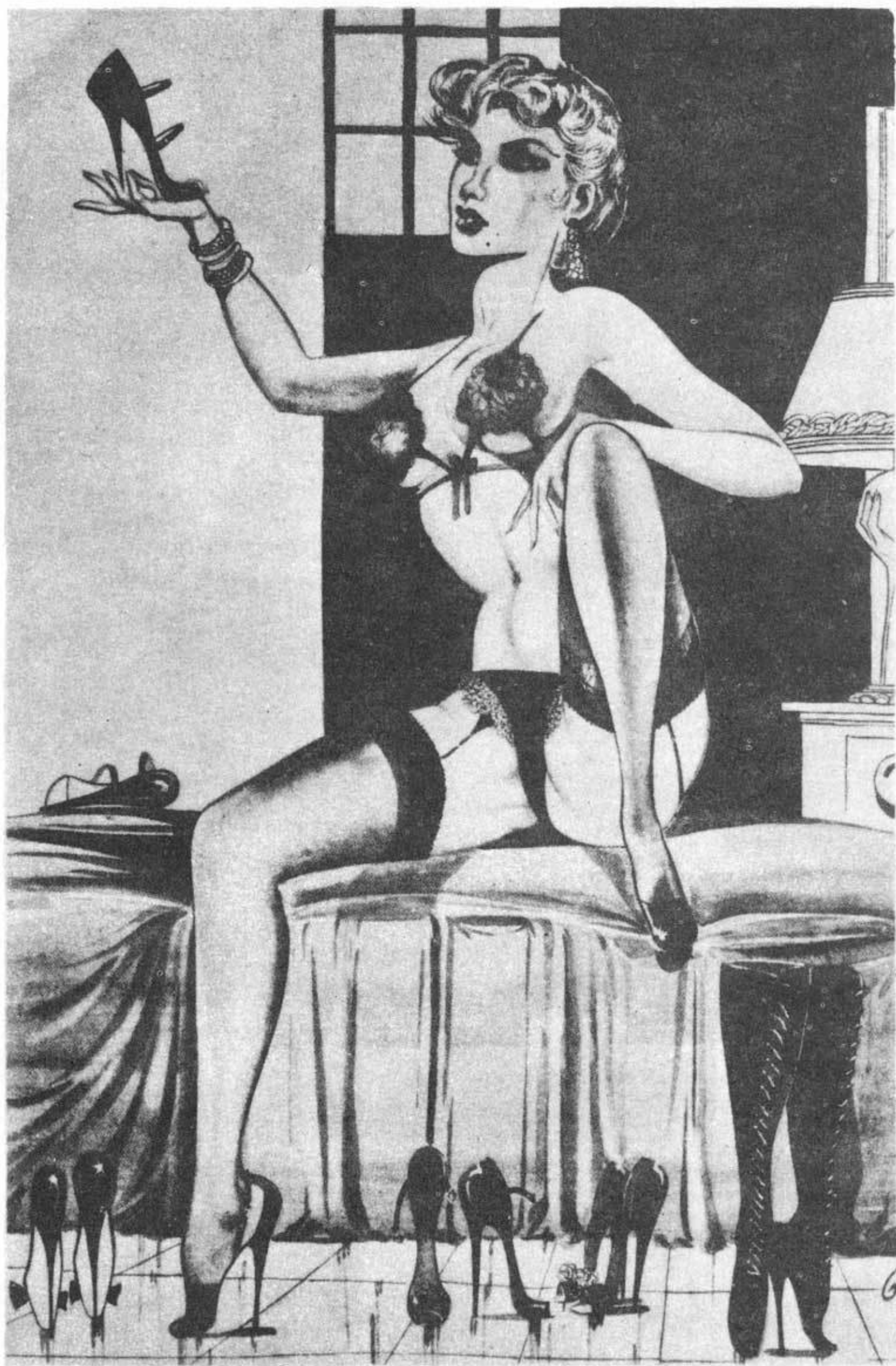
音を立てて落ちてくる水勢は次第次第に水嵩を増してくる。しかし、この地下の密室を脱出する道はない。



非情の棹

ぶくぶくぶくと沈んだ女の美しい顔がやがて苦悶
にあえぎながら、ぽっかりと水面に浮かぶ。





ハイヒール

「この靴が私の足に合うとお思いになって？」



脚線美

黒のナイロン・ストッキングに包まれた
この伸びやかな脚線美！

年齢職業別女性



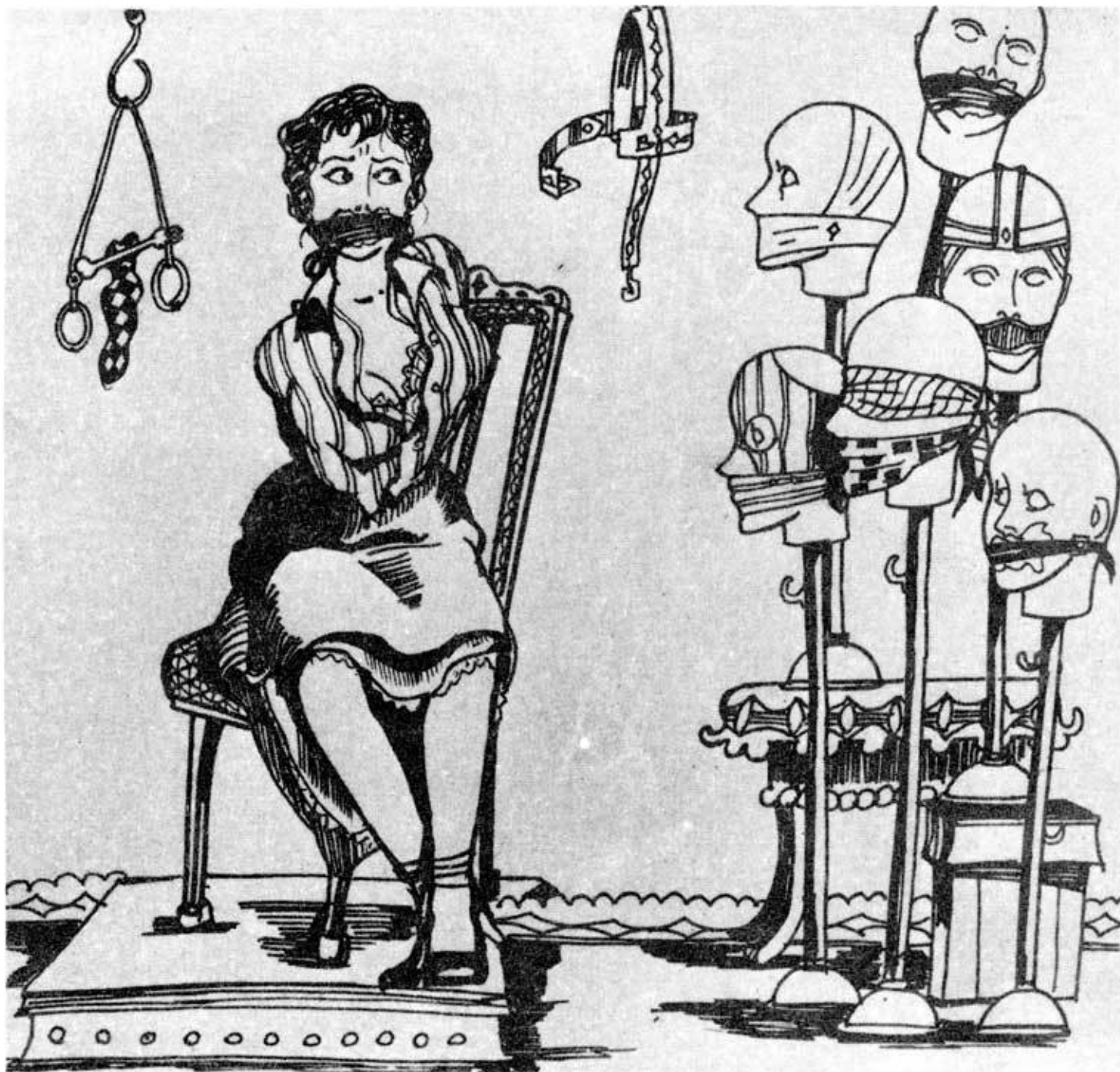
鈴鳴鳥居 (もがけばもがくほどに鈴が鳴る)



遠藤春一画伯個展



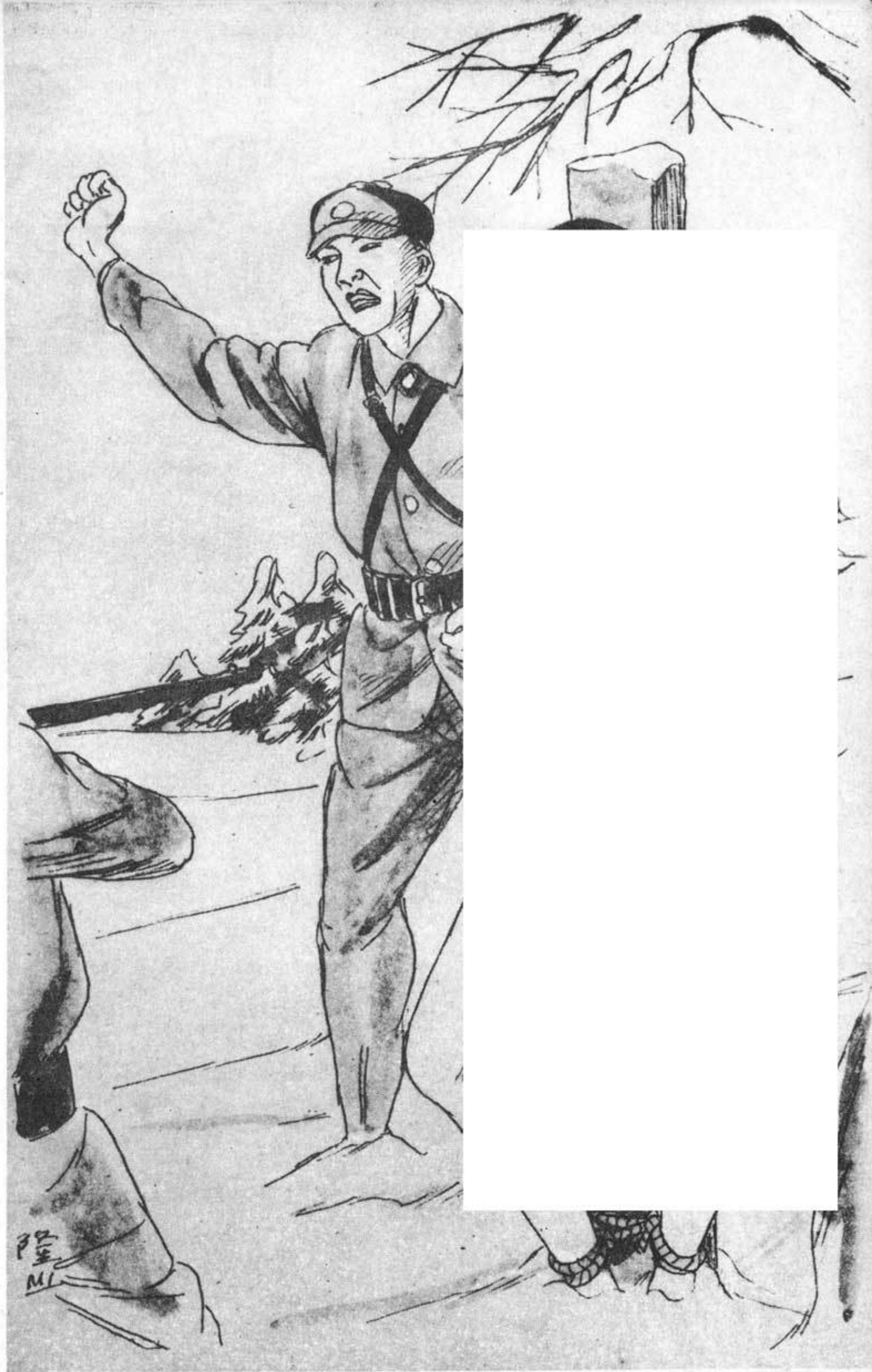
ガレージの花



猿轡実験室

少年受難シリーズ

雪中で銃殺される日本人少年





猿轡美人？

モデル 絹川文代





モデル 大塚 啓子

自由なき後手

縄に羞らう





モデル 前本 妙子





豊 胸

モデル
絹 川 文 代

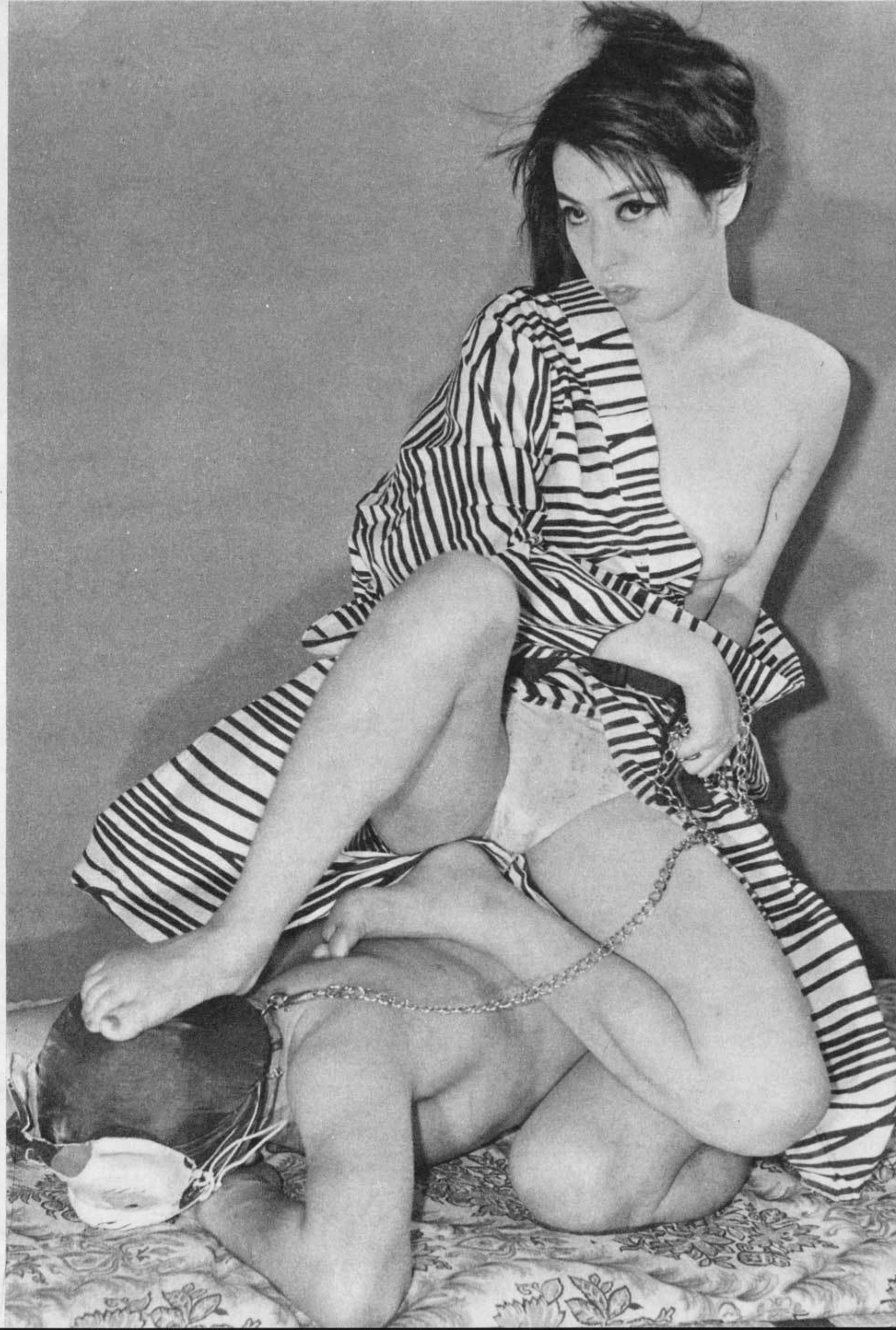


黒縄と縄目



モデル 絹川文代





お前なんか獣なみだ



素足がそんなに美味しいかい



フ、フ、フ、フ、くすぐったいじゃないか



切腹の幻想





モデル 絹川文代 大塚啓子



新しい風俗文献研究誌

奇譚クラブ

新装四月増大号

1961年 4月号

(第15巻 第4号 通刊第152号)



新装特大号発刊記念懸賞応募原稿入選作品

告白小説

白雲山のいきにえ

樺田 荒夫 滝れい子・画

(一)

山好きの僕は白雲山にも三回ほど登った事があるが、まだその周辺の全貌はほとんど知らぬといつてよかつた。

白雲山そのものは形のととのった休火山であるが、それを取りまく一連の峻峰は大部分が未開のまま取り残されており、うっそうと繁茂した原始のままの森林が果てしれずつづいてゐる。ふつう登山者が行くコースをとつても、登山バスの終点にこの高原唯一の山小屋があつて、そこと白雲山の間には黒岳、小岳、或いは衝天岳といったけわしい外輪山が横たわり、そのどれかを越えねばならなかつた。

た。更に月無山、天乳山、鷲が峰と連立する峰々のハザマには深い谷があつて、中でも一の沢、ソマガ沢など魔の谷と呼ばれる所に入りこめば、簡単にはぬけ出せぬといわれていた。それは両面の山が絶壁のように切り立っている上に所々に滝があつたりするからである。とにかく一応は白雲山に至るコースが開かれてはいるものの、それを踏みはずして森林の迷路に迷い込むのは相当のオーソリテイでも珍しくない事だつた。

しかもまかりまちがうと白雲山の前掛山と鷲が峰の間に広がる大笹原に出てしまふ。この笹原が人の背を楽々没するほどで、ここへ迷い入ったら最後、今までに一人の生還者もないといわれていた。

僕は復讐の場所にこの山を選んだ。僕を裏切った女をとことんまで虐げてやる為には、これほど恰好に用意された舞台が又とあるであらうか。

何も知らぬ山城咲子は——僕が彼女の裏切りを知っている事も知らずに——僕の言葉巧みな誘いにのって二人だけの登山に同意していた。もっとも彼女としては、これを僕との最後の思い出にするつもりで、なお自分の裏切りを——他の男と婚約した事を山頂で告白する気であったようである。

——もしミス・ミシン・コンテストなる催しが企画されなかったら、或いはそれが一年後に行なわれていたら、僕らは無事結婚して倅に暮らして行っただろう。僕らの関係は既に社内周知のもので、皆が祝福してくれていたのだった。昔はドン・ファンの悪名を冠せられた事もある僕だったが、この咲子に対してだけは正真の恋をして、その故に敢えてプラトニックなもの以上の接触も持たず、生まれて初めて長い将来の夢を見ていたのである。

咲子はコンテストの主催者の一人である、うちの社長の推薦で出場し、はからずも第一位に選ばれてしまった。そして一躍、業界の花形としてスポットを浴びた彼女は、日頃の慎み深さを忘れてしばらくの間、栄光の座に酔ってしまったのである。

これを浅はかだといって一方的に責める事は無理かもしれない。彼女でなくても平凡な女が急にそのような立場に立ったとしたら、誰でも同じ事になるだろうから。しかし咲子はこの間に重大なミスを犯してしまったのだ。僕の方からすれば、それはどこまで責められても仕方ない事だった。

彼女は社長の世話で、同業種の社長殿の御曹子と見合いをし、数

日を経ずしてエンゲージ・リングの交換をした。この事を消息通の同僚から知らされた時の僕の驚きと憤りはどれほどであったろう。

しかも例のように時々逢いびきを重ねていながら、咲子の口からはただの一度もそれらしい話を聞いた事はないのである。ただそうと知って思い返せば、徐々に変貌しつつあった彼女の態度に、その問題と符合する場面があったようだ。

ともあれ僕はそれを知ってから、自分から彼女に問いただす事はできなかった。それをいざとなると、口にする事が恐ろしかったし、その後の僕はどうすべきかについて頭の整理がついていなかったからである。しかしもはや何をいった所で彼女は決して僕のものにならぬであろうと悟った時から、僕は一途に彼女を憎みはじめた。そしてその憎しみがこの策略的な登山に結びついたのである。

山というものを全然知らず、そして山小屋で一泊して帰るつもりだった咲子は、黒のスラックスに白いブラウス、予備の毛糸のカーディガンという軽いでたちで夜行列車に乗った。しかし僕は山小屋の予約などっておかなかったし、第一、彼女に地図で示した地点は、小屋があるどころか人跡未踏の森林のまん中なのであった。

僕は一張のテントと携帯毛布二枚を持ち、一人なら優に十日分の食料と、彼女に使わせるための防寒具まで用意していた。その大荷物の上にピッケル、岩場登攀用のハートケン、ザイルまで背負った本格的な装備だった。

そのもののしさをいぶかしむ咲子に、僕はこう答えた。——君を帰してから僕は一人でもう少し歩くつもりなんだ——。

山小屋への近道といつわって潤葉樹と針葉樹がごっちゃんに密生した森の中を掻き分けて来たので、僕も咲子も首や手を引っかかり傷だらけにしていた。

白雲連山の中では一番小じんまりした子岳であるのに、その山腹をまわってようやく視界の開ける所へ出てみると、日足の長い夏の日もすでに西の月無山の頂きに没しようとしていた。断崖に近い急傾斜の足下を見おろすと、もはや夕暮れの重々しい影の中に沈みかけた谷底に、荒々しく水の流れる音がしている。

(一の沢だ)

僕は心の中でそう叫んだ。

(うまく行ったぞ。もう咲子は一人では戻れない！)

咲子は疲労しきった身体を草の上にかがませて、茫然と周囲を眺めていた。見渡す限り深い木々におおわれた山又山で、目の前の谷ぞいには岩肌をむき出した絶壁がずっと下流までつづいている。白



雲山は名も知れぬ山の峰のかげになって全然姿を見せていない。一体、自分達がどの方向に居るのかの見当もつかない。

「山小屋なんてないのね」

咲子は、だまされたと気づいて憤然とした面もちでいった。

「いや、そんな事はない。しかしどうも方向をまちがえたようだ。これは一の沢だから、とんでもない方に出ちゃったよ」

僕はそう、うそぶいた。

「だが大体わかってはいる。安心しろよ」

「ここからまだ遠いのでしょうか？」

「遠いな。今日歩いた道のりの半分はたっぷりあるな」

「いいわ、すぐに連れて行って」

彼女はむきになって腰を浮かせた。僕はいいよ彼女を手中に握る時が来たと感じて、思わず快心の笑みを洩らした。

「そうは行かぬ。もう一時間もすればまっくらになるんだぜ、ますます遠くへ迷いこんでしまうだけだ」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「どうしようもあるまい。この草の上で一晩中、坐っているか、それとも水のある所まで降りて飯をたいたりテントをはったりするかだ」

「私はいやよ。二人きりで寝るわけには行かないわ」

「仕方ないじゃないか。それに俺達は、そ

んなに困る必要ないだろう？」

この皮肉が彼女を黙らせた。

僕はザイルを木の枝にかけると谷に向かって投げおろし、それにすがって降りるようにせきたてた。咲子は抵抗を諦めてザイルに手をかけた。僕はそれを見てワクワクと胸のおどるのを覚えた。

（成功だ。僕を捨てて他の男に走った女をこれから思う存分、苦し



めてやるぞ）

——夜が来た。いくら真夏とはいえ海拔千八百米の山の夜は寒い。僕は火をどんどん焚いて暖をとった。そのかたわらを相当の水量の谷川が岩にぶつかり、所々の淵に落ちこんでとうとうと流れている。よく晴れた空には無数の星がきらめいて、人の世を遠く離れて来たなという感を深める。

僕は焚火ごしにじっと首を垂れてうなだれたままの咲子を眺めながら、幾度か彼女の背信の行為を責めたい衝動にかられたが、その都度、思い返して口を結んだ。ここまで来た以上、簡単に結末をつけたくはなかった。しかし彼女も僕の気持を感じとっていたに違いなく、僕と視線を合わす事を努めて避けていた。

僕は明日の行程を思いめぐらした。

明日もう一日は更に奥へ進もう。そして彼女の独力ではどうにもならぬ岩場に追いつけて、そこで徹底的に責めてやるのだ、と。

夜露が身体の上にも、しっぽりおり始めていた。一つテントに入る事をどうしても彼女が肯じないので、僕も諦めてテントの設営をできなかった。僕は二枚の毛布を二枚共、彼女の前に投げ出してやり、自分はテントを身体にまいて横になった。横になるとさすがに疲れが出て、僕はたちまち眠りに落ちた。

夜半すぎごろだった。ふと物の動く気配に目をさますと、消えなかった火を咲子が懸命に掻き立てているのであった。火はパチパチとはぜながら勢いをもち返しつつあった。そのあかりで細目にそつと彼女の顔を伺うと、今まで泣いていたらしく、目もとをすっかり腫らしていた。

(彼氏の事でも考えてやがったんだ)

と僕は心に呟いた。

(勝手にするがいい。俺はネムるぜ)

そして再び目を閉じた時、彼女の立ち上がる気配がした。見ると彼女はそつと藪の中に消えて行くのだった。僕はとっさに一計を案じて手もとの棒切れを拾うと、その藪のむこうめがけて力いっぱい投げこんだ。ガサッ、バサバサッと大きな音がした。

あわてて眠ったふりをしてしていると、案の定、びっくり仰天した咲子は用も足さないでとび出して来た。そして大急ぎで僕をやり起こすと、

「あなた、何かいるのよ、何か……」

と震える声でいった。

「そうか？、どの辺に？」

と僕は驚いてみせた。彼女は僕にすがりつくようにして、こわごわ指さした。

「熊じゃないか？この山にはたくさんいるらしんだよ」

「まあ、どうしたらいいの？こんな所にいて大丈夫かしら」

「だからテントに入ってるじゃよかったんだ。仕方ないさ。火でもどんだん焚いておけば近寄っては来ないだろうよ」

彼女は完全におびえ上がってしまった。そしてさっきまで決して

側へ来なかった癖にぴたっと僕にくっついたまま、大急ぎで木の枝を火の中に投げ入れた。僕は気づかれぬように笑いながらいった。

「その位燃えてりゃあ大丈夫さ。僕はもう少し眠るよ」

(三)

とうとう一夜眠れなかったと見えて、咲子を見るかげもなくすんだ顔をしていたが、今日も空はよく晴れていた。

炊飯をして食事を終ると、僕は、

「さあ出発だ。今日は山小屋へ連れて行ってやるぞ」

と咲子をうながした。彼女は物をいう元気もないほど氣力を消耗して、無言でうなずいた。

(この咲子を見たら、相手の男も落胆しないでいられないだろうな)

僕は冷酷な笑いがこみ上げて来るのをどうしようもなかった。あれほど美しくて魅力にあふれていた彼女が、一夜明けた今朝は出来そこなった土人形のように見えるのである。

僕は彼女の荷物——小さなリュックを自分の荷物にくくりつけていた。今日は昨日に増して強行軍するつもりだった。僕は谷川を渡って向う岸の山腹をのぼるのだと説明した。僕は手ぶらの咲子を先に立てて、膝から下をまくり上げて水の中に入った。川幅は三、四米といった所でそう広くはないが流れは相当に急で、部分的には膝を没するほど深かった。

咲子はおぼつかない足どりで一步一步、用心深く進んで行ったがともすれば流れに押しまくられてよろめき、倒れそうになって水の上に顔を出した岩の頭にしがみついたりした。始めは無事に渡りき

れるのだろうかと心配だったが、僕は又ふっと妙計を思いついた。そこでちょうど最後の深みを越えようと足さぐりしている彼女のすぐ背後に行つて、足をすべらせたふりをして「アッ」と叫びざま、へっぴり腰の彼女の背をトンと突いたのである。その時、正に片足を上げて向うへ踏み出そうとしていた彼女は、あつという間もなく足をとられて横転した。パチャーンと派手な水しぶきを上げて、その瞬間に全身——頭まで水中に落ちこんでいた。

僕は太あわてで手をとって救い上げた。彼女は髪から額から水滴をポトポト垂らしながら、茫然として立ちつくした。

「ごめん、ごめん、つい足をすべらせたものだから」

さすがに少し気の毒になった僕は頭を下げてあやまった。

「ともかく渡ってしまおうよ」

水から上がった咲子は文字通り全身ぬれぬれみだった。ブラウスもストラックスも身体にピタッとはりついて、水が音を立てて足もとに落ちていた。

（さて、どうしたらよいものかな）

僕はあたりを見まわしながら思索した。その場所は僅かに平らな岩盤があるだけで、すぐ背後は水にけずられた裸土がのしかかるように迫っており、その上は大きな木も生えぬ急斜面でつる草が一面にはっている。

しばらくすると高山の朝の冷気に、咲子は身体をふるわせ始めた。僕は荷物をおくと、谷水が運んだ枯木や、一年前の草の残骸を集めてとにかく火を焚く事にした。これはかえって厄介な事になったと思つたが後の祭である。

「君、着換えを持って来たの？」

枯れ草に火をつけて木の枝をくべながら聞くと、

「何にも持って来なかったわ」

僕は困つたなと呟きながら、ここで着ているものを乾かす他あるまいと考えた。

「仕方ないから、それ脱いで火にあぶろう。後を向いているから全部とって出したまえ。乾くまで毛布でもかぶってるといいよ」

しばらくして僕がふりむいた時は、咲子は背中からまわした毛布を前でしっかり合わせて、横向きに坐っていた。毛布の間からはかわいい膝小僧が二つ、ちょこんと並んでのぞいていた。

僕は木の枝の先にまだ雫の垂れているブラウスとストラックスをかけると、火の上にさし出した。時々焰がその裾をなめ、白い煙が包んだが、そうでもしなければすぐには乾かない。その他にもまだ肌着が残っていたが、腰までの白いシャツは木の枝にかけて火の横に立て、ズロースは彼女自身が片手をのばしてあぶっていた。

たとえ身体はすっかりくるんではいるものの、もう夫にもならぬ他人の前で、自分の下着をすっかり開けていなければならぬ彼女の気持はどうだっただろうか。彼女はわざと僕が押し倒したのだという事を知ってか知らずか、終始無言で無表情でいた。昨夜あたりから、今までの咲子に似ず、人が変わったように黙りこくっている彼女であった。この後も、最後まで彼女は寡黙な態度を取りつづけたのであるが——。

しかし、その時の僕の目には、自分のズロースを手でつり下げている咲子の姿は、あわれにも又ひどくこっけいであった。僕は手の重みも忘れて幾度となくその純白の下着を眺めと、その予期もできなかった異常な場面に失笑を洩らした。

二、三時間もそうしていたような気がしたが、正味は一時間位のうちに、それらは大体、乾き上がった。しかし白いブラウスはところどころ煙でうす黒くよごれ、スラックスの裾の一部分は焦げてしまっていた。僕はそれらを彼女の前に投げ出してやり、早く着るように、といった。彼女は小さな声で一言、ありがとうと答えた。

(四)

草の根にすがって谷底から山蔦の斜面まで這い上がると、上を見るのが恐ろしい位の、七〇度以上もありそうな勾配がどこまでもつづいていた。おそらくこの地点へ足を踏み入れたのは僕らが最初で最後ではあるまいか。普通ではとても人間の通れる所ではなかった。蔦の根もとをさぐりながら、それに全身の重みを托してよじのぼるのである。もしそれが抜けでもしたら——と、余り気持ちのいいものではなかった。

僕は咲子を先に立て、時々足を支えてやったり、ヒップを押し上げたりした。僕は彼女の身体に触れるのはこの時が初めてで、その感触も体温も元来、好色な僕の血をわき立たせた。

でも、もう愛情というものは伴っていなかった。この肉体も他人のもので、二度と僕の腕の中にまかせられる事はないのである。そう思うと憎くもあり、どんな陰呑な道でもこのまま永遠につづけばよいとも思うのであった。

しかしその斜面は僕の堪能するまではつづかず、やがて猫の額ほどの平地に出、そこからは多くの亀裂や大小の岩塊が重なりあった岩場になっていた。それはどれもこちらへせり出したようになっていて、無手ではどう見ても登る事は不可能であった。

咲子は苦勞して這い上がって来た。ほとんど断崖にも近い後を見かえり、又目の前に手をかける場所もない岩を眺めて、絶望的な表情をした。僕はひとまず汗をふこうと思つて腰をおろした。そして岩肌にしがみつくようにして深い谷底を見下ろしている咲子にも休もうというと、彼女は応じもせず蒼ざめた顔で云った。

「こんな所へ連れて来て、どうするつもりなの？あなた、でたらめに上って来たんでしょ」

僕も実はこんな岩塊に遭遇しようとは思っていなかったのだが、彼女ほどは困惑していなかった。この山は前掛山の一部で、それほど峻嶒な場所がつづく訳ではないと地図の上からは読み取れていた。(事實は案に相違して、僕にとつても相当な難所の入口だったのだが)そこで僕は、彼女をおびやかすつもりで笑いながらこう答えた。

「この岩をのぼるのさ。探せばどこかに小さな足場があるだろう。その代り足を踏みはずしたら谷の底まで転落するだろうがね。まあ命がけだけれど、それが山というものだよ」

「私いやよ。もうこれ以上、登れやしないわ」

「そんな事いったって仕方あるまい？。もう一度ここを下るとして命がけだし、どうせ又、昨夜の所で野宿だぜ。僕はもう一度、熊におどかされるのはご免だな」

「……」

「今日は早く山小屋へ着きたいよ。君だってそうだろう。さあ出発しよう」

彼女は再び無言になると、非難の目をじっと僕に注いでいた。僕はその目を避けて周辺を探ると、足場になりそうな亀裂を見つけて

ハーケンを打ちこんだ。それから彼女の胴にザイルを巻きつけた上で、自分が先に岩を越えた。彼女は僕にザイルを引かれながら、必死の形相でのぼって来た。そして僕の横に立つとほっと息を洩らしたが、しかしザイルを解く訳には行かなかった。驚いた事には岩塊がまだ幾重にも重なり、その先には小型ながら本格的な岩壁が立ちはだかっていたのである。

しかしもう一直線に前進する他なかった。僕はあの岩壁も登攀で



ず、暖をとる事もできない。僕はまだ陽のあるうちに適当な岩のくぼみを見つけて、そこで缶詰類でも食って一夜を明かす事に決めた。咲子はそういったも答える力もないほど疲れ切っていた。

僕が見つけた岩は、ハーケンを使ってテントをはるとそれではぼいっぱいの広さだった。今度は咲子も否まず、中に入って毛布にくるまるとすぐに横になった。

僕は急ごしらえの副食だけの食事を整えると、咲子をやりおこし

きるだろうと踏んだ。岩壁の上には、なだらかな稜線が走り、まばらに松が生えていた。

だが最後の岩壁にかかる日が暮れ始めた。僕は全然、無経験で全面的に僕の力に依存している咲子相手では、もう三時間はかかるだろうと目測して、途中で登攀を諦める事にした。しかし困った事には、焚き木もなく水もない岩盤の上であつた。炊飯もでき

た。彼女は眠っているのではなかった。声をしのばせて泣いていたのだった。彼女は起きあがると激しい口調で僕にいった。

「あなたは嘘をついてわざわざ私をこんな所へ連れて来たのよ。もうはつきりわかったわ。一体それは何のためなの？男らしくはつきりおっしゃい」

僕はその氣勢の強いのに驚いたが、愈々彼女を詰問する時がやって来たと思った。そして瞬間的に一年来の二人の關係と、その頃の彼女とを脳裏に描き出した。すると急に怒りがこみ上げて来て、僕も彼女に負けぬ語勢で口を開いた。

「ああ、僕は君を欺いていた。君の想像通りだ。始めからそのつもりだったのだ。なぜかって？。それは……」

僕は次の言葉の選択に迷った。これをいうためにここまでやって来たのだから、愈々となるとつい興奮の極に達してしまったのである。

「君自身が知っているんじゃないのか。君は何か僕にいわなきゃならない話があった筈だろう？。君はまだそれを僕に話してないな。今まで僕を欺いていたな。だからそれを聞くために、僕も君を欺いて連れて来たのだ。僕は君を憎んでいたのだ。さあどうなのだ」

咲子は、さすがにがっくりうなだれた。そして両手で顔を掩ってしまった。

「僕はとうから知っていたのだ。苦しかったぜ。君ほど卑劣であさましい女はないと思った。よくも平気で僕と口を利けると思った。そして、この復讐を思い立ったのだ。僕は君を、僕が味わったと同じ分だけ苦しめなければいけないと思ったのだ。そしてやっとここまでたどりついた。勿論、山小屋なんてありはしない。明日も又

果てしない山中をさまよう事になるだろう。しかしそのために来たのだ。僕は君をすぐには帰さないぜ。君を苦しめるのは、これからのだからな」

感情はこの上なく昂ぶっていたが、それ以上いう言葉はなかった。咲子もじっと顔を伏せたまま一言の弁解もしなかった。僕はそれを太々しい寸逃れの態度だと思った。そして非常な憤りを感じて最後に一言いい放った。

「僕は決して君を許さんぞ！」

(五)

カンテラの灯が無言で坐っている二人を照らし出していた。激情の瞬間が去った僕は空腹を覚えて箸をとった。

「君も食うのだ。もし生きて帰れたかったら、食っておくのだ。明日の岩登りは空腹では持たないぞ」

そういうと咲子はじつとうつむいたまま箸をとった。そして肉と野菜の缶詰をつつき出した。

僕はその彼女を横目でにらみながら、リュックの中から用意の小便をとり出し、携帯コップを二つ並べると、その一つに半分程、ドロリとした液体を注ぎこんだ。そして水筒の水を入れてかきまわすと、もう一つの水だけのコップもかきまわして、二人の前においた。

「飲みにくいかも知れないが、これは疲労回復に利く薬だ。一息に飲むんだ」

僕は真水の方をとって、いった通りに一息に飲んでみせた。咲子も真似をして口をつけたが、一口含むと顔をしかめた。

「鼻を閉じて飲むんだよ。一口に飲んでしまわなきゃだめだ」

彼女はいわれるままにぐっとあおった。そして何ともいえぬ顔をすると、嘔吐を押さえるように口に手を当てた。

「さあ、水を飲めよ」

僕は真水をいっぱいについて出した。彼女は大あわてで飲みほした。

僕はそれを見て腹の中でふふんと笑った。彼女が今飲みこんだのは大量のヒマシ油だったのである。

その夜半、注意深く眠らずにいると、彼女はそっとテントを出て行った。出て行っても一人で、しかも夜中ではせまい岩の上をテントから二米と離れる訳には行かなかった。僕は奇妙な、喜びとも幻滅ともつかぬ気持ちで耳をすましていた。そして明朝、いやでもその残骸が目に触れる所にあるだろうと思うと、その時の咲子の顔が目に見え、まず一つの復讐をとげたと、ほくそ笑みたくなるのだった。

朝目ざめると、彼女はまだこんこんと眠っていた。僕はその後姿を見ながら、昨日、彼女の身体を押し上げた時の感触を生々しく思い出した。それは男である僕にある種の衝動をかり立てたが、僕はそれをこらえた。そのかわり僕はナイフの刃をひらくと、そっと毛布の裾をはいて、腰の辺りのぬい目の糸を切った。彼女は何も気付かずに眠りつづけていた。ストラックスはタテに十センチほどほつれ、白い下着がのぞいた。僕はそれだけでやめて再び毛布をかけて、今日の行程で彼女が知らずに見せるだろうあさましい情景を心に思い描いた。それは小気味よい満足を僕にあたえた。

(六)

昨日までの天気代って、今朝は満天厚い雲におおわれていた。これは日中に一雨来るのじゃないかと思われた。こんな場所で雨に見舞われたら最後、どうにもしようがなくなる。その上、炊飯もできず水もない。僕は咲子をゆり起こして出発の用意をした。

二日間の強行軍と精神的なショックで咲子は身動きもだるそうにしょげていた。それも無理はないので、僕でさえ太股の筋肉が少し痛むのであった。しかし雲行きが怪しいのを見ると、ぐずぐずしていられず、彼女を追いたてるようにして次の岩にとりついた。

二人の身体はザイルでしっかりつなぎ合わせたが、どうもそれだけで彼女を引き上げるのは無理になっていた。そこで大した岩でなくても意外な難渋を味わわねばならなかった。僕は残り少ないハーケンを平凡な岩場にも打ちこんで足場にし、自分が先にのぼってザイルを上にかけてから再び元の岩に降りて、後から咲子を押し上げてやらなければならなかった。

しかし僕の目には、彼女のほころびたストラックスからはみ出す白い下着が、ちらちらと映った。彼女はそれに全然気付いていず、僕の鑑賞をほしきままにしていた。もしこの情景を誰かが見ていたら何と思うだろう。黒い布地からまるとび出す白いズロースは、檻の中の猿が羞恥を知らずにさらす赤いぶざまな尻を連想させた。

それはともあれ、悪戦苦闘の半日だった。最後の垂直に近い岩壁に挑んだ時は、疲労と空腹とで力がぬけて、全身の重みを托したザイルを握る手がずるずるとすべって、あやうく転落しそうになった。

僕はようやく岩場を脱し、松の古木の生えている峰に達すると、

その幹にしっかりとザイルを結びつけ、下にへこたれている咲子を荷物を引き上げるように引っぱり上げた。彼女は岩壁に足を支えるのもおぼつかなく、僕の傍までたどりついた時は、手足や顔をまるで擦傷だらけにしていた。時計はすでに午後の時を刻み始めていた。

長く休んでいる訳には行かなかった。冷たい風がサワサワと松の枝を鳴らし始め、雲足は早くなっていた。空腹と疲労と寒さと、この上、雨でも来たら百%遭難コースである。僕らのいる場所は白雲山に尾根つづきの前掛山の一部であって、水の得られる谷間へ下るか頂上を越えて笹原の平地へ出るかしなければならなかった。笹原は名だたる魔の場所である。しかし谷といってもこの長い尾根を下って又、優に半日以上のコースになるだろう。しかもソマガ沢の方向になる。僕はまず雨になる前に峰を越えてしまふべきだと判断した。

しかし咲子はぐったり倒れこんだまま容易に起き上がろうとしなかった。僕は彼女の胸を幾重にもまいたザイルを手にとって邪慳に引き起こした。

「こんな所で死にたくなかったら、もう少し辛抱するんだ」

僕は彼女をぐいぐい引っぱって尾根に立った。所が目の下に樺や雑木と、その間に一面の熊笹の密生した広漠たる大笹原を望みながら、そこから下ってゆく場所のないのを発見した。そこは今登攀して来たばかりの岩壁と同じ勾配で、屏風の一面のように屹立しているのであった。僕は仕方なく尾根づたいに迂回して下る他ないと判断した。

尾根は又つま先上がりになっていた。胸のあたりをぐいぐい引かれながら、咲子は足をもつれさせ、何度となく前かがみに転倒した。僕はしまいには腹を立てて、彼女の腰にザイルを巻きなおし、後か

ら股間を通してしめつけてT字型の股間しぼりにした。ザイルは彼女の腹部にくいこんだ。

しかし彼女はもう抵抗する気力もなく、ただ「死にたい」と呟いているのであった。僕はそれを聞きとがめもせず、に又ぐいぐいと引いて歩き出した。彼女は下腹部からのびたザイルを両手で握って、よたよたとした足どりでついて来た。

ようやく尾根から下る場所を見つけると、今度は僕が後になって転落しそうな彼女を引きとめつつ行く番だった。タテにしめこまれたザイルは、白いブローズの中にくいこみ、その脚の間から僕の手握られたザイルがピンと伸びて来ていた。僕は絶えず反り身になりながら、その人間とも思われない奇妙な咲子の後姿を眺めていた。

(この恰好を彼女の相手の男に見せてやりたいものだ)

と僕は又考えた。すると勝ち誇った優越感がわいて来て僕は疲れを忘れてしまふのだった。(テン、テン、テン)と僕の心の中にはどこかで聞いた猿まわしのツツミの音が鳴っていた。全く山猿でも捕えて山を下る狩人のような気がした。

すぐ眼下に見えている平地が山では案外、遠いものである。途中で咲子はついに横ざまに倒れ、四つ這いになって起きようとしたが、そのままぐったりしてしまった。僕はいらいらして、その丸く突き出た尻をザイルの先でピシッと叩くと

「何てブザマな恰好してるんだ。君のストラックスは大きく破れてるんだぜ」

そういいざま、その破れ目に手をかけてピリッと引き裂いてみせた。その音に驚いた咲子は反射的に起き上がって手をやった。しか

し僕を横目でちらっと睨んだだけで、疲れて物がいえなかったのか、諦めてしまったのか一言も発せず、又よろめく足を踏みしめて一步、雑木の中を下って行くのであった。

幸い笹藪の中に下りおわると、湿地があつて水のたまっている所があつた。僕らはすぐに腹ばいになって口をつけた。まる一日、一滴の水ものまずに汗を流したあとの冷たい水は実にうまかった。

やっと落ちついて今下った山を見上げると、僕らの後を追いかけるように霧がまき始めていた。又、尾根つづきに望まれるはずの白雲山の雄姿もすでに霧の中に没して見えなかった。僕は疲れも忘れて大急ぎで焚き木を集め、テントをはり、飯を炊いた。その夕食のうまかった事は、この二日後の悲劇の思い出と共に、終生忘れられないに違いない。もっとも余りの身心の疲労に咲子は殆ど箸をとる事ができず、彼女には無理矢理、少量をつめこませたのだった。

彼女は僕の出した防寒具と毛布とをくるくる身体に巻くと、たちまち眠りについたが、足腰の痛みに輾々反側し、小声で呻きつづけていた。その動物的な声が耳にさわって僕は仲々寝つかれず、サワサワと風にゆすぶられる外の笹の葉の音を聞きながら、さまざまな事を思案した。

（もう三日目だ。会社でも気がついて心配しているだろう。まして相手の男はどう考えているだろうか。もしこの二人の行動が知れたら結婚話はオジャンになるに違いない。そうだと面白いぞ。俺は決して彼女の潔白を証してはやらないからな。しかし、もう薬は十分利いたろう。少し気の毒な気もするな。だが俺はまだ堪能して居ない。もう少し、もう一日は責めつづけてやろう。彼女がついに音を上げて許しを乞うまではな。そうだ、明日は一つ総仕上げをしてや

ろう。そこで一体どうしてやったらよいか……）

そのうち、僕もだんだん意識がモウロウとして行って、いつしか眠りに落ちてしまった。

(七)

四日目——朝から厚い雲が空をおおっていた。咲子はもう完全にグロッキーで、見る影もなくやつれた青い顔をしていた。

僕はこれ以上、笹原を奥へ入りこむと危険だと思って、頂きは雲の中に没した白雲山の雄大な山腹を目標に、前掛山の裾ぞいに一直線に進む事にして、咲子をせきたてた。彼女は太儀そうに僕のあとについて来たが、それも始めのうちだけで、しだいに遅れがちになった。

何しろ頭上を越すような大笹藪なので、かき分けて行くだけでも容易でなく、時々気がついて見ると彼女の姿は笹の葉に遮ぎられて見えない。そこで急いで戻ってみると咲子はしゃがみこんで休息したりしているのであった。

「こんな所ではぐれたらどうするのだ。一人じゃ決して帰れやしないのだぜ。愚図愚図しないで来るんだ」

すると、いったんは腰を上げるのだが、しばらく行くと又姿が見えなくなってしまう。

僕はとうとうしびれを切らして、又彼女の胴をザイルで縛った。彼女は引きずられるようにして足を運んで来たが、又気がついてみるとザイルは解き放たれて空しく尾を引いている。

咲子はもうこれ以上の行軍が堪えられぬという風に、笹の上に横になっただけであった。

「こんな所で眠ってしまうつもりか。冗談じゃないぞ。今度はザイルを解けぬように、手も縛ってやる」

僕は彼女を起こすと、胴を三重にまわして縛り、手首を前に重ねてぐるぐる巻きにして歩き出した。咲子は僕のなす事に何の抵抗も示さず、一言の言葉もなく身をまかせていた。しかし今度は笹に足を取られて何度か横に倒れた。そのたび横腹に手をそえて起こしてやらなければならなかったが、彼女の手や首に突き傷、葉の切り傷が出来、血がにじみ出していた。

毛糸のカーディガンも所々ほころび、その下のブラウスやスラックスもカギ裂きが出来た。それでも僕は容赦なく進んで行った。傷だらけになり、よろよろと引かれて来る彼女を少しも気の毒だとは思わなかった。

そのうちとうとう雨滴が落ちて来て、笹の葉をパラパラと鳴らし出した。空を見ると雲の色ばかりでなく茫とかすんでいる。これは本格的に来るぞ、と思う間もなく、たちまちサーとしげくなり、荷を下ろすうちにも篠つく雨に変わった。

僕は太急ぎで笹を踏み倒し、刈り倒してその上にテントを開げた。その下の部分だけでも濡らしてはまずいと思ったからで、それから支柱を出し、急ごしらえの設営をした時には、アノラックを着ていた僕はともかく、咲子は全身びしょぬれになっていた。

彼女はまだ手を縛られたままで、髪からもカーデ



イガンやブラウスからも、雫を点々と垂らしていた。僕はザイルをといてやり、テントの中に押しこんで、毛布を投げ出してやった。「さあ、全部脱ぐんだ。雨がやんで火が焚けるようになったら乾そう。それまで寝ていたまえ」

だが狭いテントの中で裸になるのは、やはりためらっていた。カーディガンはとったが、ぴたっと身体にはりついたブラウスやスラ

ックスはとうとうとしない。その癖、寒さでかすかに身震いしているのである。

「恥しがってなんかいられるか。さあ全部とるんだ」

僕は強制的に命令した。

僕はじっと眺めていてやろうかと思ったが、さすがにそれはできなかった。で、後でぬれた衣服を一枚一枚ぬいで行く気配を目をつぶって聞いていた。

雨はテントの上を滝のように流れおち、いつ止むとも知れなかった。咲子はズロース一つになって毛布を巻きつけ、厚い笹のしとねの上に横たわっていた。

僕は毛布を二枚とも貸してやり、自分はカンテラに火をつけて、シューシューと噴き出す火に手をあぶっていた。

彼女の脱いだものは、テントの入口近くに一山にまとめられてあった。僕はそれを一枚一枚手にとつてぎゅうっとしぼった。水がポタポタと笹の葉の中に落ちた。

開けてみると、ブラウスにもストラックスにも大小の破れが出来ていた。バラや木の枝にかけて引き裂かれた跡である。それを僕は彼女に気付かれぬように更に大きくした。そしてストラックスの後のほつれは、ほとんど上から前の部分に至る迄裂きひろげた。それから唯一の白い下着にも大小の切り傷をつけた。あとでそれを知ったら、咲子はどんな顔をするだろう。しかし糸も針もない山中で、つくろう手段もないのだ。



僕は肉体的に直接の凌辱は加えぬかわり、こうして精神的な責苦を充分味わわせてやるつもりだった。

(八)

半日降りつづいて雨はまだやまなかった。そして不気味な寒い夕刻が忍び寄って来た。

それまで眠っていた咲子はむっくり起き上がって、茫然と外の激しい雨音に耳をすました。そして毛布を巻いたまま外に出ようとし

た。僕はあわててそれを押しとどめた。

「そのまま出られちゃ困るよ。その毛布まで濡らしたら、今夜一晩どうするんだい。トイレならこの隅でしてしまえよ」

咲子はしばらくためらった。が外に出るのを諦めて坐りこむと、虚ろな目を向けてこんな事をいい出した。

「もうがまんできないわ。私死んでしまいたい。死んだ方がいいわ。外に出て雨に打たれて凍え死んでもかまわない」

そしてあつげにとられている僕の前で、急に毛布をパツとはぎとると、ズロース一つの姿で入口の垂れ幕に手をかけたのである。

僕は彼女の足をとって引き戻した。

「馬鹿な事をしちゃ困る。雨が止むまで待つんだ」

しかし彼女は僕の手を振りはらって半身を外に出した。僕は大きわてで肩をつかみ、力まかせに引き入れた。

「絶体、出さないぞ」

咲子はペタンと坐らされて嗚咽し始めた。

僕は始めて見るかつての恋人の裸身を眺めながら、どうしたらよいものか思案した。

放っておいたら彼女は本当に外へ出て、どこかへ走って行ってしまっただろう。この冷たい雨の中で、しかも夜が迫っている。それは彼女の言葉通り、死につながるかもしれないと限らない。

咲子の両手の間から涙があふれて筋を引いていた。しゃくり上げるたびに、豊かな胸が可憐な乳首まで震えている。そして寒さで総身肌立っているのだった。僕は彼女の気が落ち着くまで動けぬようにしておく他ないと思って、彼女の身体に毛布をかけて、その上からザイルを巻き始めた。

もう何度も縛られた彼女は、それほど抵抗もせずじっとしていた。

咲子は肩から足の先まで、首だけを残したまま芋虫のようにくくられて伸びていた。僕は風邪でもひかれると面倒だと思って、毛布の上から身体の前足を手の平でこすってやった。そうしていると僕までが熱くなってくるので、疲れるとやめ、寒くなるとくり返した。

咲子は又いつのまにか眠っていた。その寝顔は不思議に安らかに見え、ミス・コンクールに出場した頃の美しさが甦ったようで、僕は何故か、はっとした。

僕の手にはいつしか愛を与える時のような力がこもり、心の中にも不可解な渦がまきおこっていた。僕は「畜生！」と叫んでみたが、どうも憎しみが力を失って、表面に出て来ないのであった。そのかわりに彼女を抱きしめてやりたいという衝動が起って、僕はとまどった。

（ずい分、怪我をしたな。すっかり治って以前のような顔に戻るには何日かかるだろう）

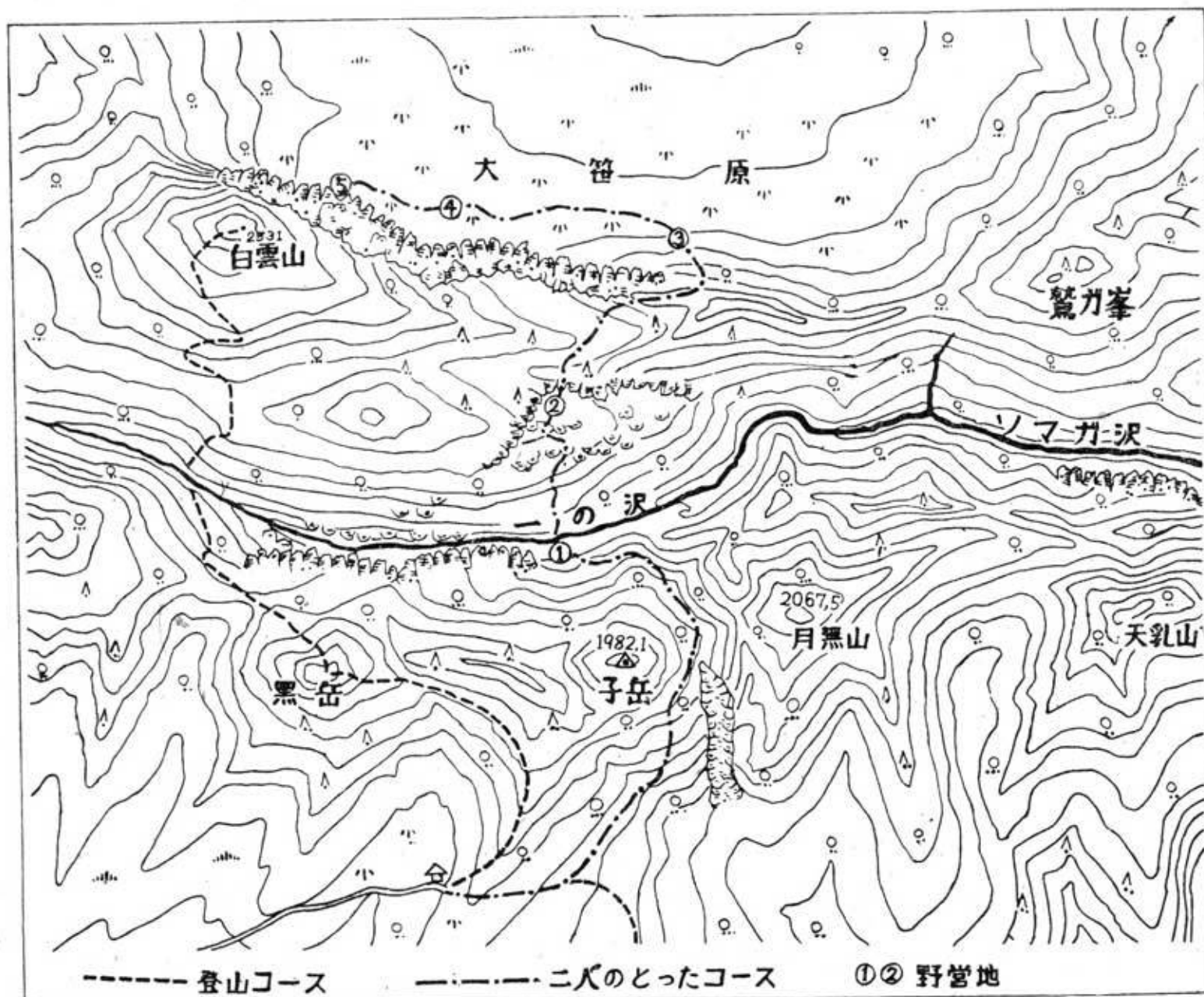
そんな事が心に浮かんたりして、僕は少々悔恨の情を催おしていた。

（よし、明日は一路、帰る事にしよう。もうここまで来れば、目的は達したというものだろう）

僕はそう考えながら、一方では自分の弱さに腹立たしい気がして、マッサージをやめ、彼女の身体と背中合わせに横になった。

——翌朝は嘘のように、からりと晴れ上がっていた。

僕はまだしつぽりと露の残った笹を刈り集め、石油をかけながら



点火した。もうもうと煙ばかりが立ち上がったが、それでも火はできた。僕は水筒の水を使って飯を焚き、そのかたわら、つききりで笹をくべながら咲子の衣料を火にあぶった。

今日は帰途につこう——という気持は昨夜と変っていなかった。しかし、ここからどういうコースをとればよいのか、僕にも見当がついていなかった。ただ白雲山の峯に出さえすれば、以前来た時のコースをたどって行けそうだった。それにしても一日の行程では、無理だった。もう一夜どこかで野営しなければならなかった。それを僕は白雲山のこちら側の麓と決めた。

咲子はどうに目ざめていたが、ザイルをといても起きては来なかった。着る物が乾くまでは寝ていた方がいいといっておいたのである。しかしブラウスとスラックスだけが乾いてもなかなか出て来なかった。

「毛布をよごしてしまったわ」

テントの中からそう呟く声が聞こえた。昨夜来、一度も用便に行かされなかったために、眠っているうちにやってしまったのである。

「仕方がないさ。あとで乾すさ」

と僕はいった。

どうやら乾かすべきものは乾かし、テントをたたんで出発の用意のできたのは正午近かった。僕は前方にくっきりと聳える白雲山を目ざして歩き始めた。

咲子も大分、元気をとり戻して笹をかき分けてついて来た。途中で小休止をした時、偶然、咲子の背後にまわった僕はびっくりした。

彼女は粗相したズロースを思い切りよく捨てて来たと思えて、スラックスのはつれの間から素肌がのぞいているのである。それは白い布地かと見まがいそうであったが、明らかに美しい肌なのであった。咲子はつとめて後を見せまいとしていたが、隠しおおせるものではなかった。僕は気付かぬふりをした。

「これから最後の難関だ。あの山に登りさえすれば、ちゃんとした道があるからね」

僕は白雲山を指しながらいった。

彼女は、ちらとそちらを見ただけで、しかしもう大した関心は示そうとしなかった。

(九)

夕刻まぎわになって僕らはようやく白雲山の下にたどりついた。

しかしそこで、僕はこの大笹原がどんなに恐るべき場所であったかを初めて思い知らされたのである。

簡単に峰に出られると考えていたのが大間違いであった。どこまで捜してみても殆ど垂直に立ちふさがった岩壁がつづいていて、登攀の手がかりを見つけることは不可能であった。

僕はあわてた。せめて水のある場所を捜して一夜の宿営の準備をしようと思ったが、固い岩盤と密生した笹原の世界ではそれも難しいのであった。

もう昨夜の場所まで戻る事もできなかった。日が暮れて笹の中をさまよう事は、盲滅法、大海に小舟を漕ぎ出して行くようなものである。

僕は岩壁からくずれ落ちた岩石の累々と重なり合う上を、咲子を

先に立てて用心深く歩いてみた。テントを張るのに都合のよい平地を捜すためだった。咲子のスラックスからはまっ白な肌が惜し気もなくこぼれて、迫り来る暮色の中に一輪の美しい幻の花のように見えていた。

咲子はもう芯から疲労しつくして居た。羞恥も何も感ずるゆとりもなさそうであった。ちょっとした岩を越えるにも、両手について這いのぼらなければだめであった。

——僕はもう、始めの目的の復讐という気持をすっかり失っていたけれども、それでもそれはここに完全に達せられたというべきであらう。

僕を裏切った女は、遂に僕の目の前に精も根もつき果てて屈服したのだ。今や彼女は自分の羞恥を僕の視線の前におおうべきで知らない。

その最後の夜はとうとう固い岩の上におとずれた。僕らは空腹をかかえたまま、綿のような身体を岩の上に横たえた。テントは今にも倒れそうに歪んでいたが、なおす元気もなかった。

明日はどうしたらよいのか、僕にも何の思案も浮かばなかった。この岩壁にアタックする事は、もう彼女の体力では不可能であったし、ここまで来た行程をもう一度引き返すか——それにはもう食料も足りない。

いつまでも眠れずに輾々としてみると、咲子が異様な、苦しそうな呻きをあげた。カンテラの光で見ると、額に玉のような汗を浮かべている。

驚いて手をあててみると、すごい発熱であった。連日の過労が遂にたたったのだ。

懸賞原稿募集

☆規定☆ ☆賞金☆

告白と手記と体験記

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表後一月にお送りいたします。

僕はなす所を知らず、ただ汗をふきとってやる外なかった。名を呼んでも答えない。

そのうちに悪寒が襲ってきたらしく、ガタガタと震え始めた。僕は毛布の上から全身マッサージをつづけた。

しかしそんな事では治まらなかった。そして彼女は人事不省に陥った。

疲れた頭で、僕は自分の罪を痛烈に意識した。どんな理由があるにせよ、今日までの行動は常軌を逸した残酷なものだった。しかしもう遅い。一体どうしたらよいのだ。

その夜は、まんじりともせずに咲子の看病で明かした。

彼女は夜明け頃、少し落ちついたと思うと、血の混じった胃液を吐いた。そして激しく下痢をした。

僕は自分でも訳のわからぬ涙を流しながら、丁寧に汚れ物の始末をした。

よく晴れた空に太陽が高くのぼっても、咲子は意識をとり戻さなかった。

十時頃だったろうか、突然、白雲山の峯の方から爆音が聞こえ、ヘリコプターが一機とんで来た。そして僕らのテントを見つけると頭上を四度五度、旋回して、僕が手をふって救出を求めるのを見ると、機上の人も手をふりつつ、又、元来た空へ消えていった。

救援隊の人々が来たのはその夕方だった。僕は何もかも終ったうつろな気持で、彼らがすぐ近くの岩壁を巧みに下りて来るのを見ていた。

咲子はすでに、ヘリコプターの去った直後に落命していたのだ。とうとう二度と意識をとり戻す事もなく。

僕は彼女が冷たくなって行くのを、まるでこの世のでき事とは思えない奇異な思いで見守りつつ、それでも救出された時の事を思つて、彼女の肌のよごれをきれいに拭い、髪もなでつけて、破れたスラックスは針金でとめ、手を胸に組み合わせ、できるだけの事をした。

彼女の顔は、疲れにやつれてはいたが、僕を恨む気持も見せず、安らかな、美しい表情をしていた。

——それから三月たった。彼女は大笹原に迷いこんで決して生還せぬという、昔ながらのいいならわし通りの犠牲者として、山城家の墓地に葬られている。僕は罪人にはならないですんだが、心の中には一生、最も愛する者を自分の手で殺した罪が、消えずに残るだろう。

(終り)

処刑あれこれ

中谷

純



絞首刑

「刑場の隅で手錠をかけられた死刑囚の顔は真青だった。看守に支えられるようにして死刑台に立つと、天井から吊り下っている縄が首にかけられる。死刑囚の立っている床の下は掘割になっていて三メートルもあるうか。準備が終ると、合図とともに、看守が歯止めの取っ手を押すと床が落ちる。次の瞬間死刑囚の身体は掘割に宙ぶらりんになって、手錠のかかっている両手が反射的に頭のところまであがって、苦しそうな表情でピクピク動いていた。だがしばらくすると……」――

これは、さる高名な人の検事時代の思い出の一節である。

次に、これは検事ではないが、絞首刑に立会ったことのある知人の話によると、踏み板が落ち、犠牲者の身体が宙に吊られた時、首のあたりでボキンという音がしたそうである。これは、身体の重みと、それが落ちる勢いで、頸の骨が折れた音らしい。そして、絞首されると、脳髓に血が通わなくなるのでとたんに意識不明に陥るとのことである。

話は少しそれるが、此の意識不明に陥るという点については、次のような事例があっ

た。それは、か弱い一女性が屈強な男を締め殺したと言う事件で、果して其の様なことが可能だったかどうかと言うことが問題になった。普通に考えると、男が眠って居るとか、余程ボンヤリでもして居ない限り、か弱い女性等に締め殺される筈はないと思え様が、実際には、法医学の専門家の話しによると、組紐でもマフラーでも、或いは場合によってはハンカチでも、首に巻かれてグツと思いに締められてしまうと、とたんに意識不明になるので、大の男が殺されることもあり得るのだそうである。又、昔こんな例もあったと言う。橋の手すりに背中荷物を置いて一休みして居た行商人が居た。其の荷物が、向う側に転げた拍子に首が締ってしまい、其の儘意識不明に陥って往生を遂げてしまったと言うのである。何れにしても、強く首を締められると、脳髓に血液が通わなくなる。血が通わなくなると、酸素の供給が断たれる。酸素が行かなくなると、人間は意識不明になると言う。これは、其処迄行なくても、私達も、疲れた時とか、血のめぐりが悪くなって、頭がぼんやりした時に、首筋を揉んで血のめぐりを良くすると、頭がはつきりすると言うことは屢々経験するところであろう。

扱て、絞首刑はハタから見ると、宙吊りの身体がはげしく揺れたり、足の指が弓のように曲ったり、それから全身をケイレンさせた、遂には終末呼吸運動と言って、大きな息を空しく行ったり、果ては脱糞する等、非常に苦悶して居る様に見えるが、実際は、先程から何度も言っている様に、もう意識不明になって居るので、本人にとっては苦痛でも何んでもないのである。(強いて言うなら、寧ろ恍惚境と言えるのかも知れない。)

それよりも、寧ろ絞首台に上る迄が苦痛ではないか。愈々これから死刑を執行すると告げられると、大抵の者は腰が抜けた様になってしまつて、絞首台迄独力で歩いて行けず、看守に抱えられる様にして運ばれる者が多いと言う。それで、以前は、絞首台と言って高い台で、これを上ったのであるが、今では平面にしてあり、これだけでも多少は受刑者にとって心理的に楽になったと言う。執行に先立って菓子を与えられると言うが、末期の菓子とは何かワケがあるのだろうか。ゾルゲ事件で死刑になった尾崎秀実は、「如何に僕が食いしん棒でも、これだけは食べられませんか」と苦笑したそう。幕末の志士で処刑された者は沢山居るが、その中で、頼三樹三郎

は朗々と詩を吟じ乍ら斬首場まで濶歩し、吉田松陰は黙々として歩を運んで、共に斬首された。処刑が済んで、両名の罫丸を更めてみた処、三樹三郎のは萎縮して居たが、松陰のは常と変りが無かった——と言う話しは有名である。東京裁判で処刑された東条、広田以下は、当時の教誨師の話しによると、立派な最期だったらしいと言う。「らしい」と言うのは、最後の絞首場面には、日本人はオフ・リミットだったからである。ガタンと言う音や「万才」と言う声は聞えたと言う。ニュールンベルグの人々も仲々立派な最期だったらしい。リツベントロップ等、後手に括られて半眼を開き乍ら、力強い足取りで十三の階段を上った由。ただ、ニュールンベルグの場合絶命後の死体を並べて写真に収めて全世界に流して居たが、当時は未だ戦争の興奮も醒めず、又、見せしめのつもりだったのだろうか。聊かあくどい感じである。流石に東京裁判の時は、写真等一切撮らせず、ただ、各国の代表を処刑に立ち合わせて、証拠に代えた。

銃 殺 刑

今迄述べたのは主に絞首刑の關係が多かったが、軍関係では銃殺が普通であらうし、又

戦犯処刑の際は、絞首の外に銃殺も広く行われた様である。山下奉文將軍は平服で絞首刑本間將軍の場合は軍服で銃殺刑であった。そして、山下將軍については「一市民として処刑される」と特に注釈が付いた。これは、日本の昔風に解釈すれば、山下將軍は破廉恥罪として斬罪、本間將軍は武士として切腹を賜わったということにもなるうか。銃殺と言えば第一次大戦の時のマタ・ハリに模した「間諜X二十七号」とか言う映画があった。主演はデートリッヒで、処刑のため牢から引き出される時、案内に來た士官の剣の抜き身を鏡にして髪の毛のはつれを直すところ等、繊細な女心が良く現われ、それから、射殺される時は眼隠しを拒み、銃撃を受けるやバツタリ倒れるところなど、真に迫るものがあった。

電 氣 刑

電氣刑はアメリカの州によって行われてお

り、何年か前にローゼンバーク夫妻がこれで処刑されたのは、読者の記憶に新たなところであろう。ただ器械や電流の強さ等、両者共に同じ条件だったと思われるのに、夫人の方は仲々死に切れず、三回許り余計に電流をかけ直した由。これは矢張り、女性の方が皮膚脂肪に富んで居るとか、心臓が強いとかで、最後の瞬間迄男性より長生きするような仕組になって居るからであろうか。拷問等受けても男の方が簡単にネをあげても、女の方は仲々頑張ると言うこととも、何か関連があるのかも知れない。貴誌の緊縛モデルにしても、よくもあれだけきつく縛られても我慢して居ると感心して居る。男だったら一遍にネを上げてしまふだろう。扱て、電氣刑の場合、数回のショックを加えて四分半で絶命するのが普通であると言う（絞首刑七十五分、ガス三十秒足らず）。私達は電氣と言うと、例えば雷に打たれたとか、高圧線に触れたとかを想像し、一瞬の裡に即死する様に思うが、電氣刑ではそうではないらしい。然し、四分半でも考え様によっては短い時間で無いし、況してローゼンバーク夫人の様に、又三回もかけ直されたら、苦しくはないものだろうか。夫

上の方に伸したと言うが、無意識の裡だろうか、それとも、苦しさの余りだったのだろうか。電氣刑の場合も絞首刑の場合と同様に、最初の一撃で意識を失ってしまつて、後はただ肉体が反射的に動いて居るだけのものだろうか。此の事は実験によって証明済みのものであるうか（此の実験は難かしくはないか）。人道主義のアメリカで行われて居ることだから、ヌカリは無いと思われるが。私が小学校の時、電氣のことが無類に好きな友人Kが居た。其のKの家に友人Mが遊びに來た時、KはイタズラにMに電氣をかけたところMは大変な苦しみ様だったそうで、翌日学校でKは「M君は死ぬかと思った」と言っていた。どんなやり方をしたのか聞いてもみなかったが、電氣は普通の家庭であるから百ボルトの電燈線を使ったのであろうが、危いことをしたものである。電氣刑の原理は、身体の一部に陽極を、他の部分に陰極を繋いで、体内に電流を流す、即ち人間の身体の中で一種のショートを起こさせるのであろうか。考えても余りいい氣持のものではない（死刑の方法にいい氣持のものはあろう筈はないにしても）。

ガ ス 刑

ガス刑もアメリカの州によって行われていたことは、映画「私は死にたくない」で御承知の方も多いであろう。映画によると、ヘイワードは、控え室からガス室に続くジュータンを歩くに先立って、靴を脱ぐ様に命ぜられるが、彼女はこれを拒む。ここで一悶着あるが、結局靴を脱いだ。理屈から言えば、どうせこれから殺されるのだから、靴位脱がされてもよいではないかと思われるが、其の期に及んでも、靴を脱がされるのは、屈辱というか羞恥と言うか、イヤだと言うのは、これも可憐な女心と言うものであろう。ガスが充満し、ヘイワードの苦悶の表情が、全身と、それから手指のアップによって刻々と捉えられて行く。そして最後に、指先の力がガククリと抜けたところを大きく接写することによって「絶命」を示したのは印象的であった。

ガス殺が第二次大戦中、ナチスのユダヤ人虐殺に広く使われたことも周知く知られている。これは一番手っ取り早く、大量に処刑出来ると言う意味で用いられたものである。ギロチンも、フランス革命の時に大量処刑を行う必要からギロチン氏によって発明されたが、後に至って、このギロチン氏もギロチンによって首をハネられたと伝えられる。

変った処刑

昔から、処刑の方法は随分、色々あるだろうが、私が変わったと思ったのは、世界美術全集に収められている奉西名画で、ゼラール・ダビッド作「シサムネスの死刑執行」(ブルジョア美術館蔵)である。これは同じく「カムピセス死刑を宣告す」と並べて収められているが、シサムネスが台の上に仰向けに寝かされ、両手首は夫々台に括られている。そして所謂生体解剖を受けているのである。メスを持って居るのは四人で、一人はしゃがんで右手の上膊の皮を剥いでいる。あとの三人は立った儘で、一人はミゾオチの所の皮をスリットと縦に切ったところ、一人は左手首を握って上膊の皮を正に切ろうとしているところ、それから、もう一人は、腿から甲迄をすっきり切って脛の皮を剥いでいるところ、従って脛は全部赤黒い肉が露出している。シサムネスは手を握り、口を喰いしぼり、目を大きく開いて痛さをこらえている。これは、単なる想像画ではなく、実際あったことだろうが、何んとも残酷なことである。

歴史上の十大処刑

歴史上の十大処刑等と言ってみても、手許に何んの資料も無いし、基準になるものもなく、ただ思い付く儘に拾ってみるに過ぎないが、(1)何んと言っても先ずキリスト (2)それから毒を仰いで殺されたソクラテス (3)ずっと下って、イギリスのチャールズ二世世かの処刑(衆人環視の広場で) (4)ジャンヌ・ダークの火刑(これは映画ではマゾ女優イングリット・バーグマンの独壇場。手錠を嵌められる手指の表情迄大きくアップで撮らせる) (5)フランス革命のルイ十六世 (6)同じく皇后のマリー・アントワネット (7)ロシア革命のニコラス二世一家 (8)第一次大戦中のマタハリ (9)ニュールンベルグの戦犯 (10)東京戦犯、と言うところか。第一次大戦後に連合国の間で「ハング・オブ・カイザー(カイゼルをくびれ)」の議が起ったが、カイゼルは逸早くオランダに逃亡し、オランダ政府は身柄引渡しを拒んだので、カイゼルは処刑を免れた。

ルイ十六世は、刑場で彼の手を縛られ様とするといやがった……断頭台にのぼり、何か言おうとして前に飛び出す様に進み出様とし……その瞬間に、世にも恐ろしい叫びが一つ聞えたが、其の声は、落下する刃の音にかき消された。

皇后のマリー・アントワネットは、夫君より九カ月後れて処刑された。後れた理由は明らかでない。彼女は絶世の美人で、其の美貌に憧れた者は三千人を越えたと言われる。此の皇后、誇り高い髪は短く切られ、後ろ手に縛られて、荷車でギロチンに運ばれた。もう人間扱いにされなかったのだらう。しかし、流石に刑場に引かれて行く途中も、処刑の時も、少しも悪びれたところが無く、立派な最期だったと言う。

此の革命の時は、王の一家を始め貴族達が随分たくさん処刑されて、為めにセーヌの流れの水の色が変わったと言われる位に、世界の歴史を赤く彩った。

ロマノフ王朝最後の皇帝ニコラス二世とその一家の場合は、皇帝とその家族（皇太子及び四皇女）その他、合計十一名は、地下室で「あなた方一家を死刑にすることになった」と告げられ、皇后は驚きの余り椅子から飛び上り、皇女は顫えて声も出ず、皇帝だけが一言二言口を開いて何か言おうとしたが、銃声にかき消され、続いて起る銃声に一家は朱に染ってバタバタとたおれ、それから棍棒や銃剣で、苦悶するところを止めを刺された。最後迄生きて居た第四皇女のアナスタシアは、衛

兵に仰向けに転がされ、ライフル銃の台尻で撲殺された——と伝えられるが、後に生存説も流れて映画にもなった。

なお、日本の歴史ではどうか。キリスト教の迫害、八百屋お七、白木屋お駒、幕末の志士その他、色々あるだらう。

奇クと処刑

処刑と言うことは、普通には、刑罰として又、革命等に附随して行われる残酷な行為として理解されるが、これを全く違った角度からみると、サドとマゾの極致の境地とみられないこともない。

古来、文学や芝居等で処刑が語られたり演じられたりするものは、ただ残酷ということになしに、そこに美しくも悲しいロマンチズムが繰りひろげられて居るのではないか。これを読んだり視たりする方も、胸をえぐられる様なサド気分になったり、しびれる様なマゾ気分になることも多いのではないか。

そこで、私は思うのであるが、奇クも従来のに緊縛其のものを主体とするもの許りでなしに、偶には処刑の悲しさや美しさを盛つたものも加えてみることを考えてみたらどうかと言うことである。読者通信欄等を見ても時々其の様の希望も出て居る。もちろん最初

から完璧のものは望まない。一つの将来への手がかりをつくるだけでもよいのである。緊縛にしても、ここ迄来るには十年の歳月がかかっている。処刑場面も未熟でよい。

幸い、奇クの十一月号をみると絹川嬢がいみじくも次の様な珠玉の言葉をはいっている。

「挙げられた言葉の中、関心をひかれる順に書きますと——絞首台、打首、縛られる、女囚、足枷、素足、足指、責め……」(七五頁)

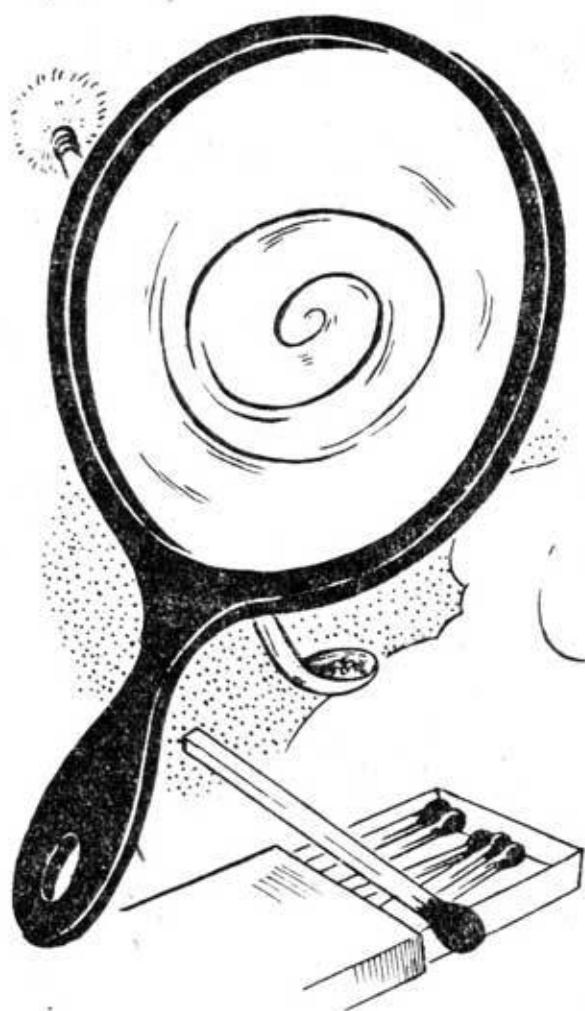
「黒いイブシのかかった足枷を足首にされて、ハダシで道を歩かされる、といったのは一度やってみたいと思います。……」女囚処

刑の図”は見えていませんでお答えしかねますが、時代劇の映画でハリツケになったり、馬で引廻しになったりという場面は好きです、自分もそういうヒロインになってみたい気がします。そういった死に直面した際の若い女の色気というものを出せたらと思います。……おっしゃるようなジャンヌ・ダークや八百屋お七、或は白木屋お駒のようなヒロインだったら十分感じを出せるつもりです。うんとむごたらしく、しかもうんと美しいものにして残しておきたいような気がします。」(七六頁)

(完)

告 白 的 隨 筆

臍 相 の 四 季



須 藤 律 夫

春
(渦巻型)

もう大分前の話であるが、或る隨筆集を読

んでいたら、こんな自由詩が載っていた。
春日臍を弄ぶ
うらら春の日 縁に寝ころび

着物はだけて 日に干す腹に

ふと見出でたる お臍の穴よ

子供の時に 弄びしまま

臍垢とらむと 頸曲げみれば

お臍は凹みて 臍垢は見えず

痛む頸骨 撫で叩きつつ

マッチの棒で 奥ほじくれば

漸く出で来し 臍垢ひときれ

ああ

二十余年の 長き年月

自由になぶった お臍の穴は

腹の中へと 凹みにけりな。

麗らかな小春日和、南向きの縁側に寝転んで、お臍のごまを取っている光景が目につく。之と同じ様な述懐は野一色幹夫の粹筆集の中にも見えているが、一度位は経験のある人が多いのではなからうか。

幾ら大きくても平坦な、或いは浅いお臍だとかまは余り溜らない。之に反し、渦巻型に深く凹んでいると、垢も溜るし、第一取り除くのに仲々苦労する。従って冒頭の詩にもあるように、普通マッチの軸木などで取り除くのだが、長くやっているとう首が痛くなるのも無理はない。

産婦人科医の小倉清太郎博士は、その粹筆

集の中で、之に關した面白い体験を述べているので茲に御紹介しよう。

内外タイムス四七八号所載、粹人醉筆欄
“お臍の掃除”より抄出——。

浅草の花街に、麻雀のめっぽう強い妓がいた。年の頃は二十五、六歳、小またの切れ上った粹な女で、私などもよく麻雀をしたが、この妓に一つ悪い癖があった。カンが強いと言うのであろう。暇さえあれば耳の穴の掃除を始める。それが昂じて臍の穴まで掃除しないと気がすまなくなり、耳かきの先で臍をほじくり乍ら、安眠をむさぼるようになった。或る晩の事であるが、彼女は床の中で何時ものようにウトウトしていると、旦那から電話がかかって来た。やれ嬉れしや、と飛び起きた拍子に、耳かきの先が臍の穴に刺さって仕舞った。急をきいて駆けつけたら「痛い痛い」と呻っているのを布団をとってみると、この始末である。素早く抜きとり、事なきを得たが、危く腹まで突き刺さるところであった。

(中略) 子供の頃「臍のごまを取ると風を引く」と教えられたので、私は今なおお臍をその儘にしているが、耳の穴の掃除は好きだからよくする。(後略)

同じ様な事が前後して、日本観光新聞にも載っていたのは面白い。同誌、性科学講座“臍生態学”と言う囲み記事である。

(前略) 女の臍は例え汚れていても、一般男性は余り気にしないものだが、婦人科の医者と言う奴は、元来がつまらぬところを扱って暮している人間のせい、女性の臍が時たま大変気になる。赤坂あたりの誠にきれいなお姐さんの臍の中に真黒な垢が一杯溜っていて、それが外側にまではみ出していると言ったのにつかると、悲しい幻滅を味あわされる。然しこの“臍のごま”と言うのは、昔から余りはじくらない方がよいと言われているので、つい不精して手入れを怠るのが常だ。

(後略) (産婦人科医長・松窪耕平)

花も散って、晩春の汗ばむ季節であった。或る夕暮に京橋、大根河岸の畔りを歩いていると、薄手のセーターを捲り上げ、歩き乍らお臍のごまを取っている二少女に出合った事がある。“無邪気さ”と笑ってしまえばそれ迄だが、筆者にはそれ以外にも嬌々とした余韻を残すものがあった。

夏 (菊花型)

今年の夏は珍らしく晴天続きで雨らしい雨も殆んど降らなかった。その為か逗子、葉山など湘南の海辺は日曜毎に大変な人出で、それ丈に又、千差万別の臍態に巡ぐり合えたのである。何と言っても夏は裸の季節であり、ビキニスタイルの女性にしたところで“お臍の魅力”を十分に發揮出来る絶好の機会であろう。海の彼方では今年もビキニ型が大分流行ったと言うが、不幸にして筆者は僅か四、五人を見かけたに過ぎなかった。波打際を二三人、連れ立って歩くビキニ・スタイルの女性——それを後ろから各々そのお臍の形を当てる。穴の大小はもとより、深さや、さけ目の具合、縦長や、横長等々、名づけてヘソカルチョーとか言っていたが、面白い肉体ギャベブルではある。

浅草、花屋敷の出店の様な小さな遊園地に遊んだ時の事、ジュースの自働販売機に近寄って来た中年紳士の腹を見ると、典型的な菊花型の臍をしていた。ぱちりと開いて奥迄が見え、何の屈たくも無さそうなお臍である。俗に“お臍を出していると涼しい”と言うが、こうした臍はごまも余り溜らず、臍の底が絶えず外気に触れているので涼しいので

あろう。正に空冷式のお臍である。

その釣り堀では珍らしく、雷魚とか、虹鱒などが人気を呼んでいたが、一心に釣り糸を垂れていた小肥りのビキニ女性も、まろやかな腹部に相応しい、美事な菊花型の臍をしていた。風俗文献社刊、「匂える園」上巻の中には、次の様な一章があるのである。

―神々は又、研ぎたる刃の如き睫を添え、愛情そその眼を授け給えり。まろやかなる腹素晴らしき臍、美しさに輝き出する脇腹と、襷を設け、堂々たる腰を与え給い――云々。この型の臍は女性には一般に鮮いと言われているのだが、兎に角、立派なお臍である。

秋 (未完成型)

全映画人卓球試合の行われた、或る年の秋である。北区の日本フェルト迄出かけた私は偶然にも肋木に逆返りする数人の少女を見かけた事がある。勿論、少女達は無心に遊んでいるのだが、逆返りの度にスカートは下りパツもずれて、何の事はないお臍の陳列なのだ。然もそれが揃って未完成型なのは示唆されるものがあった。浅く凹んだ臍輪の中には臍乳頭がちょこなんと覗いているこの型は

一説に、未完成型ともいわれているが、相手が少女であってみれば無理もない事である。但しこの型も腹腔の弛緩により様々に変化する事がある。

冬 (横裂型)

之は私にとっては背徳の、或る不倫な想い出ではあるが、佳人と綱島温泉に遊んだ時の事である。俗に言う一盗、二婢、三妓、四妾五妻の中、この「一盗」つまり人妻との情事が、何故か私にスリルとサスペンスを感じさせ異様に昂ぶるのであった。降り積った雪の為めか、夜半の底冷えは益々耐え難くコーヒー色に沸かされた家族風呂に飛び込むと、少し遅れてT子の脱衣姿がくもり硝子に映った。人妻とは言え二十三歳の彼女の肢体は、未だ汚れを知らぬものの様に、均斉がとれて締まっている。ゆでた蟹の、鉄の中の肉の様――と、或る作家がそんな形容をしていたが、実際、彼女の上体はすんなりとして、その肌は白桃の様に輝いていた。心のよりどころのない淋しさに、幽かに戦くような喉笛のあたりはむしろ憂愁さを感じさせる。私の視線が小高く盛り上った胸から徐々にさがっ

て、豊かな腹部の広がり注がれた時、私は又しても前記匂える園の一章を想い出しているのだった。同誌第二章、称讃に価する婦女に関して――の項には

――上半身と腹は広く、乳房はかたくて胸一杯になる。お腹は正しく釣合がとれ、ひろがって深い臍をしている――とある。稍横に長く、奥深く凹んでいる横裂型、この型は通例「栄養過剰型」と言われているが、彼女の場合はよく緊った腹筋にマッチしているためか其処には何の不自然さも見られなかった。「T子のお臍は随分、奥が深いね」私が冗談交りに指を突き入れて笑うと、

「お臍深いでしよ。でも、あたしこの頃、便秘しているのよ。お腹が張っているからかしら」彼女は軽く私の手を払い除け乍ら、はにかんだ。

以来、二人の交情は四、五年も続いたのだが、或る霧深い冬の夜、横浜埠頭での別れが最後となった。私は彼女がその臍相の様に、うるおいと、深みと、広さのある、第二の人生を辿っている事を信じているのだが。

奇譚三十九夜物語

― 第四夜 ―

辻 村 隆

一九六一年の初会の夜――

×

×

×

八人の退屈男は一人の欠席もなく、お互にお目出度うを繰り返して、深々とソファに沈みました。ワインの応酬――ドライジン、ウイスキーアブサンのカクテルで、通称「地震」と呼ばれる強い奴をぐいぐい煽るワイン氏は、流石に酒仙の名に恥じぬ猛者でした。

毎度のリクエスト曲は、マーティ・ロビンスの「アラモの歌」です。ジョン・ウェインがこの「アラモ」の製作の為、全財産、千二百万ドルを出したという超大作に、敬意を表して、芸能方面のワイン氏がリクエストしたのです。

西部をホーフツとさせる雄大なリズムに人々はしばし、この新しい曲にきき入りました。

久し振りにナイロン氏が立上り、曲の終るのを待って、愉しげに語り出しました。

第一話「O嬢の物語」に似た話

「最近、清水正二郎の『O嬢の物語』を読みました。サジズムとセックスがこれ程結びついた物語は珍らしいようです。奇クの方針として、セックスに関する描写は必要以上に努めて避けるようにしている。一部の読者からも、これに対し、余りにも回避し過ぎる」との声もあると聞いていますが、この小説ぐらい、大胆にズバリと書けたらうれしいですね。それにつけても、これによく似た話が大阪にもありました。やはり露骨な描写は避けた方が無難なので、その方は皆様の御想像に任せるとして、話と云うのはこうです」

○子が鹿兒島の先端の指宿いぶすきから、集団就職で来阪し、美容院に勤務して、三カ月余り経った或る日曜日、独りで大阪の街に出たのがそもそもあやまちのものであった。

○子は噂にきいていた新世界の通天閣に昇って見たかった。一望の眺望の許に大阪を俯かんし、大層おおらかな気持ちになって、エレベーターで下界に降り立ち、扱、これから、映画でもと、一步盛り場に足を踏み入れた時、年の頃十二、三才位の少年が、いとも心易く声をかけてきた。

「姉ちゃん、ボクが案内したるか。お金いらへんで、心配せんかて——」

○子はこの親切な少年に、急に親しみを感した。

「じゃあ案内してくれる——」

「ああ、いいとも。姉ちゃんの家、何処や——」

「家は遠い鹿兒島なの。三月程まえ、大阪のキタの美容院に就職した許りよ」

「ほんなら大阪初めてやな。よっしゃ、任しとき——」

少年はにんまりと北叟ほくそ笑んで、彼女と並んで歩き出した。

天王寺動物園の前の道路まで来ると、少年は呼んだ。

「ああ、ええ工合に兄ちゃんの車空いてるわ。あれに乗せて貰うたらええわ」

その言葉につられて彼女は、その辺りに駐車している車の群の一台の、ダットサンに少年と共に近寄った。

「頼むぜ——」

「ああいいとも。さあ、お嬢さん、乗っとくなはれ——」

兄ちゃんと呼ばれた黒眼鏡の男は、きさくに扉を開けた。フラフ

ラと○子は思わずのり込むと同時に、少年はパタンと表から扉をしめて、さっと走り去った。

何処をどう走っているのか、俄かに彼女は心細くなつて来た。男はある街角で急にストップすると、待っていた様に一人の男が走り出て、ものも云わず、○子の横に座り込んだ。○子の唇は蒼褪め、激しい動悸が、自分にも分る程に波打ち始めた。

「静かにしいや、これやで。——」

男の手にはいつの間にか、鋭どい千枚通しが握られて、その錐先が、○子の脇腹を小突いた。

白昼、公然と○子は誘拐されていたのである。

随分、走ったのだろう。車の数も大分途切れて、アスファルトの路だけが平坦に続いていた。自動車は或る一軒家で止った。

「さあ、降りるんや。逃げてもあかんで……」

震える○子の背をドンと一押しして、家に入ると、流しの揚蓋をめくりあげた。暗闇に急な階段がついている。

「必要以外、もの云うたらあかんで——。ものいうたら、これを喰わすぞ、わかったな。」

男は太い棍棒を振っている。

「厭です！ 助けて……」

「くそっ、もの云うたらあかん、あかんいうのに——」

いきなり棍棒が○子の尻をどやしつけた。

ヒエーッと、○子はその場にくたくと崩れるように倒れた。

「さあ裸になるんや。独りで脱ぐか、それとも脱がしたるか——」

「ぬ、ぬぎます——」

粗々しい荒木でつくった、これは戦時中の壕の名残りでもあろう。

冷たい湿気を含んだ微臭い匂いが激んでいる。赤茶けた豆球が一つポツンと薄暗い壕を照らしている。

○子は云われる儘、おずおずと一枚一枚脱いでパンティ一枚になった。

「それもとるんや——」

「これだけは……」

「ええ、又いらんものを云う——」

ズシンと鈍い音を立てて、○子の尻に棍棒が打ち下された。

「只とはいわんで、日当は一日五百円やる。一週間どうしてもお前が必要や。お前と同じような女が外に三人いる。これから、お客さんがくるまで、按配仕込んだるさかい。一切ものを云うたらあかん。わかったな——」

○子は恐怖に縮み上って、黙ってうなずいた。

「さあ、これで約束通り四人揃うた。お前が最後の一人と云うわけやったな。仲間に入れたるから、その眼の前の黒いカーテンを引いてみい——」

○子は云われた通り、こわごわ、そっとカーテンを引いた——。

「あッ！」

恐怖の声が○子の口からはとばした。

それは何と異様な光景であつたろうか——。

床より高さ三尺許りの個所に、両はしを鎖で吊下げた部厚い足枷の板が、足首の寸法の丸い穴を、正確に約五、六十糎の間隔をおいてあけられ、若い女が両股を開いて、その足枷にしっかりと足首を箴められ、腰を宙に浮かせ背で辛じて支えて並んでいたのである。右端の二つの足枷の穴が人待顔に空いていた。男は○子を引曳って

ゆくと、その片脚を掴み上げて高々と引き上げ、掛金を外すと、素早く足首に嵌込んだ。続いて片脚もそれから五、六十糎離れた穴に嵌め込まれた。○子は悲鳴をあげて泣き叫んだ。

鈍い音が壕内に響いて、棍棒が○子の尻に飛んでいた。

男は○子の両腕を固い革靴で踏みつけて押えろと、ペンチをとり出して、無理矢理に彼女の口をこじあけた。舌が千切れるくらい引っ張り出されると、男は用意して来た二本のスプリングの頑丈なベルトを舌に挟んでしめつけ、それをうなじに廻してぐいと締めた。○子の舌は約二寸許りも外に伸びた儘固定された啞のようにア、アと云えるだけで、完全な嵌口具であつた。両手首に皮輪を嵌め、それを後手で連結させた。

男は三百ワットのフラットランプを二個、彼女達に当てた。

ドヤドヤと足音がして、四人の紳士風の何れも黒眼鏡をした男達が入って来て、愉しげに女達を眺めた。口々に何か囁くが、その言葉はききなれた日本語ではなかった。何れかの東洋民族でもあるうが、男達はてんでに懐から財布を出し、相当厚目の札束を男に手渡していた。

○子を吊り下げた男は去って、国籍不明の四人の紳士が残った。

四人の紳士は、くじを引いていた。察する処くじの順序で、自分の好みのタイプの女を選ぶ手配らしい。順序が定まったのであろうか仲良く四人の紳士は彼女達の前に立ちあはだかつた。

掛声と同時に、一斉に女達の体に鞭は振り降された。一振り二振り、○子の体にも、他の三人の女にも、等しく桃色のみみず腫れが縞になって、体を染めていった。彼女達は、声にならぬ声を振りしぼり、吊られた足をばたつかせ、腰をくねらせ、背を弓なりに反ら

して、尺取虫のように、うごめきのたうった。鞭が腰に腹に、乳房に、肩に、腿にと、ところ嫌わず飛んで、そのゲームは一向に終わらなかつた。

五十も打ったであらうか。誰かの制止と同時に鞭打ちは又、一斉にピタリと止んだ。

ピクピクとけいれんし、辛うじて蠢めいている彼女達の体を、彼等は仔細に観察し乍ら、互いに声高に笑い声を立てる。各自の鞭打ちの腕前と、正確さを語り合っているようであつた。



○子は、全身飛び上るような激痛に、身動きもならなかつた。冷たい床が、背や肩の痛みを、徐々にとり除いてはくれたが、肌にうけた鞭は皮肉を破って、細く赤い糸になって○子の乳房の谷間に伝わってくるのが感じられた。

男はめいめいの選んだ女をてんで勝手に足枷から外し、荒々しく引き起し、粘土細工のように屈曲させたり、頭と足を一緒につけてお尻を上にもむけてパチパチと平手で叩いたりして、玩弄し始めた。

○子に生れて初めての苦痛が訪れ、それは間もなく終つた。

男達が明かるいライトの許で、てんでに好き放題のことをして立去ると、入れ替りに初めの男が入つて来た。

多少いたわるような男の眼の色だったが、やがて、女達の左右の足首に太い鉄の環をはめて、ピチンピチンと鍵をかけた。

○子の左足は自由であつたが、右足は隣の女の左足首と鎖でつながつてゐた。兎に角、真中二人の女は左、右の足とも隣の女に足首を連結されて、一寸身動すると、ガチャリと鎖

の音を響かせて倒れた。後手は解かれ、嵌口具は外されて、上半身はそれでも自由になった。

男は大きい握り飯を各自に二コ宛手渡し罐詰をあけて、一人一人に分配した。

男は去って行くと、女達は思い切り泣喚き、或いは痛みにのたうって憎悪と恨みの声を放った。

A子は女子大生、B子はBG、C子は女中、とそれぞれの素性が分った。いずれもO子と同年配の十八、九才前後だった。

彼女達は額を集めて、逃げる事を計ったが頑丈そのものの鉄環が足に嵌っている以上どうにもならなかった。四人五脚と云った恰好では、歩く事すら及びもつかなかった。

B子はその時、尿意を訴え、続いてC子もA子も冷えた体に尿意を覚えた。

ぞろぞろと一行は、這う様にして片隅まで体を運んだ。

幸い、男が出て行く時、ライトを消したので、その地下壕は暗い二燭光の豆球一コの明るさが、せめても女達の羞恥を軽くした。

O子も引きづられて、彼女達と等しく排尿した。黄色の液体が彼女達を冷めたく濡らした。

片隅に重ねられたゴザの方へ這っていくと、彼女達は一塊りになつて抱き合つた。

朝も夜も分らぬ地下壕の囚人達は、それでも夫々に幾分か眠むつたものと見えた。

恐らくは二日目であろう。四人の紳士達が再びぞろぞろと這入つて来て、大仰に顔をしかめた。彼女達の排泄物が、壕の片隅に点々と盛り上っているのに気付いて、辟易したに違いない。

やがて、大あわてに男が入って来て、それを眺めると、忽ち、眼をとがらせて、誰彼の区別なく、例の棍棒で殴りつけた。

「畜生——畜生共奴。折角の儲けをフイにさせやがった。えーい、臭い臭い。さっさと帰りやがれ！」

男はとって帰すと、女達の衣服を一纏めにして、パツと投げつけ手早く鉄環を外して立上った。

「チエッ、妙な事から、すっかり予定が狂っちゃまった。早くズラからにや、此奴等が訴えやがるに違えねえ——」

流石にがめついこの男も女達四人の排泄物には参ったのか、足早に壕を出ていった。

「わっ、助かったわ！」

誰かが叫んだ。

今となつては気恥かしい、排泄行為が反って、彼女達を僅か一日か二日で救い出す役目をつとめたのである。

「本当にウンチ、様々だわ——」

「ここはK村よ——、私、この辺りよく知ってるの。早速又、誰かの来ぬうち逃げ出しましょう。だけど、皆んなで約束しないこと、助かった時、ここで用便したって事、一切誰にも云わないこと——」

それに昨夜の男達が私達にしたこと——。云って、いい場合と悪い場合があるわ。新聞種やニースになつて御覧、決して将来、私達の得にはならないと思うの——」

「だけど口惜しいわ——」

「天災だと思えばあきらめがつくわ——。それにこの鞭の跡だけで私達がひどい眼にあった事を充分証明してくれると思うの——」

「足枷のあの苦しさ——、足首のこの傷跡は一生とれないと思うわ」

——」

〇子は、彼女達がめいめい勝手に喋べっているのを呆然と聞いていた。

少年と油断した許りに、取りかえしのつかぬ体になった今、大阪と云う大都会がつくづく恐ろしいところだと、今更思いしらされたのであった。

「とまあ、云うようなわけですが、彼女達の幽閉の期間を一週間にすれば、相当次々と責めや縛りを喋べり続けられるのですが——。折角の集いに、私一人長々と喋べっても御退屈の事と思ひましてこの辺りで打切らして戴きましよう——」

ナイロン氏はニヤニヤ笑って、改めて、グラスをとり上げたのでした。

第二話 雲助部落

「元日を箱根方面までドライブしたのですが、芦の湖のあたりは何と云っても素晴らしい景色です。途中、かざまつり風祭という地に旧友がおりまして、一寸そこへ立寄ったのですが、その時、聞いた雲助の話です」

ギネの権威ドクター氏は、それが癖の、しきりに臉をパチパチ瞬かせ乍ら、こう云って古い昔の箱根の話を語り出したのです。

小田原から箱根に向って間もなく、かざまつり風祭、入生田という珍らしい地名のところがある。とりわけ、早川沿いにある入生田の小部落は

通称、雲助部落と呼ばれていた。昔からダカツのように嫌われ、今でさえ悪者の代名詞にされている雲助も、実際は悪党でも何でもなく、箱根八里を股にかけ、並の男ではつとまらぬ山越人足に過ぎなかったのである。

まして雲助になるにも当時から資格を要し、一に力持ち、二に荷造上手、三に唄が歌えると云う三条件を必要としたのである。

酒手でも弾もうものなら、上級者は長持、中級者は山駕籠をかついで、音吐朗々、うっとりとするようなノドをきかせてくれた。

正規の間屋に登録した人足は雲助としても安心出来るが、世俗に謂われる悪雲助は、いわゆる流れ者の無宿で、雲州、信州、などと国名で呼ばれる連中に多かった。そしてこの短い物語も亦、そうした無宿者の雲助共によって演じられたものであった。

甲州都留郡八沢村の喜八が、恋女房のときと共に三島を経て箱根にさしかかった頃、運悪く流れ者の雲助のかごにしつこくつきまわられた。恋女房のときが妊もって、早や岩田帯もしめ、袖にも隠せぬ姿が、尚更に、雲助共の強要のタネになった。

詮方なく喜八は、女房を山かごに乗せ、自分はかごわきに添って山を登り出した。

町かごと違って、山かごは殆んど寝るような形で乗るから、流石に身重のときは体がラクで、思わずかごに揺られてうとうとと快よい仮睡に陥っていた。

小田原から三島までの約八里、これが天下の嶮の箱根の山道である。

辺りはうっそうとした樹林——

雪助、駿州と武州は人気のないのを見澄ますと、急にかごを地上

に降し、突然息杖いきづえを振り上げて、喜八に打ってかかった。何しろ名うての力持ちの悪者共である。忽ち叩きのめされ、ぐったりなつたところを、かご先にかけてあつた荒縄で犇々と喜八を縛り上げ、懷を探つて、胴巻を引摺り出した。商用と老父の見舞に持参した、虎の子の大枚三十両余りが、無情にも掠奪されてしまった。

あつと、とよは身を起して、逃げ様としたが既に遅かった。駿州が女をかごの中で押えつけると、一方の武州が、残つた荒縄で、山かご諸共、とよの体をぐるぐる巻きに、かごの竹柱に縛りつけてしまった。饅えたような匂いの臭い手拭を口に無理矢理押しこまれ、その上から喜八の手拭をとりあげて、猿轡をかますと、必死に山道にもがく喜八を、ぼんと道端の草むらに蹴込んで、二匹の野獣は勢いよくかごを担ぎ上げ、一町許り走つた山道から、勝手知つたる間道へと折れ曲つて、はいはいと掛声をかけ乍ら、飛ぶように彼等の峠へと引き歸した。

言葉通りの竹の柱に萱の屋根の、僅かに雨露を凌ぐ程度のあばら家が、二人の住居だった。ぼろぼろの絆天を振り脱いで、男共は六尺禪一本の、赤銅色に光る逞ましい裸体になつて、女を担ぎ出し、粗末な囲炉裡の傍らの荒庭の上にどざりと投げ出した。

「フフ、妊み女だが、滅法別嬪と来ていやがる。こたえられねえぜ——」

「そうよ。たんまり稼ぎもあつたし、久し振りに濁酒でも一杯、引っ掛け乍ら、ゆっくりこのアマを料理するでしょうぜ——」

「稼ぎは山分けと行こうぜ。三十両なんて大金は、一生稼いだって拜めるシロモノじゃねえ——」

「そうだと。ところでアマを逃さぬ様、しっかり縛り上げておこ

うじゃねえか」

「おっと合点だッ——」

駿州はのうそり立上ると、恐怖に蒼腿め震えているとよのそばに近寄り、いきなりぐいと襟がみを掴んで引き起し、帯を荒々しく解き、衣類をパツと剥ぎとつた。

長襦袢もむしりとして、湯文字一枚にすると、ぼつてりと乳線の盛り上つた、水々しい豊かな乳房の上から、緋色の女のしごきで、力任せに後手に縛り上げた。

湯文字のまくれ上つた双つの白腿を、容赦なく腰紐で足にかけて縛り、生唾の出そうな、生々しい女の体を、よいしよと軽く横抱きにして立上ると、獣の皮をはりつける、血腥ぐさい張板に女をぐるぐる巻きにその上から荒縄で縛つた。女の横手には野鹿の皮が、竹釘でピンと張りつめられて、なま乾きになまぐさい臭気を放つていた。

「ところで武州よ——このアマをどちらから先に戴くか、くじできめるとしようじゃねえか——」

駿州が女の柔肌を抱き上げた両手で蓬髪をゴシゴシ搔き乍ら、血走つた眼をギョロリとむいて武州に声をかけた。

「よかろうぜ。勝つた方がうまい御馳走をたんまり頂戴するとして負けた方が、ひとつ走り濁酒を買いに走るとしようぜ。だが先に稼ぎを山分けにしておこうぜ——」

「そうともよ。じゃあ、三十両の山分けで、十五両ずつと……。これで半年や一年、当分はゆっくりと遊んで暮せるってことよ——」

武州は粗朶を二本折つて、素早く長いのと短いのを、作つた。「じゃあ、長い方が先だ、俺がつくつたんだから手前、これを引け

「——」
駿州は噛みつくように二本の小技を眺め、むずとその一本を抜いた。技は短かった。

「畜生ッ、うめえ事やりやがったぜ——」

駿州はギラギラ眼を光らせ、女のぐったりした姿を未練氣に眺めて、一升徳利をとり上げた。

「すまねえな兄哥、それじゃ手前の帰ってくるまでに、たんまりと御馳走になるぜ——」

「勝手にしゃがれだ。一足飛びにつっ走ってくらあな——」

山越人足の素っ飛足にしても、箱根の茶屋までの酒買いは四半刻はかかる。

武州の眼は惨忍な淫獣のように輝き、とよの肌を荒々しいごつごつした手で、なでさすった。毛虫に這われるような気味悪さに、とよは激しい悪感を覚えた。この儘では二人の畜生共に弄ばれた上、身重の体、どうなるか分ったものではない——必死にとよは思案をめぐらした。殊更、男を挑発するように、とよはじんわりと顔に笑みをたたえた。

「まあくすぐったいじゃないの。早くこの縄をといて下さいよ」

「おお、そう温馴しく出られちゃ文句もあるめえ、解いてやるぜ。だがすっかりは信用出来ねえ。兎も角荒縄だけは解いてやるぜ」

武州は張板からとよを解き放すと、先刻、駿州がやったようにして、女の体を横抱きにして、囲炉裏横の荒藁の上まで運んだ。

「妾しゃ、お前のその逞ましい男らしさが、すっかり好きになったよ。身重の体だけれども、お前さえよければ、どうとも好きなようにしておくれ——」

「嬉しいことを云うじゃねえか——」

武州は相好を崩して、とよの上半身を抱きしめた。虫酸の走る思いをぐっと噛み殺してとよは、さも切なげな声を洩らした。湯文字が乱れて、白磁の肌がむき出しになり、ひととき武州の心に火をそそいだ——。

「ねえ、お前。いっそ二人っきりで夫婦になりたいねえ。ああいやだ、いやだ。あのもう一人の男が戻って来て、あいつの自由にもなるのかと思うと、妾しゃ耐らないよ——」

「手前、本気でそう云ってるのかい」

「本気だとも、お前さえよければ、あんな弱々しい亭主を捨ててもちっとも惜しくないんだよ。唯、も一人のあいつさえいなけりゃね——」

とよの考えでは、あわよくば二人が格闘して、両方共に傷つき、倒れるのが唯一のかすかな望みであった。山男は単純に騙された。

「よし、可愛い女のために、奴をバラしてやるぜ——」

「あら、嬉しいよ。それじゃ、その始末のすんだ後でゆっくりと楽しんでもいいじゃないか——どうせ女房になるんだから——」

「それもそうだ。じゃあ、おっつけ奴も戻ってくるに違えねえ。奴をバラす算段にかかるか——」

「きっと頼んだよ。本当にお前は、たのもしいなえ——。それに借金だって独りじめ出来るよ——」

武州は嬉しさにワクワクし乍ら、山斧をそっと握った。力も腕も駿州にはかなわぬが、武器をもっている強身と、女と金をひとりじめ出来る歡びに、心は疼いた。

既に四半刻は過ぎている。ヒタヒタと駿州の足音が近づいた。武

州は、竹で編んだ潜り戸の横で手斧をふり上げた。

とよは息を殺して成行を見守っている。

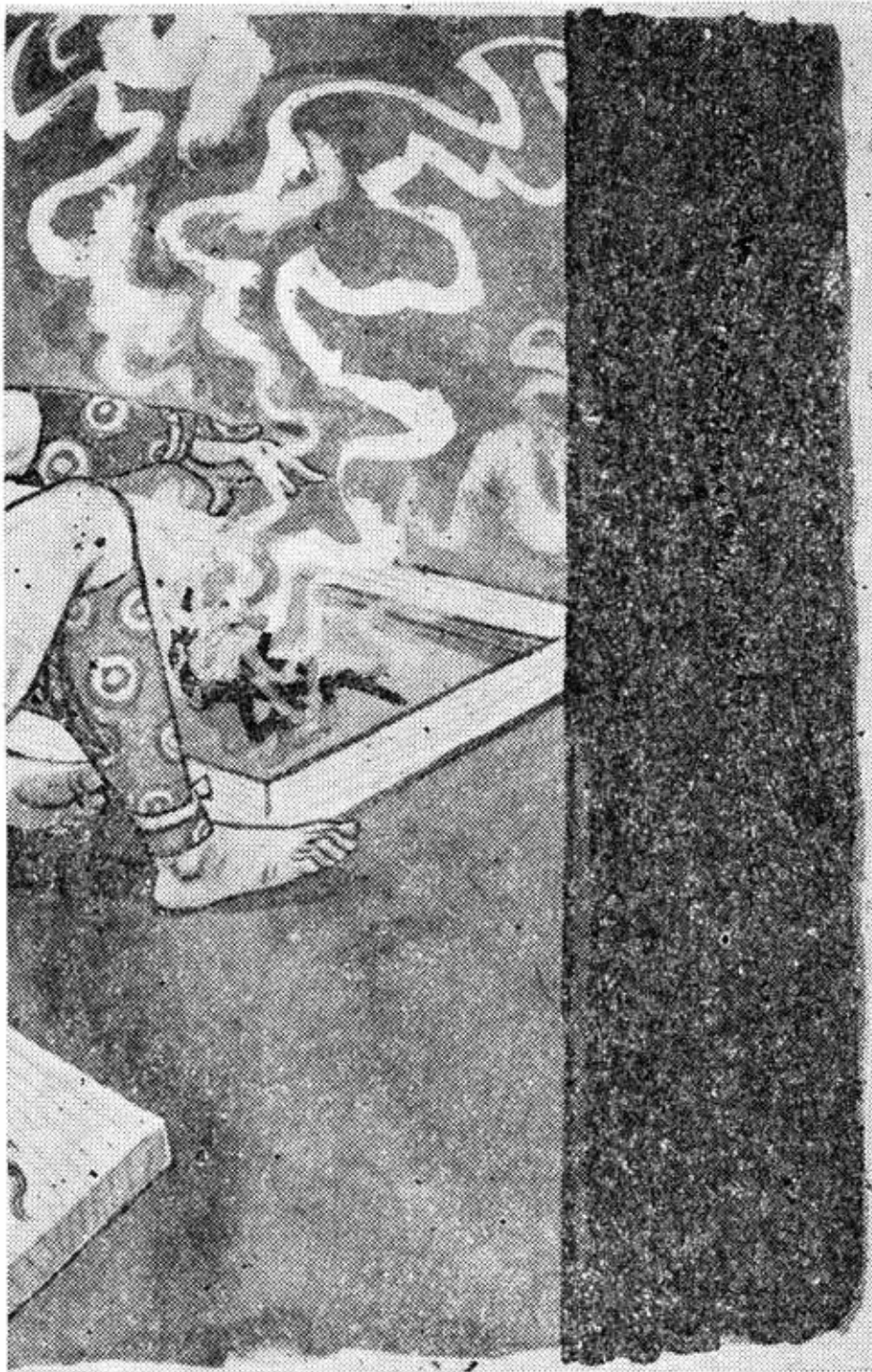
戸がひらく。ガツツと駿州の頭上に手斧は鈍い音を放って振り下された。

拓榴のように頭を割られ、ドロドロと脳漿を流して、駿州は声もなく地に長く伸びた。

とよの顔は蒼白に代った。さっと湯文字をひるがえして戸を蹴立てて表に走った――。

が、所詮、無駄であった。

武州の太い毛むくじやらの腕に抱きしめられ、手足をバタつかせ



て、再び囲炉裏のはしにどざりと投げ出された。

「あまッ、逃げようとしやがったな――」

「畜生！ 誰がお前なんか――死んだって」

「さては先刻の約束を破って、俺の仲間を殺させやがったのか。糞ッ、このあま――どうするか覚えていろ――。手前を股の裂ける程いじめて、いじめつくした挙句、逆さ吊りにして、この手斧で、そのふくらんだ腹を引裂いて妊み子を引づり出してやるから、そう思え」

憤怒の激しい顔が、とよに迫った。ぐいと、とよの腕が掴まれ、湯文字がバラリと花片のように散り落ちて、男の膝下に押えつけられた。

荒縄が雁字搦目に女の肌に喰い込み、尚も男は、とよの顔を、ひん曲る程強く、荒縄で巻いた。鼻も縄で押しへしがれ、唇の合間に喰い込んだ縄は、とよに舌を噛んでの自害さえも許さなかった。

「ふうッ、世話を焼かせやがった。ああ、女の言葉にすんでのところで、この俺まで危ねえところだった。畜生奴、じわじわと一寸だめし、五分だめしに思う存分に料理してやるから、念仏を称えて待っている――」

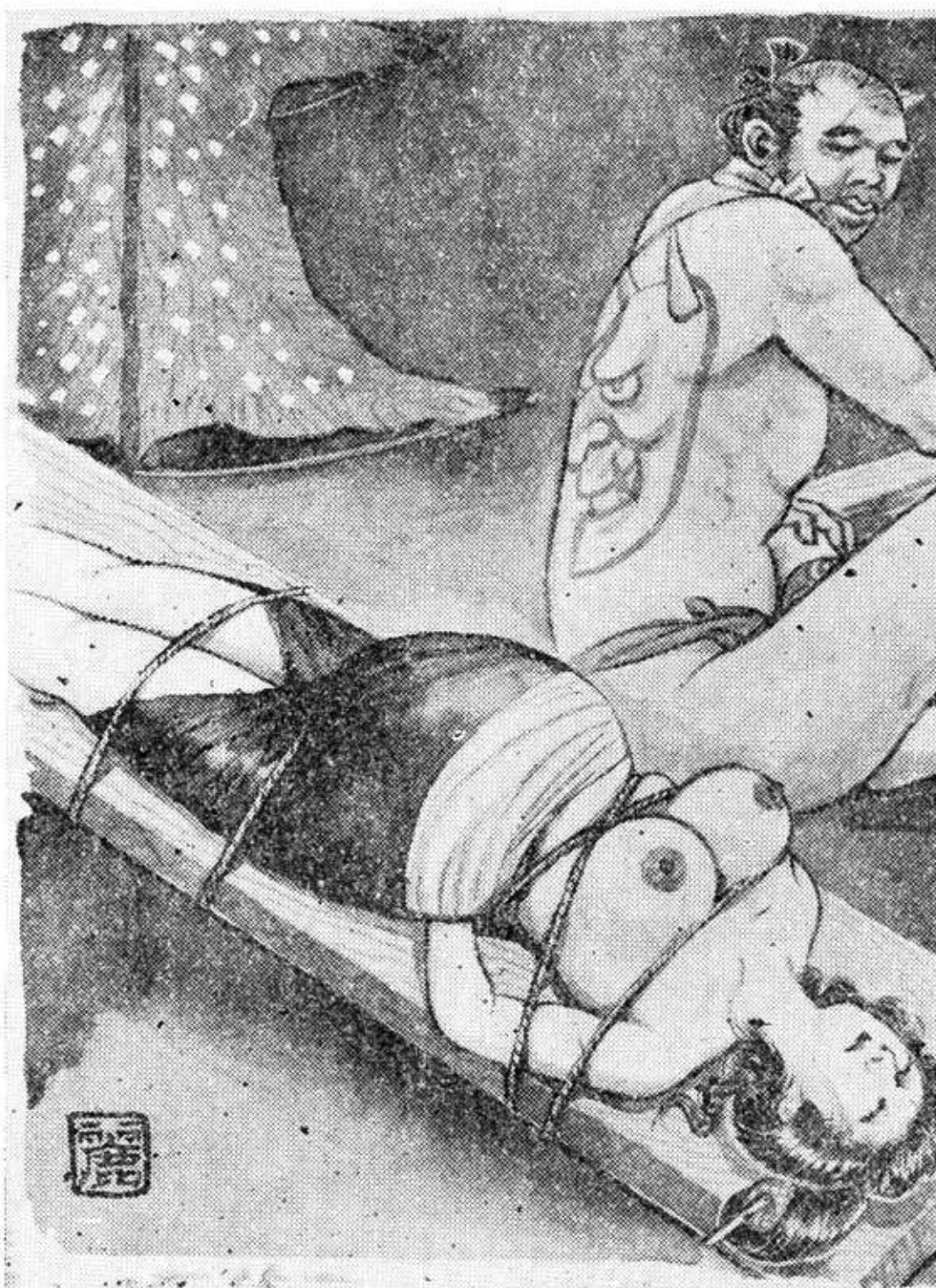
武州は、土間に転がっている駿州の買って来た濁酒を缺茶碗になみなみと注いで、旨そうに一気にあふった。

突然、激しい苦悶が武州の全身を襲った。バタリと茶碗を落すと刹那、武州はのけぞって土間をのた

うち廻った。それも暫し——。すっかり動かなくなった武州に、とよは神の奇蹟を眼の当りに見た思いだった。

駿州も亦、女と金を一人占めする考えで、濁酒に猛毒を仕込んでおいた事を、とよは思いもよらなかったからである。

「天罰てき面と云うところでしょね。とよと喜八は無事な体と、そっくりその儘手許に戻った、三十両を固く抱いて江戸につき、終生



を江戸に過して成功したと云うことです。

箱根の快適なドライブウエーの昔には、こんな危険な話もあったのです。とは云え、現在のビート族の中にも、雪助まがいの悪い奴もいて、箱根山中でドライブにかこつけて、女をものにする輩もいないとも限りません。所詮それは昔も今も変わらない事でしょう。知っているのは箱根の松風許り。——いや、いやとんだ勸善懲惡のお粗末です」

ドクター氏の話が終って、次いでワイン氏の番になったが、流石の酒仙も「地震」^{アースクエイク}と称する強い酒にいかれて、春風たいとう、ロレッツも怪しくなっているのです。

「どうも処置なしですな。特に今月は正月でもあるし、おおめに見てやりましょう」

スバル氏がやれやれと云った顔でとりなします。「では今宵はひとつ正月の新年句会と洒落るのも面白いでしょう。皆さん如何です」

印度蛇木のパイプを啣えたパイプ氏が、急に風変りな提唱をしました。

「俳句も、川柳も一向に縁がない方でしてね」

こう云ったのはライカ氏です。

「いやいや、心から浮ぶ儘、句にならなくとも、ホレ、奇クの扉に毎号出ているあの程度のもので如何です。それとも、いろは歌留多式に順々にやって見ませんか——」

パイプ氏は仲々強硬です。

「ホホウ、正月にちなんで、いろは歌留多式も面白いですな——ではパイプ氏より如何です」

ステッキ氏が茶化す様に申しました。

結局、持ちよりで苦しまぎれに出来たのが次の迷作です。三十九夜のつれづれなる遊びとも云えましょう。

い、犬になれと棒でうたる

ろ、論より証拠の浣腸責め

は、花よりヌードの縛り

に、憎くまれ子継母に折檻

ほ、骨打ち損のカラ写し

へ、尻をひって鞭打たれ

と撮らぬヌードの縛り算用

ちちりもつもってトイレがつまる

り理窟ぬきでの縛り合い

ぬ、盗人に手錠、腰縄

る瑠璃も女も磨けば光る

を鬼に革鞭

わ、我が身縛られて人の痛さをしれ

か果報は寝てから亭主を馬にさせ

よ、夜も昼も責められる

た、簞笥の環が責め道具

れ、蓮華往生、女を尻から串差しにし

そ、惣領の甚六女房の足を舐め

つ、吊し責めでモデル気を失ない

ね、寝ぞうが悪いと縛られる

な泣き面に猿轡

ら、欄間が撓^{シナ}う吊し責め

む、無理な折檻^{シナ}けがのもと

う、浮気の罰に、亭主犬になり

ゐ、井戸責めのお菊、皿

の、のどもと過ぎれば痛さ忘れる

お遅れたと男、女の手を廻し

く、苦あれど、浣腸の楽しみあり

や、嫉く女房の縛り甲斐

ま、まけるたび、一枚脱ぎ

け、怪我をさせぬ縛りの程のよさ

ふ震えてる雪責めのモデル

こ、転ばぬ先に杖のむち

系、縁は異なものサドとマゾ

て亭主の好きな吊し責め

あ、荒縄に乱れ髪

さ、猿轡は女のパンティ

き聞いて極楽、縛られて地獄

ゆ、湯殿を覗いて怒鳴られる

め、目隠しで恥かしさが隠れ

み身をきる鞭がマゾの願望

し、縛られるはいつときの恥かしさ

え海老責めはむごいこと

ひ姫始めの縛り初め

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切▽
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切▽
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切▽
復刊第4号	(昭和31年5月号)	△売切▽
復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切▽
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切▽
復刊第8号	(昭和31年9月号)	△売切▽
復刊第9号	(昭和31年10月号)	△売切▽
復刊第10号	(昭和31年12月号)	△売切▽
復刊第11号	(昭和32年1月号)	△売切▽
復刊第12号	(昭和32年2月号)	定価二百円
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切▽
復刊第14号	(昭和32年4月号)	定価二百円
復刊第15号	(昭和32年6月号)	売切
復刊第16号	(昭和32年7月号)	売切
復刊第17号	(昭和32年8月号)	定価二百円
復刊第18号	(昭和32年9月号)	定価二百円
復刊第19号	(昭和32年10月号)	△売切▽
復刊第20号	(昭和32年11月号)	△売切▽
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円

復刊第22号	(昭和33年1月号)	定価二百円
復刊第23号	(臨時増刊号)	△売切▽
復刊第24号	(昭和33年2月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第30号	(サド特集号)	△売切▽
復刊第31号	(昭和33年8月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年9月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第35号	(増刊号青い魔院)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和34年1月号)	定価二百円
復刊第38号	(悦虐小説と緊縛写真)	三百円
復刊第39号	(昭和34年2月号)	△売切▽
復刊第40号	(昭和34年3月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第42号	(サド特集第一集)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年5月号)	△売切▽
復刊第44号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第45号	(悦特第二集)	定価二百円

復刊第46号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第51号	(サド特集第三集)	三百五十円
復刊第52号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和35年1月号)	定価二百円
復刊第54号	(悦特第三集)	定価二百円
復刊第55号	(昭和35年2月号)	定価二百円
復刊第56号	(昭和35年3月号)	定価二百円
復刊第57号	(サド特集第四集)	三百五十円
復刊第58号	(昭和35年4月号)	定価二百円
復刊第59号	(悦特第四集)	定価二百円
復刊第60号	(昭和35年5月号)	定価二百円
復刊第61号	(昭和35年6月号)	定価二百円
復刊第62号	(悦特第五集)	定価二百円
復刊第63号	(昭和35年7月号)	定価二百円
復刊第64号	(昭和35年8月号)	定価二百円
復刊第65号	(昭和35年9月号)	定価二百円

特に定価の半額に奉仕いたします。

も もろい奴、一鞭でぐったり
せ 切腹が見果てぬ夢/
す 雀百まで縛り忘れぬ

× × ×

駄句、珍句続出して、初春の宵は、賑やかに更けて行きました。
ルームは紫煙がいっぱい。——窓は夜霧にしっとりとなめれて、八人

の退屈男は、流石に退屈を忘れたかのように愉しく駄洒落を飛ばす
のでした。久し振りに明かるい会合でもあったようです。
初春のそ気嫌のせいか。陰惨な話は努めて避けたためでしょう
か——。

(第三夜・終り)

体 育 館



連 載 小 説

狩 獵 者

(第四回)

新 佐^さ

川 度^ど

工 画 槐^{かい}

××中学一年生の、野々宮保は、その日は当番だったので、第一時限の体育の準備に、体育館を開けにいった。

鍵穴に鍵を差しこもうとして、保少年は、(オヤ?)というようにガラスに顔をくっつけた。なにか異様なものが見えたのだ。すぐに、それは人間であることが判ったが、そうすると、ますます怪訝だった。

(あの人、なにをしてるんだらう?)
保少年は、扉を開けるのをためらって、ガ

ラスごしに、怪しい人物を見守った。

その人間は、衣服を着けていない。ほとんど素ッ裸の躰つきは、どうやら男のようだった。裸の男は天井の鉄骨にぶらさがったまま、動くようすもない。

(あんな高いところにぶらさがって、よく恐くないな。それに、ずいぶん疲れるだらうな)

子供らしくそんなことを考えながら、なおも覗いていると、体育主任の須藤が見咎めて、声をかけた。

「野々宮、なにをしてる。開けたのか?」

「先生、誰か人がいるんです」

「人が?、だって、体育館は閉まっていたんだろ。誰も入れない筈だぜ」

「でも、本当にいるんです」

「おかしいことを云うヤツだな」

近づいた須藤は、半信半疑で中を覗いたが、いきなり激しい勢いで扉を開けると、男のぶらさがった下へ駆けていった。

サポーター一つの裸体で、鉄骨から吊りさげられている男の躰は後向きだったが、確か

に見覚えがあった。それでも（まさか）と、うちけしたい気持ちで前にまわると、変りはてた同僚の顔は、もう疑うべくもなかった。気がつくと、保少年が、少し離れたところから、不思議そうに見あげている。

顔を見ないので、高津だとは知らないようすが、須藤は、己の裸体が生徒の見世物になっような感じがして、ゾツとした。「野々宮。きちゃアいかん！ 外へでてい

ろ」思わず大声で呶鳴って、須藤は、保少年を出入口のほうへひっぱっていくと、

「いいか、先生の云うことをよく聞くんだぞ。このことは、誰にも喋っちゃいかん。いずれは判ることだが、おまえは黙ってるんだ。判ったな。それから、体育の時間は自習だ。教室へいってみんなに伝えろ」

と、追いたてるように体育館からだした。

須藤は、なによりも、まず、高津の無慙な姿を、生徒たちの眼から遮閉しなければならぬと思った。彼は、窓の暗幕をかたはしから引いてまわると、暗い中で凝然と眼を凝らした。暗闇に眼が馴れるにしたがって、ブラリとさがった死体の輪郭が、次第にハッキリと浮きだしてくる。やっぱり、これは、悪夢で

はない。しかし、こんな恐ろしい現実があつていいものだろうか。須藤には、高津が、なぜ、こんな殺されかたをしたのか、まったく不可解だったし、明らかに高津の死体だと確認しながら、どうしても信じられぬ気持ちだった。

所轄署と本庁から、あいついで係官が到着したのは、十五分ほどのちである。

気をきかした須藤が、ステージの横の器具置場から、脚立を持ちだしてきたが、死体はすぐにはおろされず、ぶらさがったままで、まず現場写真が撮られた。やがて検視がはじまったが、係官たちの死体の扱いかたが無神経のように思われて須藤は内心不快だった。「このサポーターは、被害者のものかどうか、お判りですか？」

そう云って、高津の着けていたサポーターをさしだしたのは、警視庁捜査一課一係の、速水錬太郎部長刑事だった。

新宿のキャバレーで、やくざの木津が殺されて発見されたときに速水の担当していた事件がかたずいて、ホツとしていたやさきの今度の事件である。

（判りきったことを訊く刑事だ——）と思いながら、須藤は、わたされたサポーターを手

にとったが、すると急に顔色が曇った。

「違います！ これは彼のじゃありません。彼のものならイニシャルが入っている筈です」

「そうですか」

速水は、言葉少なに頷いたが、眉の間に刻まれた縦皺は消えなかった。

コートのポケットに両手をつっこんで、肩をおとした速水の姿は、死者を悼んでいるようにも見え、深い思考に沈んでいるようにも見えた。

須藤が、フト、速水刑事に人間的な親しみをいだいたのは、同年輩のせいだったかもしれないが、それよりも、親友を失った悲しみで、気が弱くなっていたためだろう。

「刑事さん。ぜひとも犯人をあげてください。高津は、決してひとに恨みをうけるような男じゃありません。それを、こんなひどい殺しかたをするなんて、憎んでもあまりある犯人です！」

縋るような気持ちで須藤が云うと、速水は、やはり寡黙がちに、しかしハッキリとした口調で、

「全力を尽します」

と答えた。

前日、須藤は、高津の妻の典子が怪我をしたと聞くと、退校時刻を待ちかねて駆けつけたが、意外にも、彼女の身にはなにごともなかった。女の敏感さからか、

典子はしきりに不安がったがそれよりも、須藤は、彼女が無事だったのを喜んで、

「なアに、間違いだ」と判って、すぐにもどってきますよ」と

云った。それは、彼女を慰めるというよりは、もっと軽い

気持だった。須藤には、高津が殺されるなどとは、夢にも

考えられなかったのだ。

須藤の証言をまつまでもな

く、高津が何者かによって誘

拐されたことは明白だったが、とりついだ用務員も、灰

色の小型乗用車だったのを憶

えていただけで、ナンバア・

プレートの数値までは見てい

なかった。

高津の死体が、体育館に運

びこまれたのは、昨夜のう

ちか、今日の未明ということに

なり、裏口の戸にその形跡があった。器具置場の脚立を使っても、天井の鉄骨に重い死体を吊りさげるのは、楽な作業ではない。少く

とも二人以上の人数は要した筈である。

(また、死体展覧か――)

速水刑事は、キャバレー事件を思いだして

背筋に冷たいもののはしるのを感じたが、その酷似性が、

はたして意味をもっているのかを考察するには、推理の資

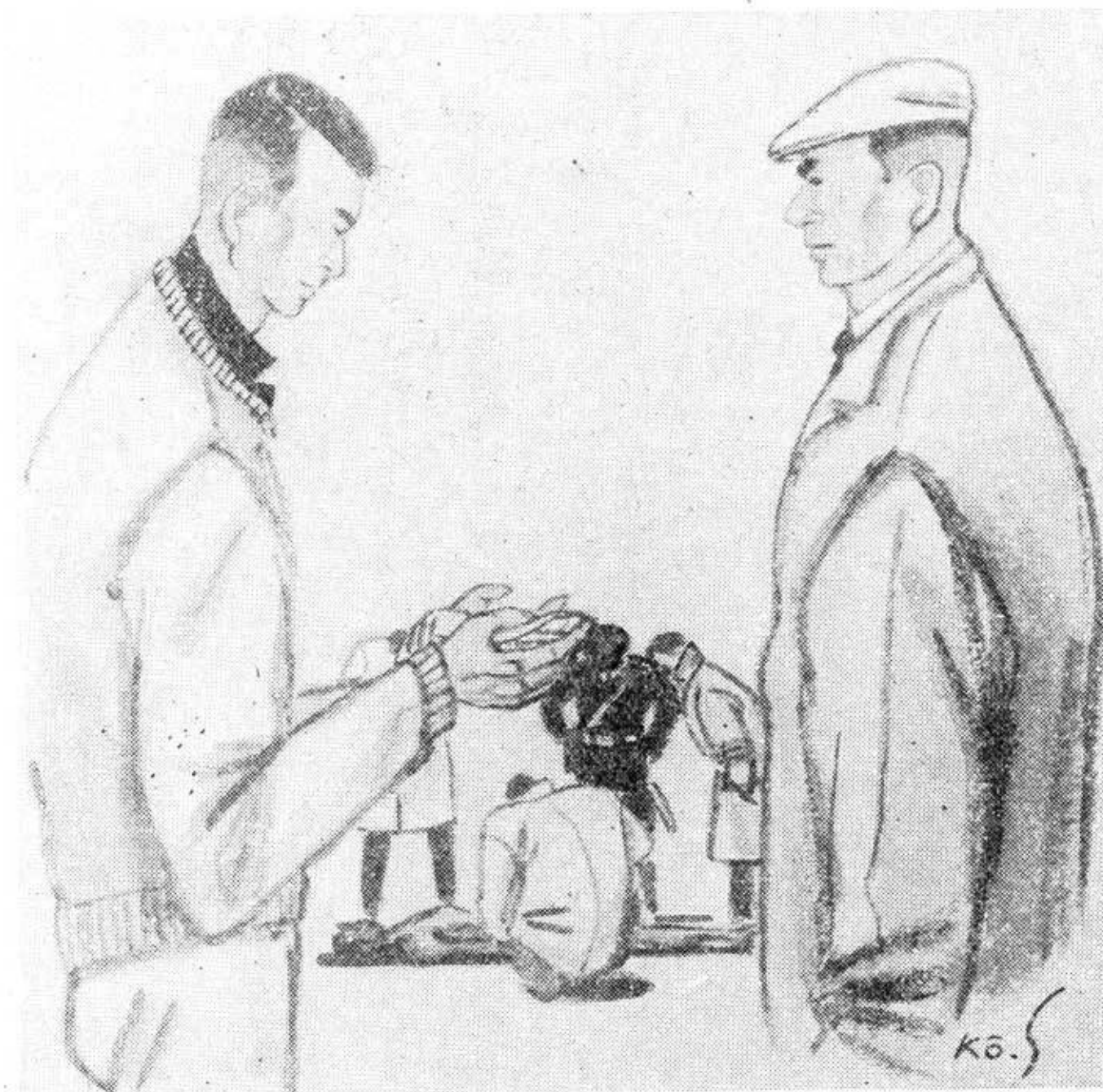
料が不足だった。

泳げぬ男

十二月に入ると、デパートはクリスマス・セールの宣伝にしのぎをけずり、街の喧噪をいやがうえにも掻きたてるが、さすがに、郊外の住宅地までは、その波動もおよばない。

かなりセンセーショナルなみだしで報ぜられた「体操教師殺害事件」も、新聞紙上に関する限りでは、新しい進展もないままに、捜査はゆきなやみの状態だった。

司慎之輔は、一日の大半をアトリエにこもって、製作に



没頭していたが、百号の大作にとりくみながら、彼らは、山科のもたらす、ある報告を待っていたのだ。

山科には、一カ月の猶予があたえてあったが、その期限ギリギリに、彼は、数枚の報告書を携えて、アトリエの扉をノックした。

「山さんか？」

「そうです。遅くなりまして——」

「報告は書齋で聞こう」

慎之輔は、手を拭きながら、キャンバスをちよつとふりかえった。

画面のほとんど大半を占めている黒いマッスは、抽象的に表現された森林のようでもあり、大都会の林立する高層建築のようでもあった。そして、よく見ると、小さく裸体の人物が二人描かれていて、それだけは、かなり写實的な手法なので、男であることがハッキリと説明されている。裸体の男は、二人とも、巨大なマッスの重圧におしつぶされたように、奇妙な恰好で倒れている。つまり、それは、死体の絵なのだった。

「なにしろ、条件が難しいんで、探すのにはねがおれました」

書齋に入ると、山科は、いいわけのように云って、デスクの上に、揃えた書類をさしだ

した。

「全然泳げない奴ってのは、案外いないモンですな」

慎之輔は、山科の言葉を聞きながしながら、カードを一枚々々繰って、貼付された写真を見つけたが、最後の一枚に眼を止めた。

ハンティングをあみだにかぶったその男は、無精髭がのびて、みるからに粗野だが、頬がひき締って、肩巾も広そうだった。

写真の下には、調査の結果が次のように記されている。

氏名 沢本建三

出身地 長野県

年令 二十八才

身長 五尺七寸位

職業 トラック運転手(砂利運送)

「砂利トラの運ちゃんなら、いせ、もいいだろう。これに決めた。あとをうまく頼むぜ」

「承知しました。任せてください」

山科は、不用になった書類を丸めてポケットにつっこむと、成算ありげに頷いた。

「もし手がたりなかったら、誰か連れてくといいいい」

「なアに、こいつなら、簡単ですよ。私一人でじゅうぶんでさ。ただ、今日明日というわ

けにはいきませんがね」

「いいよ。しかし、楽しみだな」

慎之輔は、もう一度、沢本の写真を手にとると、着古した革ジャンパーの下に隠された筋肉の、逞しい隆起を想像して、心を弾ませた。

沢本建三は、銭湯の脱衣場で、鏡に映る己の全身を眺めて、

(少し痩せたな……)と思った。

労働が激しすぎるせいなのだ。柄にもなく佻しくなったが、赤いセーターを着おわった少年が羨望と畏敬の混ざりあった視線で、横からソツと眺めていることには気がつかない。彼は、自分の肉体に、競走馬のような精悍さと美しさが潜んでいることにも、まったく気がついてはいなかったのである。

湯あがりの肌には、冷い木枯もむしろ快かったが、湯ざめのしないように、沢本は、いきつけの縄暖簾をくぐった。

運転中は決して酒を飲まぬ彼も、仕事から解放されると、かなりの量をすごした。そうして、あとはグッスリ眠ると、疲労はあとかたとなくとれるのだった。

「兄さん。独りかね？」

隣りへ腰かけた客が、親しげに声をかけてきた。

都会へでて八年になる沢本だが、ひとを疑うことのできない性格は少しも変わってはず、

「ああ、俺は、いつも独りで飲むんだ」

と答えて、邪気のない笑顔を見せた。

「俺も独りなんだが、嫌でなかったら、今夜は俺につきあってくれないかな」

山科は、せいぜい善人らしく眼を和らげて、沢本の顔を窺う。

「いいとも。本当のところ、独りじゃうまくないもんな。けど、俺、たんとは持ってねえんだぜ」

「そんなことア、心配いらねえよ。今夜は俺のおごりだ」

「すまねえナ」

「なアに、いいってことよ。俺はな、どういふわけか、一目で兄さんが気に入っちゃったんだ。遠慮しねえで、うんと飲んでくれ」

酒がどんどん運ばれてくると、沢本は嬉しさを隠せないように、相好をくずして、唇を舐めては、ちよこを口に持っていった。

「兄さん。あんた、もしかしたら、砂利トラツクの運転手じゃないかね？」

「ドンピシャだ。よく判ったね」

「イヤ、ナニ、いつか、運転してるところを見かけたような気がしたんだ。大変だろうな。」

砂利トラも——

「ノルマに追われどおしでね。いいかげん厭にもなっちゃうよ」

「だが、みいり、はいいいんだろ？」

「とんでも——。仕事のあとで焼酎をひっかけるのがせいぜいさ」

「つかぬことを訊くがね。あんた、郷里は長野じゃないかね？」

「へえ、あんた、なんでも当てちゃうんだナ。」

図星だよ

「やっぱりそうか。嬉しいねえ。なにを隠そう、実は俺も長野さ」

「本当ですか！ こいつはいいや」

「ハッハハハ、愉快だ。同県人が偶然めぐりあうなんてな。ハハハ、大いに飲もう。さあ、あけたあけた——」

山科は、調子を合わせて適当に飲むうちに、芝居をしているのを忘れかけるほど、沢本に好感をいだいていた。

（親分も罪だな。こんない奴をムザムザ餌食にするなんて……）

山科は、我にもなく測隠の情を覚たが、（仕事々々、仕事に情けは禁物だ）

と己に云いかせると、ふだんの鋭い眼つきにかえた。だが、その表情を読みとるには、沢本は、すでに酔がまわりすぎていた。沢本は、男に抱きかかえられて立ちあがったのは憶えている。

しかし、自動車のシートにはうりこまれたときは、もう死んだように眠りこけていて、まるで意識がなかった。

こうなれば、品物を運ぶようなものである。

山科は、沢本の寝顔をすかして見てから、勢いよく運転台の扉を閉めた。

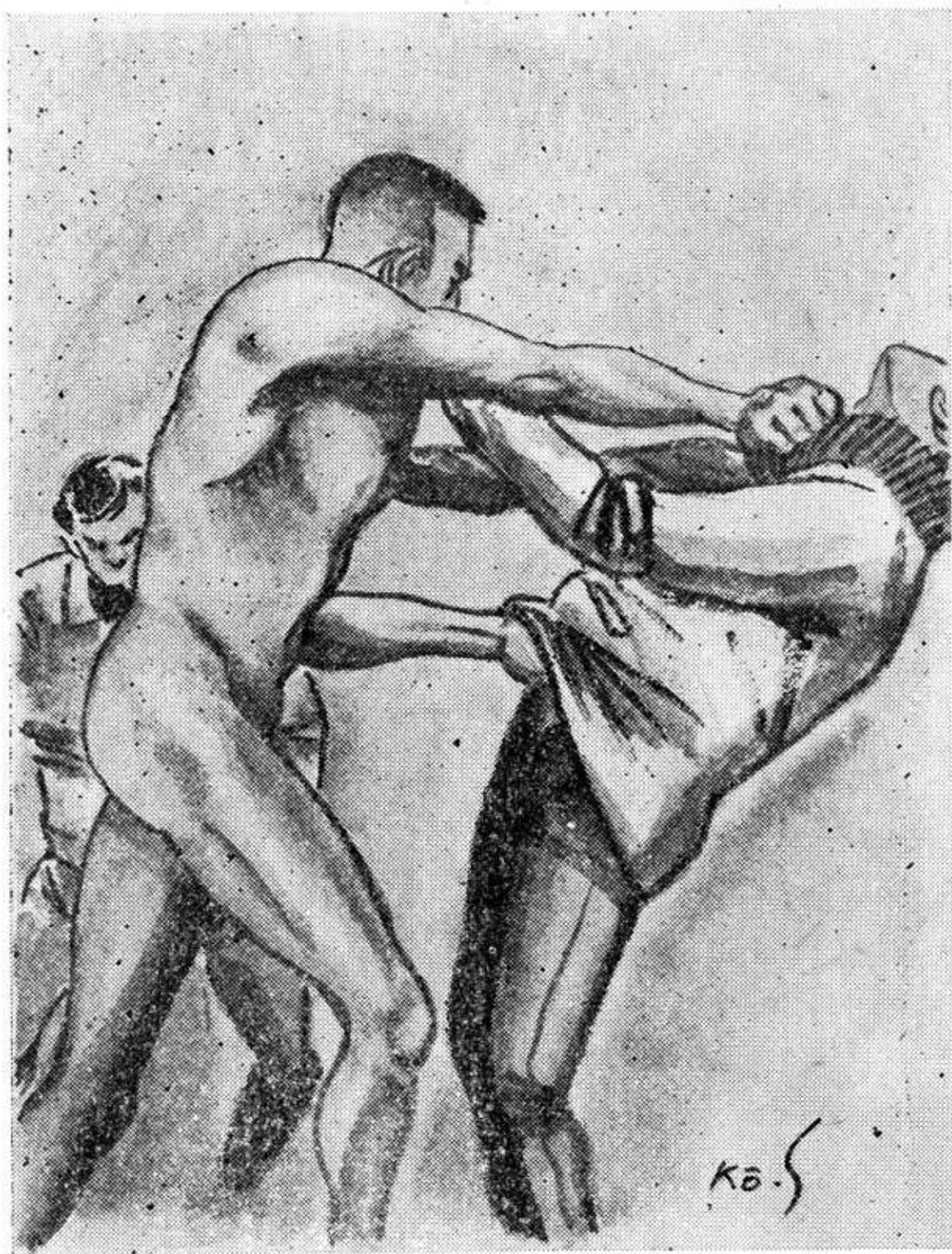
第三の獲物

眼が覚めると、沢本はパツととび起きた。それは、いつもの朝と少しも変わらない。しかし、次の瞬間、沢本は、愕然としてあたりを見まわした。まるで狐にでもつままれたような気持である。

彼が眼を覚ますのは、住込みで寝起きしている天井の低い中二階でなければならない。ところが、そこは、見たこともない洋風の広い部屋だった。

垢じみた布団のかわりには、軽い毛布。下着で寝ている筈の牀には、青い派手なガウンをまとっている。

沢本は、気味悪そうに、いきなりガウンを脱ぎすてたが、すると丸裸になったので、慌ててまたはおった。だが、着つけないガウン一枚では、どうもおちつかない。部屋中を探せるだけ探してみたが、着ていた衣類は、パ



ンツまですっかり失くなっていた。しかたなく、寝かされていたソファに腰をおろして、暖炉の火を見つめていると、少しづつ昨夜の記憶が蘇ってきた。

では、ここは、あの男の住居だろうか。し

かし、それにしては、どうも立派すぎる。とすると、ああ、どこかのホテルなんだな。きつとそうだ。そんなことより、俺は早く帰らなければならぬ。こんな不仕末をしでかして、クビにでもなったら大変だ。

本当は、もっと恐ろしい運命が待っているとはつゆ知らぬ沢本は、焦だつて、ふたたび、卓子の下や椅子の陰を探しはじめた。

フト思いついて、扉を開けようとしたが、二カ所の扉は、いずれも外側から鍵がかかっている。

当惑した沢本が、泣き出したいような気持ちになったとき、やっと山科が部屋に入ってきた。

「ヤア、もう眼が覚めていたのかね」

「昨夜はどうも、いろいろ……アノ、俺、早く帰らねえとまずいんで——」

「まあまあ、いいさ。会社へは俺からうまく釈明してやるよ。それより、熱いシャワーを浴びるといい。サッパリするぜ」

「そんなことしてたら、遅くなるばかりだ。俺の着てたものどこですか？」

「いいから、俺の云うとおりにしなよ。悪いようにはせんさ。シャワーはこっちだ」

「困るなア……」

そう云いながらも、山科の強引さに負けて、沢本は、しぶしぶ浴室に入った。

早々にシャワーを浴びると、沢本はガウンを着ようとして、ハッとした。

確かに脱いで掛けておいたのに、いつのまにか、消えたように失くなっているのだ。かわりに衣類をだしておいてくれたのかと思っただが、それも見あたらない。

(しようがないな)

舌うちした沢本が、腰にタオルを巻いて廊下でと、いきなりムズと腕を掴んだ者がある。

「なにをする！」

とっさに腕をふりきった沢本は、対手が二人だと知ると、油断なく眼をくばりながら、

「誰だ？ 貴様らは」

「誰でもいい。おとなしく俺についてきな」

「なんのためにだ？」

「なんなためだか、くりゃ判るさ」

「いく必要はない」

「そっちに必要がなくても、こっちに必要があるんだ」

杉田が、また、猿臂を伸してくるのを、沢本は憤然とはらいのけて、

「やるか！」

と本気で身がまえた。

ホテルにいたとばかり思いこんでいる沢本が、チンピラに因縁でもつけられたものと感じ違いましたのもわりはない。

喧嘩早いというのではないが、トラック運転手の荒っぽい気風が、いつか沢本にもしみこんでいた。

「フン、気の強え兄ちゃんだ」

杉田は、せせら笑うと南に眼くばせする。

たちまち乱斗になったが、沢本の敏捷な身のこなしは、どうやら彼に優勢をもたらしていた。沢本の腰に巻いたタオルは、とうにぬけおちていたが、そんなことをかまっている余裕はない。

杉田は、ファイと作戦を変更することを思いつき、素早く床におちたタオルを拾うと、

「南、こい」

と云って駆けだした。

「オイ、待て！」

沢本が叫んだが、二人は、もう、廊下のはずれに姿を消していた。

「なんてえ奴らだ——」

追いかけてまで喧嘩を続行する気はない沢本は、唾を吐くように呟いたが、タオルの無いのに気づくと、

絵画 写真 アイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。

(編集部)

「畜生……」

と唸った。よっぽど後を追って、タオルだけでもとりかえそうかと思っただが、さすがにひとめを憚って、スゴスゴと浴室に逆もどりした。

(まったくついてねえ。俺は、いったいどうなるんだ)

沢本は、いつそもう、あの男が恨めしかった。こんなことになるのだったら、うかうかと親切にのるんじゃないかな。いいことのアトには、悪いことがあるとは、よくいったものだ。

(ウウ、寒い。ええい、もう、どうとでもなりやがれ)

沢本は、ヤケクソで、またシャワーのコツをひねった。

「どうした、連れてこなかったのか？」

地下室で待っていた山科は、杉田と南が二人だけなのを見ると、顔色を陰しくした。

「どうして、大したイキのいい野郎ですぜ」

「手におえねえのか。二人もして」

「イエ、連れてこようと思えば、連れてこれねえでもねえですがね」

「なら、早く連れてこんか。逃げられでもしたらコトだぞ」

杉田は、ニヤリとすると、手にしていたタオルを示して、

「それなら大丈夫。真ッ裸じゃア逃げるわけにもいきませんや。それに、奴アまだなんにも感づいちゃいねえんでしよう」

「それもそうだな。フフ、奴さん、ベソをかいてるだろう。もうしばらくほっとくか。親分も、昨夜のうちに、じっくり下見をしてるんだから、そう急ぎもしめえさ」

山科が意味ありげに卑猥な笑いかたをする
と、急に不愉快になった南は、癩症に指を何
回も鳴らした。
(以下次号)

『マゾヒズム特集号』

(定価三〇〇円) 奉仕特価二〇〇円(送共)

満天下Mマニヤの渴望久しきマゾ特集愈々ここに発売

◎口絵並にグラビヤ・フォト、本文の隅から隅に至るまで、総てM派にて独占した「マゾヒズム党」待望のM特集の決定版！

美女にしいたげられ、佳人に騎乗され、麗人に責められる男の姿。マゾストの見果てぬ夢を、ズバリ具現する画筆の牙えとレンズのリアルさ……。

マニアを驚喜させ、熱狂させたマゾヒズム小説の真随。美女の足下に悶えながら幸福感に酔い痴れるマゾ男性の生態を描き出した数々の問題作……。

Ⅱ 巻頭豪華口絵 Ⅱ

マゾヒスチック画廊

滝 れい子・画

生きリフト——稽古まわし

矮人哀歓——執事の祈念

美妓の嘲笑——揺がぬ重圧

道場の鬼百合——意趣返し

グラビヤ・フォト・セクション

「マゾ・フォト・ギャラリー」

ドミナのポーズ——怠慢奴隷譴責

征服者の嘲笑——室内馬に好適

珍獣出現——屈伏の瞬間

スナップ集

ドミナの専門マツト
服従の宣誓

Ⅱ 絢爛マゾ読物満載 Ⅱ

二百字讃歌……………真砂十四郎

あわれ誠一郎……………日文卅古六

捕虜の洗礼……………出久 信男

美しい暴君……………馬族 保

あるマゾ男の告白……………才 昭吾

幸福なる隷属の告白……………鐘坊 巡

祭壇に君臨する脚……………馬族 保

ヴィナスの重石……………真砂十四郎

囚獄の思い出……………獄 收一

美しき悪魔の咲笑……………真木不二夫

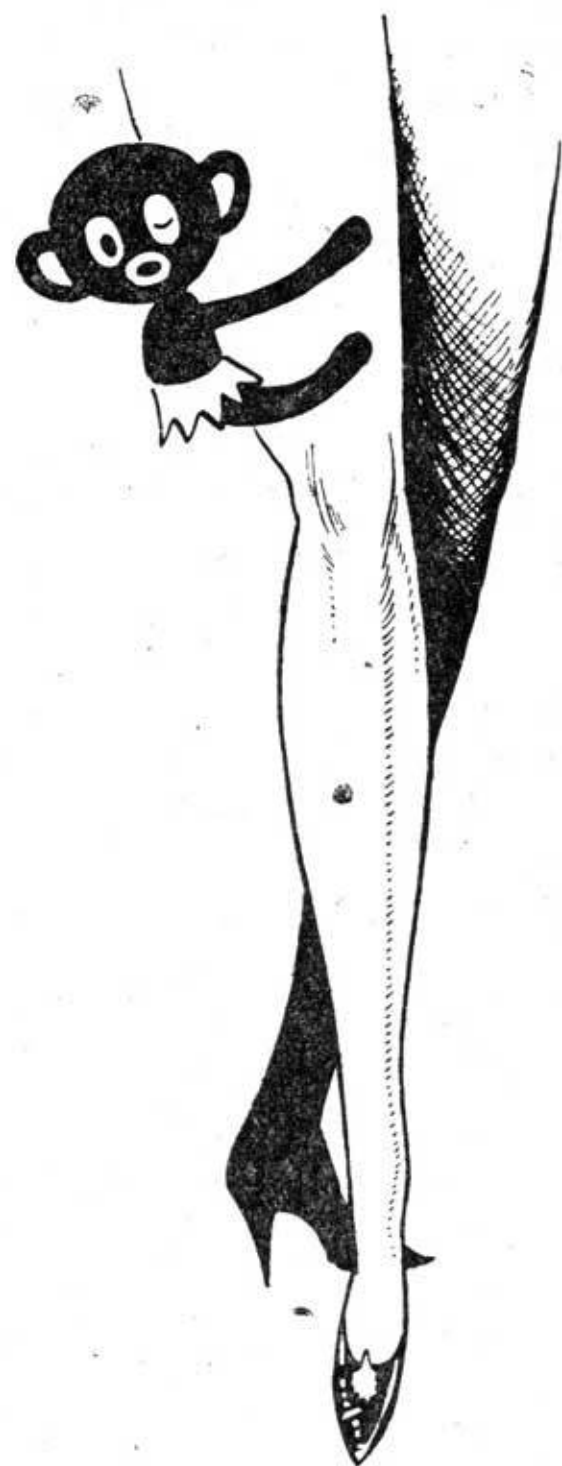
実験室にて……………角田 平八

牛乳風呂の饗宴……………馬族 保

サジズムの女……………才 昭吾

被虐哀歓……………真金鍛次郎

挿絵・カット……………北原純子、杉原虹児



マゾヒズム天国

田沼醜男

アマゾンに捧ぐ

あなたが若くて美しい女性でさえあればいとも簡単に出来る金儲けの方法をお教えしま

しょう。でもそれには幾つかの条件があるのです。以下の条件にあなたが当てはまるかどうか暇つぶしのおつもりでお読みになってみて下さい。

A マゾヒストについて御存じですか？

あなたのカモはこの連中なのです。従ってその心理に通じ弱点を知り抜いていらっしゃることが望ましい。もし御存じでなかったらマゾッホか谷崎潤一郎の本で御研究になってみて下さい。あなたはワンドのような、ナオミのような女性となるのです。

B あなたはお若いですか？

マゾヒストは倒錯した心理の持主なので出来るだけ若い女性に虐げられる事を望みます。年令は二つ三つ嘘を云っても判りません。あなたが二十二才なら、十九だとお云いなさい。十九なら十六だとお云いなさい。マゾヒストはあなたを信じます。もし信じなかったら強い調子で「信じる！」と御命令なさればいい。彼は催眠術にかかったように信じてしまふ筈です。ただし、あなたが十六だったら十三だと云うことは行き過ぎというものであります。

C あなたは美しいですか？

マゾヒストは大抵、白人臭い顔に惹かれます。それも整った美貌というよりは悪女型の野性的な美貌に弱いものです。山本富士子よりは叶順子といった処でしょうか。あなたが

二重瞼の上り眼で縦に短い顔をしていらっしやれば、もうそれだけで十分です。もっとも、この条件は整形手術が発達してますから、あの程度は自由が利きます。

D 肉体美ですか？

敗戦後、日本の男は豊満なアメリカ人女性の肉体に威圧されながらも惹かれ続け、更に發育したヤンガー・ジェネレーションであるティーン・エイジャーのお嬢さんに圧倒されて不可避的にマゾヒストのパーセンテージを増したのです。従って現代日本のマゾヒストにとって肉体美は女神の絶対条件です。あなたがいわゆるキング・サイズのタイプなら云う処はありません。普通の男性は自分よりも小さな女性に関心を抱きますが一部のマゾヒストは反対です。大きければ大きいほどいいのです。ある男などは、自分よりも大柄な女性に眼の前に立たれただけで、ボーッとしてみまうほどだと云います。

E 男友達を多勢もっていますか？

マゾヒストは、もてない女性を先天的に嫌悪するものです。あなたがボーイフレンドや恋人をもっていたら平気でそのことを吹聴してやるというでしょう。彼は、そんなにもて

るあなたをますます崇拜するようになるばかりか、あなたの恋人にも仕えたいと思うかも知れません。

F 下着に関心をお持ちですか？

マゾヒストは大抵フェチッシュの傾向を持っていますから、下着の美しさはあなたの美しさを引立て、あなたの権力の一部分となります。パンティーについて云わせて頂けば、型は出来るだけ露出的なものが好まれるようです。縁どりのあるものは、あなたの脚線を怖いまでに美しく見せるでしょう。色は中間色よりは原色的なもの、白や黒も悪くはありませんが、柄ものは優雅に過ぎてお奨め出来ません。

さて以上の条件さえ揃ってれば、あなたはマゾヒスト・キラアとしては既に相当なものです。あなたは選ばれた女性、優越した女性なのです。ですから賤しいマゾヒストどもを責めさいなみ、有頂天にさせて搾りあげる権利があるわけです。

G マゾヒストの識別

先ずストリップ劇場かヌード映画またはマゾ的な映画を上映している映画館でカモをお探しなさい。そういう場所に出入りする中年

男の半数はマゾの気を持っていると思って間違いありません。それも顔色が悪く眼尻のたれさがった小男なら十中八、九、大丈夫です。その前へ行行って、あなたの大きな眼でにらみつけておやりなさい。最初は怪訝な顔をするでしょうが、そのうち恍惚として哀願の色を浮かべるようになったら、そいつがあなたのカモノなのです。

H 場所の選定

旅館に行くのも彼のアパートに行くのも結構。マゾヒストは暴力的にあなたを襲うような真似は出来ないのですから危険はありません。だからと云ってあなたの部屋へ連れて行くことはお奨め出来ません。搾り抜いた揚句捨て去る段になってつきまとわれるからです。逆に彼のことは住所も勤め先もすっかり調べあげてしまわなければいけません。それだけは勘弁してくれと云うでしょうけれど、そんなときには「云わないともう附合ってやらないぞ！」と脅迫して白状させるのです。

I 許す限界

極端に云えば何もお許しにならなくたってかまわないのです。平手打や足蹴だけで十分に満足する男も少くありません。しかし彼の

執着を強めるためには下着姿位は拝ましてやる方が得策というものです。そして足ぐらいには接吻を許しておやりなさい。しかし如何なる場合も通常の接吻は断じて許してはいけません。彼はその瞬間それを求めたとしても、得られたあとではあなたが対等の位置にまで堕ちたような気がして失望するものです。元来、彼はあなたに奉仕するためにあり、彼の人格はあなたの蹂躪のためにあるのですから常々思い知らせて置くことが肝心です。

J テクニク

あなたは既にいろいろな書物で知識を持っておられるのですから此処で詳しく説明する必要はないでしょう。平手打、鞭打、足蹴、蹂躪、脊面騎乗、頸部騎乗、顔面騎乗、縛り、パンティー猿轡、ネクタール責め……先ずこの辺が、一般に用いられているテクニクですが、更にそれをいろいろに組合せ、新しい工夫を加えて虐待されるように望みます。

K フェチッシュの効用

はき古したパンティーや長靴下を男に売っておやりなさい。二百円のパンティーは二千円に売れるでしょう。払い下げる場合は洗濯などなさらずに汚れたまま売ってやる方が喜

ばれるものです。もしあなたが洗濯がお嫌いでしたら汚れた下着を全部、洗わせるのも気の利いた方法です。ただしこの場合、男はあなたの香りの残った下着類を舐めまわすに決まっていますから、特に清潔を好まれる方にはお奨め出来ません……。

L 威圧的態度

あなたは一種の催眠術師、肉体の魅力によって男を思いのままに操る催眠術師なのです。催眠術には強烈な自信と威圧的態度が必要です。要だと云われます。すべて男に対しては依頼ではなく命令する調子でおやりになるのです。そして男には敬語を使わせ、あなたは彼を呼び捨てにするか奴隷または犬とお呼びなさい。あなたの方が間違っていると思っても、男にたいしては飽くまで自分の方が正しいのだと主張なさるべきです。「あたしの云うことは何だって正しいんだぞ。信じる！」と御命令になればマゾヒストは屈服します。強烈な自信をもって男の反抗の息の根をとめてしまふのです。

M 搾 取

金は搾れるだけお搾りなさい。マゾヒストは心の底では搾られることを望んでいるので

す。相手がサラリーマンだったら給料の半分を無条件でよこせと命じても案外、成功するかも知れません。云うことをきかなければ会社へ手紙をだしてお前の性格をバラしてやると脅迫するのも手です。更にマゾ・プレイの一々にたいして報酬を要求するのも気の利いた方法です。「蹴とばしてやるから千円およこせ!」「足を舐めさしてやるから二千円よこせ!」「顔の上にまたがってやるから三千円よこしゃがれ!」等々。

以上、大体の手続きを説明しましたが既に判りのようにマゾ男虐めは安楽で危険がなく割のいい金儲けです。あなたのように若くて美しい女性がこの方法を利用していけないわけがありません。売春禁止法にひっかかることもないし、カモの五、六匹もみつければ月収十万はかたい処でしょう。そしてあなたと釣合った恋人をみつけたら、こんな男どもは、さっさと放りだしておしまになればいい。それでもこの豚のような男どもは、あなたに感謝するでしょう。生涯望んで得られないマゾヒズムの天国をあなたによって体験することが出来たのですから。



同じ人種ではな
かった

ミス・ユニヴァース児島
明子の見事な水着写真を前
に私は考える。これが私と
同じ人種なのだろうか。

児島明子（五尺六寸、十
五貫、二二才）

田沼醜男（五尺二寸、十
二貫、三六才）

私が中学にはいった頃は
まだ生まれてもいなかった
この女性が、いまでは肩の
あたりに私を見下す發育ぶ
りである。彼女の肌はバラ
色に照り輝き私の肌は艶の
ない黄色にしながらびてい
る。二重瞼でつりあがった彼女
の眼、一重瞼で眼尻のさが
った私の眼。耳タブが小さ
くてキリッとした彼女の
の耳、耳タブがダラリとた
れさがった私の耳。甲が小

さく引きしまり指の長い彼女の手、甲がだら
しなく横にひろがり指の短い私の手。まっす
ぐに伸びきった彼女の脚は八四センチはある
と思われるのに曲りくねった私の脚は六二セ
ンチ。彼女の腿はコリコリとかたく弾力があ
り、私の腿はミイラのようにひからびている。
とがって槍のような彼女の膝小僧、平たく下
駄のような私の膝小僧……数えあげたらまだ
まだきりがあるまい。これでも同じ人種だ
んと私は僭称してよいものであろうか。

日本人は混血民族だと云われる。古来の毛
深く脊の低い日本人の中に北欧系や南方系
の優越した血が混りこんで出来上った民族な
のだ。

そこで児島明子は、遠く北欧系混血の遺伝
を強く引いた女性だという仮説が可能となり
はしないか。異論は多くあるだろうけれど、
そうとでも考えない限り、同じ日本人の中に
存在するあまりにも甚だしい形態的差異を説
明することは難しい。

さて優秀な北欧系混血児に圧迫された我々
日本原人は彼等に隷従することによって生命
を保証された。日本人の白人崇拜、白人にた
いする本能的マゾヒズムはこの間の事情に由

来するのではあるまいか。そして何千年を経過した今日、児島明子のみならず芸能界に活躍するスターたちの大半は実に支配階級である北歐系混血児を思わせる容姿を持っているではないか。たとえば「痴人の愛」のナオミに扮した叶順子の眼は混血の美少女、入江美樹の鋭い眼と驚くほどよく似ている。我々は同じ人種ではなかったのだ。

もちろん日本人の体質改善には更に大規模に白色人種の血液を恵んで貰い、徹底した混血民族となり我々日本人の劣等な遺伝子を根絶やしにしなければならぬのだが……児島明子がミス・ユニヴァースに選ばれたとき同じ日本人として喜んだ原人はいなかったであろうか？

児島明子の大臀筋

深夜の道に人通りはなかった。男は白痴のような薄笑いを浮かべてついでに行った。長身の児島明子が歩くにつれてタイトスカートの下で逞ましい大臀筋が盛りあがり、ねじれ、震動するのが透けて見えた。

男は次第に足を早めて追いつけると児島明子の大臀筋におずおずと手を伸ばした。児島

明子はキツとなって振返った。男まさりの激越な気性が眼から奔り、その胸のあたりまでしか脊丈のない男は卑屈に笑ってみせた。児島明子は美しい唇をゆがめるとまた歩きだした。男はうしろから今度はスカートをまくりあげた。逞ましい脚線が一瞬、露わになる。「何するのよ、いやらしい！」

「さわらしてよ、姐ちゃん！一度でいいからよ……」

男はよろめくように児島明子の大臀筋にすがりついた。

「いい脚、いいヒップ……」

途端に、彼女の槍のような膝小僧が男の顎を蹴とばし男は蛙のようにひっくり返った。「やったな姐ちゃん、そう来りゃこっちだつて」

男はわめきながら彼女の腰に抱きつきスカートの中に頭を突っこもうとした。児島明子はその耳をつかんで力まかせに引っ張り、男の頬に激しい平手打を食わせた。夜目にも白い児島明子の手が蝶のように舞って男の頬に立て続けに小気味よい音をたてた。男は痴呆のように突立っていた。口の端から涎れをたらしながらうめいた。

「さわらしてよ、一度でいいからよウ」

「助平じい！ 氣狂い！」

今度はアッパ・カットが男を地面に打倒した。男は横たわったまま、うつとりとして児島明子の長身をみつめていた。その手がおずおずと彼女のハイヒールをまさぐった。

「男らしくしたらどうなのよ、女の腐ったのみたい。弱い癖して」

「勘忍……勘忍してくれよウ……いい脚、いいヒップ……さわらしてよウ……一度でいいからよウ……」

「変態！ 助平じい！」

児島明子の若い強靱な脚が男の頭を腹をいやというほど蹴りつけた。蹴って蹴って蹴りまくった。男は法悦のうめきをあげながら動こうとしなかった。

やがて一息ついた児島明子が外国タバコを捨てたとき、血だらけの男が手を伸ばした。咄嗟にハイヒールの踵がその手を踏んずけた。發育しきった全体重をかけて踏みにじった。男の手の甲が音をたてて砕け、男はうつりと涎れをたらしながら、スラリと立つ麗人を見上げた。児島明子が立去るのを男は半分意識を失いかけて見送った。児島明子の長

身が歩くにつれてタイト・スカートの下で逞ましい大臀筋が盛りあがりねじれ震動した。

オリンピック

ローマ・オリンピックは終り、次の大会は東京で行われるとか「スポーツ日本」はいまからもう大変な騒ぎである。しかし劣等人種である日本人が、白色高級人種に伍して対等に闘い得るものであるかどうか……これを戦後四回、行なわれたオリンピックの実績に基いて研究してみよう。

A 金メダル獲得数

- | | | |
|----|---------|------|
| 1. | アメリカ | 一四四個 |
| 2. | ソ連 | 八〇個 |
| 3. | ハンガリー | 三九個 |
| 4. | イタリア | 三七個 |
| 5. | スエーデン | 三五個 |
| 6. | オーストラリア | 三一個 |
- (日本は僅か九個)
- B 金・銀・銅・メダル獲得数
- | | | |
|----|-------|------|
| 1. | アメリカ | 三二七個 |
| 2. | ソ連 | 二〇一個 |
| 3. | ハンガリー | 一一三個 |
| 4. | イタリア | 一〇五個 |

更にメダル数は、その国の人口と対照しなければ民族の優劣の度合は判らない。なにしろ日本は九一〇〇万の人口をかかえているのだ。次は各国民、何人に一個の割で金メダルを獲得したかを示す。

C 金メダル獲得率

- | | | |
|-----|----------|---------|
| 1. | スエーデン | 二〇万人に一個 |
| 2. | ハンガリー | 二五万人 |
| 3. | フィンランド | 二六万人 |
| 4. | ルクセンブルグ | 三〇万人 |
| 5. | オーストラリア | 三十一万人 |
| 6. | ニュージーランド | 四四万人 |
| 7. | デンマーク | 五〇万人 |
| 8. | ノルウェイ | 五八万人 |
| 9. | スイス | 七二万人 |
| 10. | チェコ | 七六万人 |
| 11. | アメリカ | 一一八万人 |
| 12. | イタリア | 一二九万人 |

(日本はなんと一〇一一万人に一個)

此処で注目すべきことは金髪美人をハリウッドへ輸出しているスエーデン(Gガルボ、

I・バーガマン、A・エクバーク、M・ブリット)の優秀さであり一般にフィンランド、デンマーク、ノルウェイなど北歐人種の優秀さである。更に欧米以外でも白色人種の支配的な地域つまりオーストラリアやニュージーランドが上位を占めている事に注意したい。人種に優劣はないなどと云っても駄目だ。この統計は北歐民族の肉体的優越を疑う余地もない位はつきりと教えている。日本人とスエーデンとは五〇対一の開きがあるのだ。

〔附記〕「女神群像」への補足(十月特大号二三頁)

松本弘子(五尺六寸、二十四才)

宝みつ子(不詳)

マイ・ブリット(五尺七寸、十六貫、二十才、金髪)

先に挙げたドミナたちにこの三人を加え、その後、明かになった点を次に附記して置く。

ヘレン・ヒギンズ(五尺五寸、二十八才、混血)

入江美樹(五尺五寸、十六才 混血)

(おわり)

映画に見る変装



(その女装について)

よしお・うえむら

男が女装するという倒錯的な美に魅せられ

私自身、女装することに狂うようなあこがれを持ち、K・K誌上を飾った幾多の告白の中で、同好する人々を知りました。私の今まで見た映画の中に出た女装する人々について書いて見ようと思います。

我が国が世界に誇り得る伝統をもった芸能や歌舞伎の中、また中国の京劇や、ヨーロッパの中世の去勢歌手によるオペラ、またシエクスピア時代の演劇に於ても、堂々と女装

者が出てまいります。

現代に於ても日本芸術の必然的な習慣により、だれ一人その演ぜられるものに奇妙な感じをいだきません。ましてその様式美の表現には欠かすことさえできないのです。

けれども現実の社会に於ては男が女装するというのは、もちろん異端であり、現代の自由なデカダンのとさえ見える日本の風潮にさえ、世間に対してその欲望は完全になかなることは出きません。ましてリアルな目をもつ

映画には、ただ男が女装することは現代風俗の一ショットか、またノーマルな人々を笑わせる道化役者としてしか存在をゆるるされないのは、もつともなことですが……。

とはいえ、まだ日本映画のユリカゴ時代、すなわち一九一〇年代に日活などで、当時まだ映画の女優としての女性が存在しなかったのも、新派ものを映画化し、「不如帰」「金色夜叉」さては「カチューシャ」まであります。現代の映画監督、衣笠貞之助氏など女形で女装とのことです。

私はまだ二十一才の若年ですので、戦前のものは勿論、戦後のものも過去五年ぐらいの間に封切されたものしか見ていませんが、その中で少し興味のあったものをひろって見ました。

現代風俗の一断面として、よくとり上げられるものに「現金に手を出すな」(これには女装者が出てきませんが美しいホモが見られた)以後、ヌベールバーグにまで受けつがれつついているフランス風のギャングもので、各国にもひろがったものですが、たとえば日本の東宝、須川栄三氏の異色作「野獣死すべし」や新東宝の「黒線地帯」東映の「夜の野獣」等々には、少し前から流行のゲイ風俗が

散見できますが、映画内の点景として取り入れられたのみで、ゲイバーに行けば見られるし、作者の好奇心以外に我々女装マニアを満足させてはくれません。

アメリカのギャングものに、今上映される「アパートの鍵かします」を作った名監督ビリー・ワルダールの作品「お熱いのがお好き」と言う、それはもう女装者が主演の映画があります。私の知るかぎり最高にかすものです。そのストーリーにむりがなく、主演者で女装するジャック・レモン、もう一人はトニー・カーテス(カーテスの女装の美しさは見もの)。

ストーリーは二人のジャズメンが、おりから禁酒令下のシカゴの、ギャング酒場を餌になります。なにしろ時代が時代なので満足な職場がなく、女ばかりの楽団に入るため、女になります。

その楽団がマイアミに巡行に行く。シカゴ駅にハイヒールにスーツで二人が現れます。その楽団の中にマリリンモンローがいます。女性美のシンボルのマリリンを配するあたり心憎いほどです。ホテルでかづらをはずして入浴のシーンやギャングにおいかけて、大ボイ姿にハイヒールで走りまわるなど、大

いに笑わせます。

カーテスはモンローと結ばれますが、レモンは、女と思って彼を追いまわす富豪の息子ジョー・E・ブラウンに求められ結婚します。ブラウン氏が男でも女もそんなにちがわないという、おちで映画は終わります。

ドイツ人ワイルダールの女装趣味は一般人以上に私を満足させてくれました。

ジョー・E・ブラウンと言えばNHKテレビにて古いワナーの映画の「ブラウンのサーカス」いうのがありました。これにはブラウン氏が女装してサーカスに、いろいろ騒動がもち上る、どたばた喜劇で、あまりコクはありませんでした。

別の例は、男ばかりの世界にて欲望のはけ口としての女装が見られます。フランス映画の大監督、ジャン・ルノアールの戦前の名作「大いなる幻影」(一九三七)これは第一次世界大戦のドイツの捕虜となったフランス軍人の話で、この映画のヒュマニズムあふれる思想はさておき、捕虜収容所に入れられたフランス人が、慰問品の女装品で扮装し、レビュを開くのです。それがまた、すばらしいものでした。外国では、よくこういうことをするようです。さきの「お熱いのがお好き」の

ビリー・ワイルダールの作品「第十七捕虜収容所」には慰問品の中にブラジャーを入れてありましたもの。祭、カーニバルにも扮装があります。フェリーコ・フェリーニの作品「青春群像」や、彼の近作、K・K誌をにぎやかにしている「甘い生活」にもゲイが少し見られるようです。まだ見ていませんが、S・M共に楽しみにしています。

ついでに女装に関係あるフェチを少し。

映画にコルセットのシーンが時々見られますので、私もよく気をつけて見るようにしています。特におもいきり締められるものに、一九二九年にソ連の大監督ドフキンの名作「アジアの嵐」を最近、見ましたが、コルセットを思いきりしめるシーンがありました。もちろん、ブルジョワの諷刺を意味するのでしようが、おどろきました。「風と共に去りぬ」を見た方も多いと思いますが、これにもビビアンリーが黒人の下女にコルセットをしめてもらって苦しさに悲鳴を上げるシーンがあります。立体映画が少し前、はりました。その中にワナーの「肉の蠟人形」というのに「モデル女のようにになりたい」と言って緊めてもらっているシーンは今でも忘れられせん。

最後に……。

サド・マゾのように一般的なものは映画館の上映映画の中にも、よく見られるのですが、女装という特異なものは、とうてい現せ

ることは不可能です。

我々で作るより仕方がないのです。一つ、八ミリでもよいから女装ファン相集って女装の映画をつくったら楽しいことと思います。

私はシュールレアレスチックな女装のユメを織りこんだ幻想的な詩のような映画を作りたいものだと思っています。皆さんも同感されることでしょう。(一九六〇、十、一)

愛^マ好^ニ家^アの記^ノ録^ト

とやま・かづひこ

バスにて

師走の町を、バスは一ぱいの乗客をつめ込んで走っていた。

途中で、運よく空いた座席に、ヤレヤレと腰をおろす。

目の前に、美しいB・Gらしい女性が二人、買い物帰りらしく、荷物を抱えて、立っていた。

そのうちの一人、背のやや低い方のひとがとつぜん、セキ込んだ。

こみあげるセキを、止めることもできず、

両手は、ツリ皮と、荷物に占められて、おさえもならず、ちょうど、前に座っているかづひこの顔に、まともに彼女のイキが力かり、生あたたかい吐息が、こちらの顔面をやさしく撫でる。

おそらく、この息のなかには、ツバキも、はいっているだろう、カゼのバイキンも、吐きだされ、それを、こちらば吸わせて頂くのだ。それも頭の上から、無理矢理に、遠慮エシャクもなく。

きたないものを、頭上から浴びせられても相手が美女なればこそ、却って嬉しいと思

う。混んでいるバスには、こんなチャンスがしばしばあるので、楽しい。

カラのビン

つぎは12月12日の『日本観光新聞』から『楽屋の方ではネエさん株の浜みどりにモーレッツな六十ジイさんのファンがいて、連日すごい手紙をよこしていたが、最近、手紙にそえて妙なビンを送ってきた。——あなたの——でも飲みたい——という文面である。あのビンは、カラのまま楽屋のすみどころがっているそうだ……』という、うれしい一節。

女優さんや、踊り子さんに、ネクタールを乞う手紙のくる話は、よく耳にするが、わざわざ容器のビンまで届けて、それをめぐんでもらうというのは面白い。

わずか10行たらずの、この文章をよんで、その老ファン氏に、親近感を抱いてしまう。ついでに、老ファン氏に代って、世の美

しい女性のみなさまに、おねがいする。

もしもあなたのお手もとに、そのようなピンが届けられたら、どうか、美しいマユをひそめるまえに、お気軽に、吾々マニアのねがいをきいていただきたい。どうせ捨て去るモノに、熱烈な、欲求を抱く一群があることを知ったら、ゼヒめぐんで頂きたいものだ。

便利な新製品

『主婦と生活』35年12月号290頁。
『安楽尿器』という新案の尿器の紹介が出ている。

説明によれば、女性でも、横に寝たままあるいは、仰向きに寝たまま、手軽にとれるものらしい。

同誌には、実物の図解もくわしく出ているが、なるほど便利らしい。

しかも、挿入されたシャシンをよく見れば吾々の好むプレイの用具としても好適のものようだ。

つまり貯尿器というタンクと、ホースの組み合わせだから、自らを、貯尿器にも使用できるわけ、定価、ワンセット五五〇円

はあまり高価ではない。

なお、この雑誌には、『夜尿症治療器』とか、ベビーおまる、おしめなどの代理部の広告も出ている。

たまには、婦人雑誌も開いてみるものだ。

文 献

『文芸春秋』35年12月号の座談会『考える人からの連想』は近来の好読物だった。

その題名のとおり、古今東西のトイレに関するエピソードが、九頁に亘ってくりひろげられ、おまけに、カットのマン画まで、ケツ作なのだ。文中、高名な女優が二人、女でも立小便ができるかどうか、カケをするエピソードや、松竹の映画女優で、こういう話のスキなひとがあり、パーティをやる、それも、凝って、食器は、便器で代用するはなしなど、じつに楽しい。

同じく、同社の『オール読物』35年8月号にも、すばらしい文章がでている。

すなわち、同誌の74ページの、作家、永六輔（えい、ろくすけ）氏のずい筆、父のオナラという二頁のもの。

文中に、ジャズ歌手として有名なOが、『

愛する余り、固体を食べた』という話が出ている。誰を愛したかは、容易に想像できるが、花形タレントとしてテレビで活躍する人だけに、いかにも迫力のあるはなしだ。

また、これも、ラジオ・テレビのディスクジョッキーで有名な、K氏にも、この方面の趣味があるようで、マヨネーズと、カシでやわらかい、固体の模型をつくり、自分の尻にこれをぬってオムツをあて、赤ちゃん時代を思いだすという実話がある。

筆者、永氏は、この種のはなしに興味を抱いていることを述べている。吾々とは、方向は異なるとはいえ、排泄物に興味を抱く有名人は案外、多いようだ。

折柄、サドの『ソドムの百二十日』が抄訳ながら、邦訳された。

さっそく読んだが、その内容のすばらしさには、まったく打たれてしまった。

こうして、戦前には、あかるみに出なかった『コプロ趣味』が、マスコミの世界に登場しつつあるのは嬉しいことだ。

そして、本誌のごとき、後世に残るべき文献誌は、このような刊行物が出されたことをコクメイに記録しておく、『義務』があるのではなからうか。

(キリシタン悲話)

島 原 恋 歌

灘 鵜

藤

五

郎

・ 画

恵

寛永十三年（一六三六年）。

九州島原。

春――。

一

私は島原半島に住む百姓の娘、雪乃と申す十八才の少女でございます。

島原に住むとはいえ、キリシタンとは限りません。天主教徒とは何の関係もない貧しいただの百姓の娘でございます。

ですから徳川幕府の厳しいキリシタン弾圧

には、なにも恐れることはないのですが、苛酷な年貢には、ただただ畏怖心が増すばかりでございます。

と申しますのも、この年、有馬村は昨年に次ぐ凶作に見まわれたのでございます。

それは年貢どころか一日のわずかな糧さえない恐ろしい事態でございました。

こんな状態でどうして年貢など収めることができましょうか。

しかし、島原領主、松倉長門守勝家さまの年貢徴収は日増しに激しくなるばかりでござ

いました。

ある日のことでございます。

隣家のかえでさんの庭先から、なにやら怒声が聞こえてくるではございませんか。

不審に思って垣根越しに覗いて見ますと、二人のお役人が、かえでさんとそのご両親の前にして、お怒りのようでございます。

「一体、その方どもは、お上をなるところえておるのだッ」

かえでさんとご両親の三人は、声もなく土

下座して役人の声に恐ろしそうに震えております。

「新兵衛、黙っていても分らぬ。返事をせぬか返事をッ」

新兵衛と呼ばれたかえでさんのお父さまは、もう言葉もないのでしょうか、ただ大地に頭をすりつけるばかりでございました。

どれだけ凶作だと説明しても相手にしてはくれないのでございましょう。

代官だとして分らないのではございません。

分りすぎるほど分っていないながら、そのような厭がらせをするのに違いありません。

何故、そんな非道なことをなさるのでございましょう。

私にはおぼろげながら分っております。代官にとって必要なのは年貢などより、かえでさんなのでございます。

「新兵衛、納めることのできない者に、無理に納めよといっても、できないことは分っておる」

何を思ったのか役人は急に声をおとしました。これが同一人の口から出た言葉なのかと思う程、それは静かな声でございました。

「エッ、それではお役人さま……」

「待て、話がある。良い娘ではないか——」

小さな声でも、のどかな春の朝でございす。垣根の内にソツとたたずんだ私の耳にも、それは手に取るように聞こえてまいります。

「どうじゃ、新兵衛、かえでと申すそちの娘——」

「ハッ？」

やはり私の思ったとおりでございました。

かえでさんのお父さまは、いぶかしげな表情で役人の顔を見ております。

「分らぬか、年貢徴収にそちの娘の話がでれば——」

「エッ、それでは役人さまはかえでを……」

役人の意中が分って、かえでさんのご両親のお顔は見る見る蒼ざめていきました。傍の役人は不気味な笑みをうかべて、身を固くして震えているかえでさんの顔を見詰めております。

質素な衣に身を包んでいるとはいえ、優雅な容貌と雪のような白い肌は輝くばかり、百姓の娘には見えません。

それから一刻ほど後に、ご両親の抵抗もむなく、かえでさんは代官所へ引き立てられて行きました。

納得のできぬ言いがかりをつけて、二人の役人はアッという間に、かえでさんのか細い

両腕を背後に廻して、細引きで緊く縛しめてしまいました。その縄尻を引かれて、かえでさんは陽炎立ちのぼる畔道を引かれていったのでございます。

このような悲劇は有馬村では珍らしいことではございません。

重税とキリシタン迫害に明けくれて、その年の春が過ぎました。

ある夏の日のことでございます。

言い忘れましたが、私には四ツ年上の姉がおります。その姉と二人で庭の隅に重なりあって汚れているミノの整理をしております。すでに父はなく、母は病いで臥っております。暗い部屋の中から母の苦しうにせきこむ声が聞こえてまいります。

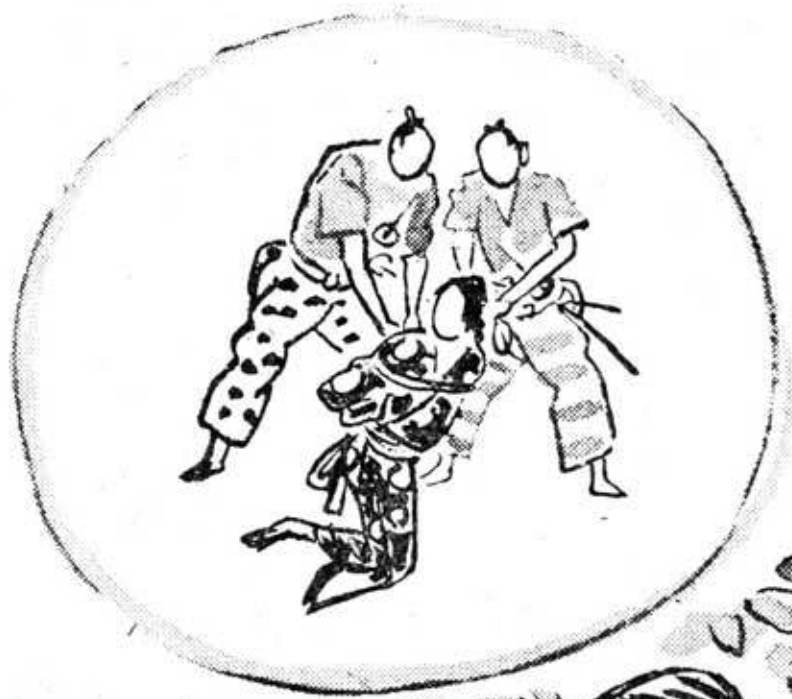
流れでる汗を拭ぐいながら、ミノの整理も終わりに近づいてきました。

ほっと一息ついて見るともなしに畔の方に眼をやったときでございす。

忘れもしません。過ぎし春の日にかえでさんを引き立てて行った、あの二人の役人が私の家に向かって来るではございせんか。

私の脳裏に涙を眼にいっばいいうかべなが

五郎五



ら、縛しめの身を引き立てられていった、かえでさんの姿がうかびます。

それにしても役人は私の家に何の用があるのでしょうか。苦しい中にも深雪姉さんの働きで、年貢は遅ればせながら収めました。どうして姉さんの顔色は変わったのでもない。です。から年貢の徴収ではございません。

そんなことを考えているうちに二人の役人は、やがて姉と私の前に立ちました。

「深雪というのはお前のことか」

そう言って、二人は深雪姉さんを見詰めます。役人の言葉に急に姉さんの顔色は蒼ざめました。どうして姉さんの顔色は変わったのでもない。

悪いことをするような姉さんではございません。私には疑問でした。

突然、役人が大きな声で深雪姉さんに向かつて言ったのでございます。

「その方、隠れキリシタンであろう。密告があった。どうじゃ——」

驚いたのは姉さんより私でございました。 (深雪姉さんが隠れキリシタンだなんて……) 姉さんは無言でうつ向いています。

何も反抗なさらないところを見ると、ほんとうに隠れキリシタンなのでございましょうか。

「黙っているところを見ると隠れキリシタンに違いあるまい」

二人の役人はそう言って深雪姉さんの手をとって縛しめてしまいました。

それはアッと言う間の出来事で、私の口をはさむ術もございません。

縛しめられると姉さんは私を後にして、奉行所へ引かれて行きました。

姉さんと二人の役人の姿が視界から消えるまで、私は茫然とムシロの上に坐ったままでございました。

(深雪姉さんが隠れキリシタン……)

私の胸中はただ驚きが渦を巻いているばかりでした。

でも、どうしてそれが奉行所に知れたのでございましょう。先刻も役人が言ったように誰かが密告したのでしょうか。

隠れキリシタンといえど天主教徒に違いはございません。それを密告した者には、銀百枚を授かるというご時勢でございすから。

姉さんが捕われたのを母は知らないのでもうございましょうか。ソツと暗い部屋の中を覗くと静かに眠っていらっしやいます。もしそうでなくとも耳の悪い母さんには聞こえなかったことでしょうか――。

私は思いました。

姉さんは、これからどのような目に会われるのでございましょうか。噂によりますと捕われたキリシタンは、奉行所の白洲に置かれた、ゼウス様とマリア様の御像を足で踏むことを強要されるそうでございす。

もし踏むことができなかったら完全に信徒と見なされ、そこでころびを迫られます。しかし幕府の迫害の恐れと苦しみに耐えて、ひたすらキリストへの愛と信仰に生きる人々が、簡単にころぶ訳がございません。

そこに待っているものは、恐ろしい数々の

拷問と責苦なのでございます。

そして、それにも屈しなかった人々は、残酷な処刑を受けて死んでいくと言われております。

深雪姉さんも、きっと処刑されるに違いありません。

(私は一体、どうしたらいいの――)

二

私が天主教徒になろうと決心したのは、夏も終わり佗びしい秋風の吹く日のことでした。シモーヌという洗礼名を授かった私は、十字架のついたマリア様の御像を胸に日夜、聖書を前にして信仰に励みました。

姉は処刑され母は他界し、今は孤独の身となった私にとって、聖母マリア様と恋しい三郎太さまだけが生甲斐でございす。

三郎太さまは亡き姉と同じ二十二才。

ただキリシタンではないということが姉や私と違う点でございました。

でも三郎太さまがキリシタンであろうとなかろうと私は深く愛しております。

孤独な私にとって、二十二才の三郎太さまは、どんなに力になってくれたことでもございましょう。

手内職に追われる私の身では、日に一度、三郎太さまとお逢いできる隙もありません。三郎太さまは、そのようなとき、きっと私の家へおいでになりました。

そして不器用な手つきで私の仕事を手伝って呉れるのでございます。私は三郎太さまの手の恰好を見て何度笑ったか分りません。笑っているうちに、いつの間にか泣いてしまうこともありました。やさしい三郎太さまのお心を知って――。

でも、そのような貧しいながらも二人にとって楽しい日々は、この島原に居ては長くは続きませんでした。

徳川幕府の厳しいキリシタン迫害に加え、暴政、飢饉、重税の暗黒生活のうちにも月日は流れていきました。

翌年、寛永十四年(一六三七年)。

夏――。

遂に恐れていた日がやってまいりました。

その日、私は三郎太さまと二人で畔道を我が家へ向かっておりました。

孤独な私の生活を支えるものは手内職以外に途はありません。

心細い日々、お察し下さいませ。

それを届けに行った帰り道、三郎太さまと

お逢いしたのでございます。

忌まわしい出来事は、その途中でなんの前ぶれもなく起こりました。

寄り添って歩いている私たちの背後で人の呼ぶ声がいたします。二人は足を止めて声の主を待ちました。それは三人の役人でございました。

私はハッと思いました。

と、思ったときにはすでに遅く近づいてきた役人は私ばかりか三郎太さままで緊く縛しめてしまいました。

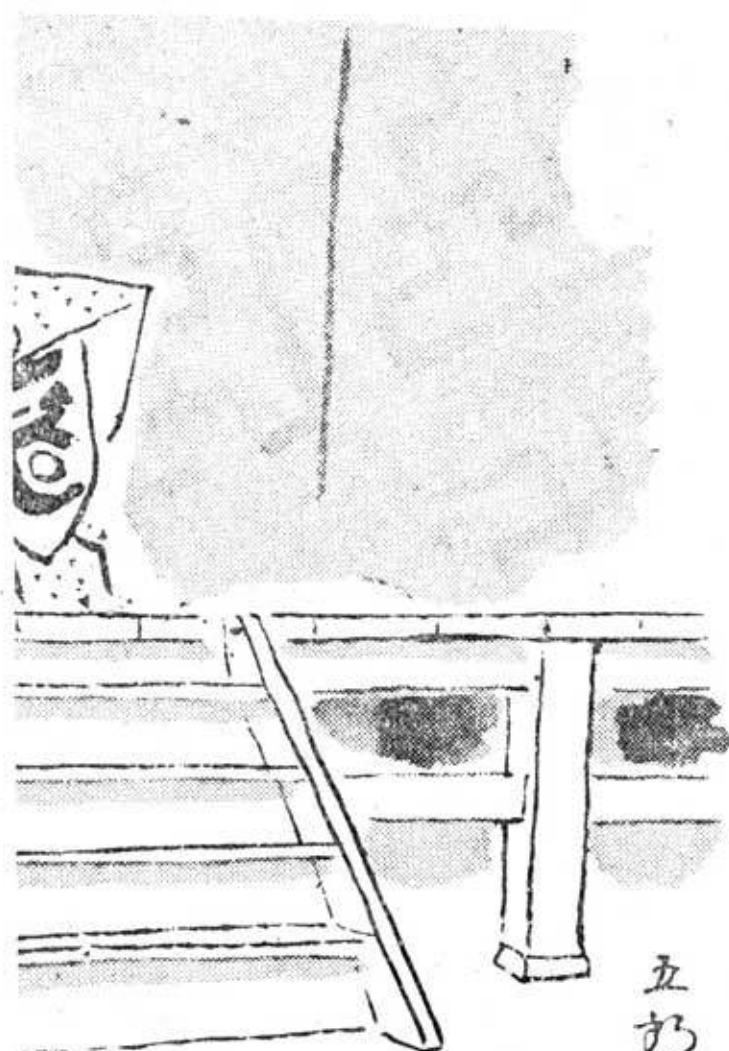
私はもう覚悟してはいましたが、驚いたのは三郎太さままでございましょう。なんの罪も

ない清廉潔白な身体を、ウムを云わせず縛しめられたのでございますから。

私たち二人を縛り終わると役人は憎々しげに「キシタンめッ」と言いながら縄尻で私の肩や背を打ちすえました。

それを聞いて三郎太さまは、初めて事のあらましが、お分かりになったようでございます。そして不思議なことには縛しめの身をなんの弁解も反抗もせずに、私の前を役人に引き立てられて行くのでした。

白洲に坐った私と三郎太さまを代官の冷たい眼が見下しております。



五つ並

「その方たち、キシタンでありながら、今日まで、その身を偽っていたふとどき許せぬぞ。だが、そこなるマリア像の踏絵をするなら処刑を免じてつかわすがどうじゃ——」

「……」

「……」

私も三郎太さまも無言でございます。

「雪乃とやら踏んで見よ」

重い代官の声が白洲にひびきます。同時に私は、マリア様の御像の前に引き立てられました。

「さあ踏めッ、踏むんだッ」

役人の声に私の身体は一瞬固くなります。どうしてマリア様の御像を、この汚れた足で踏めるでしょうか。

身動きもせず立っている私の背を役人は六尺棒の先で小突きます。

踏まなければ後に待っているものは苦しい拷問に違いありません。

しかし天主教徒である私が、マリア様の御像を足の下にできる筈がございません。

白洲に立っている私の身体はワナワナと震えました。そして遂にマリア様の御名を呼びながら、その場に泣き伏してしまったのでございます。マリア様の御像を額にこすりなが

ら泣いている私の腰を役人は力いっぱい蹴り
つけます。

「アッ」

私は叫んで白洲に倒れました。



「キリシタンめッ、立つんだっ」

役人の冷たい声と共に縄が背にたたきつけ
られ、尚も厳しく縛しめられて白洲に投げ出
されました。

次には三郎太さまが私と同じように、マリア様の御像の前に引き出されました。ところがどうしたわけなのでしょう。役人の激しい強要を前にして、三郎太さまは平然と構えておいでになります。

そればかりかマリア様の御像を踏むように責められても踏む気配さえ見せません。

白洲に坐った私は自分の眼を疑いました。考えてみれば三郎太さまの行動は不思議という外はありません。

先ほど、役人が私のことをキリシタンめっと言うのを聞いて縛しめの身をなんの抵抗もせず、いまは又、私から感化を受けているとはいえ、洗礼も受けず隠れキリシタンでもない三郎太さまなのに、マリア様の御像を踏もうともいたしません。

(もしや……)

そのとき、私の心に閃めいたものがありました。

(三郎太さまは私を愛している。キリシタンの私はマリア様の御像を踏まなかった。後に待っているものは転宗を迫る拷問なのだ。それに屈しなかったら処刑が待っている。私が死を決意していることを三郎太さまも……もしそうなら、いいえ、きっとそうに違いない

「三郎太さまッ」

私は無意識に三郎太さまの名を呼んでおり
ました。

「いけませんッ、お踏みになってッ」

ああ、しかし三郎太さまは縛しめの身をこ
ちらに向けて、ニコリ微笑し、顔を静かに
横にお振りになったのでございます。

それが、三郎太さまが恋のために私と死を
共にするという、微笑に他ならなかったの
でございます。

三

暗い一日が過ぎました。

牢を引き出された私は白洲に向かいます。

三郎太さまも同じでした。すべては昨日とな
んの変わりもございません。

代官の怒りは激しく、拷問の命令が下され
ました。

拷問の恐怖に怯えるのは、私と三郎太さま
だけではございません。

その日の白洲には数人の信徒たちが私や三
郎太さまと同じ思いで坐っております。

その中でも十九才の私が最も若年でござい
ました。

最初に白洲の中央に引き出されたのは、二
十二、三才と思われる女の方でした。その方
は、一旦、厳しい縛しめを解かれたうえで、

腰のものを残す、すべての衣類を剥がされま
した。そして、再び幾重にも縛しめられて、
失神するまでムチで打たれました。気を失う
と役人は、ムチの傷が赤紫に残っている痛々
しい身体に、情容赦もなく水を掛けます。

意識が回復すると再び拷問が始まります。
何回、その方は失神したことでございませ
うか。

最後には役人や私たち信徒のしている前
で、言うも恥ずかしい拷問を受けました。

それまでは、どんな責苦にも耐えてきた方
が、その恥ずかしい拷問に遂に我慢ができな
くなったのでございましょう。

「ええいっ、まだこれでもころばぬかッ」

と言う役人の声に涙を眼にうかべながら、
「アーッ、お許しッ、お許し下さいッ。ころ
びますッ、ころびますッ」

と叫んでしまったのでございます。

次は三十才前後の男の方でございました。

その方は、いま自分の眼前で行われたばかり
の残酷な拷問に、責苦を受けないうちからブ
ルブル震えております。そして、役人がムチ

を手にしますと、白洲に脂汗の光る額をすり
つけて、聖母マリア様にお叛きになってしま
いました。

そのようにして数人の信徒が拷問を受けた
のでございます。その中の大半は、やはり心
からの天主教徒でございました。どのような
責苦を受けようとも転宗の気配すら見せま
せませんでした。

私は固く誓いました。私もあなた方と同じ
ですと——。心の中でマリア様の御名を呼び
ながら。

三人目はまた女の方でした。その方は女の
私でさえハッとするほど美しい女性でござい
ました。

代官は、その方をみよと呼びます。

最初からその方は、生まれたままの恥ずか
しい姿にされました。そして、数人の役人や
信徒たちの前で、四ツん這いにされて白いお
尻をムチで打たれました、ムチが鳴るたびに
四ツん這いになったその方の口から、苦痛の
悲鳴がほとばしります。

ムチ打ちの拷問の後、みよという女の方
は数々の責苦を受けたのでございますが、最
後まで転宗を叫びませんでした。最後のあま
りにも残酷な拷問に、その方が気を失ったと

きには、代官所の白洲にも黄昏の気配が濃く漂っていました。

私と三郎太さま二人の身体は、その日は無事に過ぎたのでございます。

翌日、私と三郎太さまの二人だけが白洲に曳き出されました。

そこで私は、三郎太さまの見ている前で拷問を受けたのでございます。

若い女は必らずと言ってよいほど、裸にされます。それも羞恥心に訴える拷問の一種と言えましょう。

最初はお決まりのムチ打ちの拷問でした。誰しも同じこととてございましょうが、最初の二、三打は、そんなに苦痛ではありません。時が経つにつれ、ムチ打ちの回数が増えるにつれ、それに比例して苦痛も次第に増大していきます。

焼けつくようなムチの苦痛が、背から身体全体に伝わり、それは腰の上で縛しめられた、両の手首にまで容赦なく振り下されるのでございます。

項からお尻にまでムチの洗礼を受けた私の身体は、まるで湯でも浴びたように脂汗で光り、額から流れ出たそれは眼に入り、そこに

映るすべての物が二重にも三重にも見えるのでした。

どれほど背にムチを受けたでしょうか。齒をくいしばって苦痛に耐える私の耳に、役人の声が聞こえます。

「まだころばぬかッ」

転宗を迫るその言葉に、私は夢中で叫びました。

「ころびませぬッ。ア—ッ、マリア様ッ」

その声に代官の怒りは増大したようでした「エエイッ。かまわぬ、乳房を打てッ」

私は瞬間、背を丸めました。

女の本能がそうさせたと言っても過言ではありません。

代官の言葉を機として、責具はムチから太い青竹に変わりました。

「ア—ッ、あれで……」

そう思うと私は、尚も両手を背後に縛しめられたまま胸を縮めました。

しかし、それも一瞬のはかない抵抗にすぎません。

頭上で、青竹を手にした役人の声が致します。

「背を押し胸を張るんだッ」

私はそれにさからって、胸が正坐した膝に

つくまで腰を曲げました。

すると役人は青竹を横に倒して、乳房と両膝のわずかな隙間に挿し込んで、私の上体を引き起こそうといたします。そればかりではありません。右手に青竹を持ちながら、左手で髪を掴んで後にグイグイ引くではございませんか。抜けるような頭髪の苦痛と、乳房を責める青竹の苦痛が一体となつて、私の身体を襲います。女の力ではそれにさからうすべもなく、最後には遂に上体を元のように伸ばすことを余儀なくされてしまいました。

突然、青竹が乳房に鳴ります。

ビシッ

「ハ—ッ、ウッ」

第二、第三と青竹は乳房を強打し、そのたびに苦悶の声がかき立てられます。受ける激痛に、背は無意識のうちに曲がってしまいました。青竹から少しでも乳房を庇護したいために。

私にはマリア様を信ずる固い決意があります。どのような責苦にも耐え得る自信があります。それは十九の女の身体では、不可能かも知れません。しかし、人間には精神力というものがあるように、追いつめられた人間のそれが、体力に勝るといふことは、周知でこ

ございました。恐怖と苦痛は常に離れなくとも……。

背と乳房に対する青竹の拷問が終わると、その場で私はやっと縛しめを解かれました。しかし、それは拷問が許されたことではございません。より以上、苦しい拷問が待っていることを意味しておりました。

縄が解かれると、ムチ打ちに破れた乳房と背の肌、血止めと苦痛を増大させる意味から白洲の砂がすり込まれました。ムチ打ち以上の苦痛に、苦悶の声が洩れます。

「アッ、ウーン、ハッ、苦しい……」

代官は、それを待ちかまえていたようでございます。

「どうじゃ、雪乃。ころぶか？ころぶと申せッ。一言そう言えば、そのように苦しまなくとも済むのだぞ——」

私は喘ぎながら叫びました。

「ころびませぬッ。アー、サンタ・マリア様」

四

これが噂に聞く海老責めというのでございましょう。先刻から私は、このような苦しい姿で責められております。

牢の中で胡坐をかいた私の首に太目の縄が

掛けられ、その縄は交叉した両の足首に連結されております。首と交叉した両足は引き絞られて背を伸すこともできません。

もう、どれくらい、このような哀れな姿で責められ続けてきたこととございましょう。海老責めのまま牢につけられたり、木から吊られたり、人間の考え得るあらゆる拷問がくりかえされました。

そのようなときでも、朦朧とした意識のなかで、私はマリア様の御名を呼びつづけました。そして、きっと三郎太さまもいまごろは、私と同じように苦しい目にあっているかも知れない。キリシタンではない三郎太さまが、私への愛の為に苦痛と闘かっていらっしゃるのだと思うと、どんな苦しみにも耐えなければ、三郎太さまに対して済まないという気持ちで胸の中がいっぱいになるのです。

いま私は海老責めの身体であらゆる凌辱と責苦を受けて、牢の中にそのままの姿で放置されております。

もう、何も考える元気はなく、ただ胸の中を占めるものは、ジワジワと襲いくる苦痛から少しでも早く逃れたいという浅ましい思いのみ。ついには、このまま気を失なうのではないかと思いました。

そのとき、頭上で突然、役人の声がいたしました。

いつの間に牢内に入ったのでしょうか。いつの間に私の傍に立ったのでしょうか。それにも気づかないほど、意識は失神寸前の朦朧としたものでしたのでございます。

役人は二人でした。二人の役人は無言のまま、首と足を連結した縄を解いてくれたのでございます。そのときほど、いつもは私の身体を責める役人の手が嬉しいと思ったことはありません。

縄を解くと役人は初めて口を開きました。「どうだ、まだころばぬか。ころべ、そうすれば、このような苦しい思いをしなくとも済むのだぞ」

私は何も言えません。それほど疲れきっている私の身体なのです。

何も言わない私を見ると、役人の一人は私の身体をいままで責めていた縄をもてあそびながら「もう一度、海老責めにされたいのか」と冷笑をうかべながら言うのでございます。その言葉にも、私は応える元気はございません。ただ、私にできることは首を左右に振ることだけでございました。

「では、ころぶと申すのだな」

役人は私が首を左右に振ると満足
そうに言いました。

その言葉にも私は同じ動作をくり
かえしました。

「なに、まだころばぬのか、強情な
女めッ」

それが役人の最後の言葉でござい
ました。

二人はたがい眼くばせをしあう
と、再び私を海老責めに縛りあげて
しまったのでございます。

やがて、牢内にも黄昏の気配がか
すかに漂う頃、私は、次第に意識の
薄れていくのを感じていました。

気がついたときには海老責めの縄
は解かれておりました。

玉のような汗が肌に光っているの
が、牢内の薄明りの中でもはっきり
分かります。

牢の中でさえ、衣類を身に着ける
ことも許してはくれないのでしょうか。

私は夢を見ていました。汗はその為のもの
でございましょう。たまらなく恐ろしく厭な
夢でございました。



五郎重

それは恋しい三郎太さまが磔の刑にかけら
れて、苦悶している悪夢でした。

十字架に縛られた三郎太さまの身体に、数
本の鋭い槍が突き刺さり、そこから見る見る

うちに鮮血がほとばしります。

三郎太さまの苦悶の顔と槍と鮮血が、疲れ
きった私の脳裏を輪になってグルグル廻転し
ています。私は夢中で恋しい人の名を叫びま

した。

そこで眼が醒めたのでございます。

「三郎太さま……」

ソツと胸を抱きしめながら、もう一度、現実の世界の中で呼んでみました。

今頃、三郎太さまも牢の中で、私のことを想っていてくださるかも知れません。

私がマリア様を信じたばかりに、三郎太さままでも死の道連れにしなければならなくなってしまったのでございましょうか。

不吉な夢は二人の処刑を暗示しているのかも知れません。私はもう十分に、その覚悟はできております。三郎太さまだと同じこと、いいえ、私以上にその決意は強いものでございましょう。

いつの間にか、牢内は薄暗くなっております。

あの薄明の悪夢から一日が過ぎようとしています。

そのとき、牢の外で役人の声がいたしました。やはり私の思っていたとおりでございました。それは、お仕置の合図だったのでございます。

囚衣を着せられた私は、その上に縄を掛け

られます。

そして白洲に曳き出

されますと、そこには、

すでに三郎太さまが私と同じように、囚衣の

身体を縛しめられておりました。

役人に縄尻を取られ

た私は、三郎太さまの姿を見ると、それを振り離して三郎太さまの傍に走って行きました。

「三郎太さまッ」

「オオ、雪乃さんッ……」

三郎太さまも言葉はなく、ただ私の名を呼ぶだけでございます。

私は泣いていました。三郎太さまは不思議なほど冷静に私を見詰めております。

その眼には、男ですもの涙などあろう筈がございませぬ。ただそこには愛情に満ちた光

りがあるだけでございました。

私はもう一度、三郎太さまの名を呼びました。

「三郎太さまッ」

返事の代わりに三郎太さまは、私の眼を見ながら微笑をうかべて頷ずかれました。それを見ていると不思議にも、自分の心が明るく

臨時増刊号

長篇サド小説『青い廃院』

◎弓沢、永山の両作者が、満天下の斯道愛好者の熱望の応え、堂々と放つ二大異色作品！

弓沢俊二郎作、四馬孝画——「青い廃院」——
永山久美雄作、杉原紅児画——「与那国奇談」——

残部僅少、只今お申込を。 定価二百円（特価百円）

なっていくのが感じられます。

（もう泣くのは止そう。自分には三郎太さまがついている。三郎太さまと一緒に死ぬことができるんだわ）

そう思うと涙も止まりました。

白洲は夕日に赤く染まり、眼を上げるとその向こうは刑場でございます。そこには数本の十字架が不気味に並んで立っていました。それに向かって私と三郎太さまは、黙々と足を運びます。二人は一言も口を開きません。ただ肩を寄り添って、夕日に向かって進んで行くばかりでした。

三郎太さまは信仰の為に命をお捨てになるのではありません。私はそうなのに……。

恋が三郎太さまを死に追いやるうとしているのでございます。私を——雪乃を愛したばかりに……。

胸の中で私は三郎太さまにお詫びいたしました。

(三郎太さま、許して下さい。でも雪乃は嬉しいの。だってあなたと一緒に母や姉の傍に行くことができるのですもの——)

もう何も思い残すことはありません。

十字架が次第に近づいてまいります。それは眼も醒めるような赫い夕日に、長く影を落

しております。

シモーヌ雪乃は、いまおひざもとへまいります。

ゼウス様——

マリア様——

(完)

〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13㎝)
各組一枚一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇〇円

1	柔肌に強烈な荒縄	(須川令子)
2	海浜に於ける緊縛	(萩千恵子)
3	床間の飾り物	(佐賀美智子)
4	高小手猿ぐつわ	(花坂道子)
5	海老責し	(萩千恵子)
6	後手猿ぐつわ	(須川令子)
7	後手足し	(村田那美子)
8	鏡に映つた後手	(伊吹真佐子)
9	股間し	(須川令子)

10	鎖し	(萩千恵子)
11	股間し	(伊吹真佐子)
12	女学生制服し	(須川令子)
13	尻立後手し	(萩千恵子)
14	開股し	(川辺砂登子)
15	猿ぐつわの魅力	(伊吹真佐子)
16	トイレでの縛り	(須川令子)
17	立木野外し	(村田那美子)
18	緊縛横臥	(厚狭春江)
19	足湯し	(伊吹真佐子)
20	いたふり	(春日ルミと伊吹)
21	帆立し	(萩千恵子)
22	強烈な梯子	(伊吹真佐子)
23	梯子責め	(佐賀美智子)
24	逆さ本吊り	(伊吹真佐子)
25	後手吊り	(伊吹真佐子)
26	股間し	(中塚文子)
27	逆エビ責め	(伊吹真佐子)
28	高小手し	(加賀利江子)
29	変型足し	(萩千恵子)
30	松樹後手し	(村田那美子)
31	くさり	(伊吹真佐子)
32	薄羅の後手	(加賀利江子)

33	股間タテし	(中富綾子)
34	首縄股間し	(坂口利子)
35	手足逆吊り	(伊吹真佐子)
36	和服の後手し	(藤田節子)
37	仰向全裸悦	(川端多奈子)
38	後手首縄	(加賀利江子)
39	乳房下し	(村田那美子)
40	肉体美への折檻	(伊吹真佐子)
41	お灸	(春日、伊吹二嬢)
42	後手猿ぐつわ	(萩千恵子)
43	松樹縛り	(村田那美子)
44	コルセット縛り	(中塚文子)
45	股間し	(萩千恵子)
46	手と足と緊縛	(加賀利江子)
47	後手し	(萩千恵子)
48	御開帳	(川端多奈子)
49	くさり	(須川令子)
50	折檻の魅力	(愛川悦子)
51	全裸の股間し	(大塚啓子)
52	逆立の折檻	(須川令子)
53	開股椅子	(花坂道子)
54	振袖の緊縛	(村井知可子)
55	腰元の吊り責	(愛川悦子)
56	ヌードし	(田中芳代)
57	本縄し	(川辺砂登子)
58	股間し	(益田房子)
59	落花狼藉の緊縛	(川辺砂登子)
60	樹間のハリツケ	(益田房子)
61	帆立舟のセメ	(益田房子)

72	逆エビ責め	(愛川悦子)
73	変型全裸股間縛	(花坂道子)
74	ヌード縛り	(萩千恵子)
75	全裸横臥緊縛	(村田那美子)
76	ビクニツク	(須川令子)
77	ハイヒール	(大塚啓子)
78	湖畔の宿にて	(田中芳代)
79	尻立逆し	(愛川悦子)
80	下着の色模様	(花坂道子)
81	目隠し開股縛り	(愛川悦子)
82	後手高小手	(大塚啓子)
83	乳房縛り	(田中芳代)
84	開股ベツド縛り	(愛川悦子)
85	全裸床柱縛り	(愛川悦子)
86	亀ノ甲縛り	(萩千恵子)
87	ヌード股間縛り	(愛川悦子)
88	全裸乱れ髪	(大塚啓子)
89	ガンジガラメ	(川辺砂登子)
90	臀部丸出し猿轡	(愛川悦子)
91	破れたシユミーズ	(中塚文子)
92	女学生し	(伊吹真佐子)
93	破れたシユミーズ	(坂口利子)
94	女学生し	(須川令子)
95	仰向開股し	(萩千恵子)
96	乳房くさり	(川辺砂登子)
97	野郎くさり	(村田那美子)
98	トイレ正面排泄縛	(中塚文子)
99	開股正面し	(伊吹真佐子)
100	乳房縛り	(佐賀美智子)



新稿

ある夢想家の手帖から

沼 正 三

第二十六章 妻による夫の虐待

さかさまに、夫に出いと言う女房

(冠付け集)

エプロン亭主は妻に仕えることを楽しんでいるのだし、かりにその前にペナントを巡る夫婦斗争があるにしても、敗れて降参した亭主は、妻の優越さえ認めれば許して貰えるのだから、家庭の平和は維持できる(厳密に言うと、三者関係即ちコキユのモチーフが入るのは困るわけだが)。ところが運の悪い場合にはその最小の平和さ

え維持できなくなって来るのだ。観念の上ではマゾヒストの極楽だが、現実には地獄であろう様な家庭が成立し得る。それは妻に強度の嗜虐性ある場合である。

蒲松齡の醒醉姻縁伝は、そういう悪妻に廻り逢った男の悲劇を描いた長篇傑作と聞くが、私は簡単な梗概しか読んでいないので、ここには引用しない。然し、同じ作者が聊斎志異中に収録している短篇「江城」で、その長篇の風貌は窺える様である。

高という男が江城という美女を妻にする。すぐ尻に敷かれる。叩き出されて軒端で寝たり、怒りを積くの長こと跪いたりする。

ある日、高は妻の撻楚しちちに耐えきれず……父の所へ逃げて来た。両親が怪しみながら聴いていると、女は撻むちを携えて追いかけて来て、舅の傍ながら高を捉まえて撻うつのである。……何十か撻う

ってから、ぷりぷりして帰って行った。……女は高の耳を摘んでつれ帰り、針で両股を万遍なく突き刺して、寝台の下に臥かし、目が醒めると怒鳴りつけるのだった。高は女を虎狼の様に畏れていたもので、たまに優しい顔をして伽をさせても、ふるえていて役に立たなかったから、女は高の頬ぺたを撲りつけて叱ってさながらせたが、それから……ひとなみの取扱いをしなくなった。高は毎日女のそばにいながら、囚人が獄吏を尊むようにして暮らしていた。……女はいつも、素足で踏んだ餅を地面に投げて、高にそれを拾って食わせた。そんなことが、まだほかにもいろいろあった。……夜中だった。女がいきなり喚び醒すので、高は小便をするのだろうと思つて、溺盆^{しひん}を捧げて進めた……。

この程度の抜萃でも充分であらう。奇クの小説にでもありそうな夫婦生活である。ここまで高を仕込んだのは、全く江城の嗜虐性なのだ。

更に、男の方にマゾ性格がある為、女の持つサディズムを誘導挑発する、という場合も考えられないではない。余り知られていないが、太宰治の「男女同権」がそれである。

若い頃、一時、名を得たがやがて落魄し、故郷で弟の世話になつて隠棲している老詩人の演説にかこつけての告白である。

幼い頃から、女性にいいめられ通して来た。生みの母さえ、弟を可愛がって、彼には辛くあたった。下女にまで恥かしめられた。小学校の先生の美しい奥さんからも軽蔑玩弄された。上京して吉原に行けば、おいらんからさえ馬鹿にされた。……これらの具体的記述は、精神的被虐（肉体的暴行は少しもない）の好例といえるが、ここでは省略しよう。さて、彼の結婚生活は、

私は東京に於いて、三人の女房に逃げられました。最初の女房もひどい奴でしたが、一番目のは、なおたちが悪く、三番目のは、逃げるどころか、かえって私を追い出しました。へんなことを言うようですが、私はこれでも、結婚にあたって私のほうから積極的に行動を開始したことは一度も無く、すべて女性のほうから私のところに押しかけて来るといふ具合で、いや、でもこれは決してのろけではございません。女性には、意志薄弱のダメな男をほとんど直観によって識別し、これにつけ込み、さんざんその男をいためつけ、つまらなくなつて来ると敵愾の如く捨ててかえりみないという傾向がございますよう、私などはつまりその絶好の獲物であつたわけなのでございましょう。

（中略）

しかし、それでも、その次の三番目の女房に較べると、まだよいほうだと言わなければなりませんのでございます。これはもうはじめから、私を苦力^{クワリ}のようにこき使う目的を以て私に近づいて来たのです。その頃は私も、おのずから次第にダメになり、詩を書く気力も衰え、八丁堀の露地に小さいおでんやの屋台を出し、野良犬みたいにそこに寝泊りしていたのですが、……（母娘二人組の焼芋屋とねんどろになる——この部分略）……二つの屋台をくっつけて謂はばまあ店舗の拡張ということになり、私は大工さんの仕事やら、店の品の仕入れやら、毎日へとへとになるまで働き、婆と娘は客の相手で、いやな用事はみんな私に押しつけ、売上げの金は婆と娘が握つてはなさず、だんだん私を露骨に下男あつかいに出来まして、夜に木賃宿で私が娘に近づくとうすると婆と娘は、しっ、しっ、とまるで猫でも追うようなイヤな叱り方

をして私を遠ざけてしまいます。……新富町の表通りに小さい家を借りまして、おでん、小料理と書いた提灯を出し、そうしてもう、その家に引越してから、私は完全に下男の身分になりました、婆のことを奥さんと呼び、わが女房を、おねえさん、と呼ぶ



ように言いつけられ、婆と女房は二階に寝て、私は台所に薄縁うすべりを敷いて寝ることになったのでございます。……

奇クの古い読者なら、店を使用人夫婦に乗とりられた上、その下男となった真砂氏作「二百字讃歌」(二九年五月号)の主人公を想起するだろう。(ただ彼では三者関係であるものが、ここでは夫婦関係になっているのが異なるのみ。かの主人公と同じく、この詩人も紛う様のないマゾヒストである。(そのことは、ある女流評論家から自分の詩集を嘲罵されて、かえって性欲倒錯を起し、「ナンヂニセツプンヲオクル」という電報を打った、という挿話で見事に示されている。(尙、本誌三〇年一〇月の拙文「再度の鞭を期待しつつ」参照)女は男のマゾ的性格を本能的に見抜いて、それにふさわしい取扱をするものだ、というのが一篇の主題だが、実は、それこそこの様な男の内心期待するところなのだ、と附け加えねばなるまい。

右の引用箇所続きで、男は遂に一夜閉め出され、中に入ろうとすると、二人の女からドロボウ呼ばわりされ、警官に對しても「とにかくあたしたちの家の者

ではありません」と言われる。結局、家を取られた上、追い出されてしまうのである。

然し、また、たとえ妻に仕える下男になっても、追い出されたくないという卑屈な男もいる。次の丹羽文雄「藤代大佐」は、入婿の弱味で、終戦後、妻から離婚を迫られ、子供にも背かれるが、必死にしがみつくと老大佐を描いている（附記第一）。

……ただ、この家にのこりたい、追いだされたくない、そのためにはどのようなつらい境遇もがまんをするという卑劣きわまる、意気地のなさだけが、正味のおのれではなかったかと気がついた。妻をひとにゆずってまで、この家にのこりたいとねがう。じぶんが、じぶんというものの正身であった。……この上は、下男同様にあつかわれようと、それで身分相応のあつかいということになる。子供に無視されても、やむを得なかった。

……………

女中がひとり、やとわれた。京枝（今迄女中がわりだった娘）と女中と藤代が、台所で食事をするようになった。かれは、旅館稼業をたのしんでいるように、快活にふるまった。……暁（息子）とひろ子（娘）は、父親と目をあわさないようにふるまった。……人間はどのような逆境にも、自然と慣れるものであった。

……………

最後の風呂にはいるころには、湯あかのおいが濃厚にただよっていた。……このにおい以外の風呂はあたえられないのだと考えると、あきらめがついた。客の垢、朝子（妻）のあか、江田（妻の情人）の垢、子供たち、女中たちの垢のなかで、かれはじっとしていた。うぬぼれと、自尊心と、わが身可愛さのころ

をとりのぞいてしまうと、気もちはかるかった。……かれは湯をおとすのと同時に、風呂場の掃除をはじめた。正身のわが身にふさわしいものの考え方、感じ方、くらし方を、一日もはやく身につけたいとねがった。

「おじさんの部屋は、きょうから奥様の部屋のとなりにうつしたわ。奥さんのいいつけなのよ」

と、女中がいった。朝子の居間とは、壁でさかいになっていた。

……その理由は、夜になってからわかった。

江田は公然と、朝子の居間でくらすようになった。

「おじさん」

はじめ、江田がじょうだんのようによんだ。

「はい」

と応えるのにも、おどけたふうで、しかし、いつか藤代はなれた。

朝子はなにか用をいいつける場合、決して名前をよばなかった。単にいいつける口調ではなかった。小言の調子であり、「しよつ中、玄関には水をうってくれないと、こまるじゃないの」「ふとんのあげおろしには、とんでいって、お君の手伝いをしてやらなくちゃ、かあいそうじゃないの」……「お君ひとりじゃ、手がまわりかねるから、ぼやぼやしてないで、便所の掃除ぐらいはしたらいじゃないの」

夜になると、となりのふたりは、わざと藤代にきかせるためのようにこえをだした。朝子のこえはかわっていた。

（附記第二）。

こういう精神的虐待を受けながら死ぬまで奴隷的苦役に沈溺するのと、先の「男女同権」の詩人の様に追い出されてしまうのと、マゾヒストは果してどちらを選ぶであろうか。ともあれ、エプロン亭主たらんとする者は、かかる危険な状態の生じ得ることも覚悟はしておかねばならぬ——むしろ望むところというのか？ それなら結構だが……

附記第一 入婿という存在は極めてマゾ価の高いものである。

「女婿婦家狗、打殺無文書」（遊仙窟）。そのものズバリ「入り婿は妻の家の犬だ」といっている。日本でも古来、軽蔑すべきものとして扱われて来た。小糠三合といわれるとおりだ。妻にして見れば、「下になりなと入り婿を好きなこと」（末摘花）だ。

入婿ならずとも、妻の実家が富貴であるだけでも、夫の四周にはマゾの風雲がまき起る。前章附記第三であげた「亭主会議」の中にも、庭の手入に夫を寄越す様言って来ていた妻の実家の母が、彼が——受賞辞退の交渉に出掛けた為——来なかったとて、娘に電話し、「殻潰しを飼ってるんだから、せいぜい使ってやらなきや駄目……」と説教する場面があった。こういう妻の実家、妻の母という要素を巡るマゾ的葛藤は、西洋の文献では、社会制度の相違から余り見当らない——ただし、二四章附記第四参照。なおハンス・ラウの著「人類錯迷史論」の第二巻「性愛における錯迷」中には、妻の母や妹が婚家訪問の度に、妻と一緒にあって夫を縛ったり鞭ったりして折檻した例が出ている——のであるが、東洋では、豊富である。権家の婿になったばかりに庭の槐樹にぶらさげられる憂目を見た古代中国の野心家の話をいずれ詳しく「国語」

別冊奇譚クラブ

目下発売中

定価三〇〇円
(特価一五〇円)

創刊号

「告白・手記・体験」特集

四馬孝画

リクエスト画廊 16 葉

グラビヤ希望写真集

五十一葉

本文

告白手記体験集

28項目

第二集

「松井籟子作品集」特集

口絵 滝れい子画

「狐灯」画集

北原純子画

「淫火」画集

グラビヤ

須川令子被縛独演集

から紹介することとしよう。

附記第二 田村泰次郎の「女の復讐」では、終戦後、落魄した元陸軍将校が、戦時中、慰みに情婦にしていた女の経営する旅館の風呂焚きになる。転落の態様という点では丹羽の作品の先蹤であろう。なお田村はこの作品のずっと前に、「現代詩」という短篇を書いている。ここでは、同じ様な元将校が同じ様な元的情婦で、今は他人の二号になっている女の所へ保険の勧誘に来る。女は便所にまでついて来る様な狎を飼っているが、男に、百万円の契約をしてやるというエサを投げて、狎と同じに三遍廻ってワンと吠えさせる。……これは復讐関係で類想。これらいずれもマゾ的なので記憶に残っている。

私は十九才になるオフィスガールです。やや色が黒い方で、良く言えば小麦色の肌をしています。乳房やお尻は人並だとは思いますが、いわゆるグラマーという程、太っては居りません。

さて、私は、いつも晒の六尺ふんどしを締めています。六尺ふんどしは、かさばって、



ふんどし万歳

清水 ゆり子

スタイルが悪くなりはいらないかと御思いの方があるかもしれませんが、そんな心配は御無用です。結論から申しますと、体のラインの外側にハミ出るように締めれば、それだけ邪魔になるでしょうが、キリリと締め上げて、線の内側にふんどしがおさまってしまえば、問題は無いわけです。

そんなに、きつく締めては体に悪いのではないかと心配なさる方に申し上げます。私は男の方のふんどし姿を見るのが大好きですが、男の方の大部分は、殆んど、おヘソがかくれそうに、深くふんどしを穿いて居ます。極端にいいますと、ウェストを締めているわけです。これでは、まるでウェイトレスのエプロンのようなもので、日本男児の名が泣きます。こういう切腹のときに切る部分、人の体の中で最も軟かく防備の弱い箇所をきつく締めたのでは、一時間と体が保ちません。

男の方の中にも、たまには、惚れ惚れするような、すばらしい、ふんどし姿の人があります。そんな方は、ももの上端ストレスのあたり、腰骨の上から、ふんどしを締めているのです。皆さん、御自分で、いろいろな高さにふんどしを締めてごらん下さい。ちょうど『座りがよい』高さがあるのです。この位置ですと、ギョツと締めても絶対大丈夫です。ふんどしの横布と、おしりの肌の間に指一本さし込めない程締めても、跡もつかないよう出来るものです。

ああ、その気持。爪で搔くと、張り切った布はカリカリと固い音を立てます。矢でも鉄砲でも来いという気分、しかも、大和撫子の、

情深く、しとやかな心持になるのです。

びろうな話ですが、用便の心配をなさる向もお有りでしょう。私は毎朝一回、便所へ行き、真冬でも、石けんを使ってお尻を洗うのです。そして、洗いたてのふんどしを締め、その日はもう大便をしません。おなかをこわすような心掛けの女は、ふんどしを締める資格が無いと思います。そんな人には、ダブダブのズロースが、ちょうどお似合いです。それに、きりりとふんどしを締めていれば、おなかの方も、それにふさわしく、しまりが良くなるから不思議です。そんなわけで、私は何年間、ふんどしにシミをつけたような事は只の一度もありません。

もう一つの方は、これも六尺ふんどしの良い所で、おへソの下の前布を左右に広く引張れば締めまり、一方に寄せれば少しゆるみますので、男女共に少しも差支えない筈です。

六尺ふんどしの締め方には、いろいろあります。弁天小僧のように前垂れを垂らす方法、海水浴場で時たま見るように、結び目を作らず、布の両端を、後のミツ所から両脇へ、たばさみ込むやり方、これらは、いずれもだらしのない締め方だと思います。万一、ゆるんだら、ほどけたりしたら大変です。

私の方法は、前布の端から十〜十五センチぐらいの所をアゴで押さえ、他の端を、股をくぐらせて後の方へ送り、腰の下辺りで左手の方にまわし、一まわりさせて、後の縦布を上からおさえる形でギュッと締め上げます。それから前布をおろし、形よく前袋を整えながら股下におくり、上から右下へと横布をくぐらせ、ミツの所の布上に待っていた一方の端と固く縛り上げるのです。横布を手際よく縦四つにたたんで置き、キチンと縛れば、みっともなくかさばることは決してありません。無論、前垂れはできません。

六尺ふんどしは、春も秋も冬もよい物ですが、夏、うす物のスカートの、すぐ下に、陽にやけたお尻がある、あの誇らしい感触、スカートの布目から入る風は、さわやかに、肌をくすぐります。夏時分、タイトスカートの後姿に、V字型にパンティの型が浮彫になっている婦人をよく見受けますが、スカートの上にパンティを穿いて歩くのと変らない、みっともない姿だと思います。ふんどしなら、あんな事は決してありません。

万一、痴漢が現れたとしたら、どうでしょう。ズロースやパンティ等、ひとたまりもありません。六尺ふんどしなら、布を掴んで逆

に吊り下げられても脱げないでしょう。乱暴にすればする程、結び目は締まるばかりです。気絶した後でなければ、ミツの結び目を解きほぐす事は出来ません。

仕事の間じゅう、きつく、ふんどしを締めている私は、夜はお尻を解放します。私は、パジャマやネグリジエのようなものは好みません。夏でも冬でも、素肌の上に木綿の浴衣を着て、ふとんに入ります。

私は、政党としては共産党を支持しています。思想は決して保守反動ではないつもりです。しかし、日本人の良い伝統は、命にかけても守りたいと思います。ふんどしは、私たちの祖先の残した、すばらしい遺産ではないでしょうか。こんな合理的な衣裳を、私は他に知りません。

それにしても、今日の日本の大部分の男の人は、何とブザマでダラシない事でしょう。いなせな、あんなちゃんや、強そうな剣道の選手が、色物のパンツを穿いて汗を拭いている姿は艶消しです。黒い水泳ふんどしを無感動にダラリと締めた上に水泳パンツを穿いて泳ぐ男の気が知れません。デモ隊の先頭に立つ闘士が、メリヤスのブリーフを穿いているのかと想像すると、何か不潔にさえ見えて来ま

す。

どんなにお金があっても、首から上の男っぷりが良くても、すばらしい頭の持主でも、レスラーのように逞しくても、オムツのような越中褌の男や、無神経にパンツやブリーフで腰を包むような男とは、決して結婚しないし、尊敬もしないつもりです。

知識や生活の技術は、学校で教えてくれますが、お尻のまわりのセンスは、どこでも教えません。本人がハッと覚る他ないので。

私が目覚めたのは、舢倉島の海女の話聞いた時です。私のような若い女が、ふんどし一本で海にもぐる。その話に、私は、いつか真赤になり、胸は早鐘を打ちました。それ以来ふんどしの記事、ふんどしの絵や写真に胸をときめかせ、人知れず、いろいろなふんどしを作っては、試しました。浅草の藤掛という店で、ストリップパーのバタフライを買った事もあります。男の水泳ふんどしも各種のを買いました。そのあげく、晒の六尺ふんどしという、平凡で、しかも世界一スバラしい衣裳を再発見したのです。

南方やアフリカの原住民の中には、女でもふんどしを締めている種族が少くないようです。南アメリカのインディオの中には、女だ

けが六尺ふんどしのような物を締める種族もあるそうです。インディオは、私たちと同じアジア人種です。日本でも、海女がふんどしを締める例があり、お産の時のT字帯なども女のふんどしの名残りではないでしょうか。

黒人のジャズが、いつの間にか文明国の男女を湧かせるようになったと同じに、今に、ふんどしが世界中に拡がらないとは言いい切れません。ブリジット・バルドオや、ミレーヌ・ドモンジョが世界中の人気者になったのは、よもや演技がうまかったせいではないでしょう。顔立ちや体格のせいでもなく、漠然と裸になった為でもなく、勇敢でキリリとしたビキニスタイルが、人々の或る感覚にピンとひびいた為とは考えられないでしょうか。

パリジャンヌも、イギリスの女王も、北京の女史も、日本のトップレベルの淑女達も、スカートの下に、ピッチリとふんどしを締めるようになり、海岸には小麦色のお尻をT字形に区切る色とりどりの若い女のふんどし姿が見られ、なつかしい男のふんどし姿が復活し、水泳パンツや海水着はチンドン屋しか使わないような日が来ないでしょうか。

それ迄の間は、私たちの方が少数派です。しかし、正しく美しく、合理的で、最もセク

シーな、ふんどしの最後の勝利を信じて、同志をふやして行こうではありませんか。人前で、ふんどしの常用者と見られる事を恥じるような卑怯者は、去らば去れです。ふんどしを、責めの小道具、浣腸の附属品、おしめの変形のように考える、ジメジメした風潮とも断固、闘いましょう。

健康で、力強く美しい、ふんどしの歌を、どなたか作詞、作曲して頂けませんか。その歌の芸術的な響きで、腰骨の中に眠っていた凛々しさが、ふんどしに対する民族のあこがれが呼び覚まされるようなものを。

日本のうたごえ祭典で、若いピチピチした男女が、浴衣の裾をはしよって、美しい混声合唱を、高らかに響かせようではありませんか。電車の中から家庭から、工場から、ふんどしの歌が流れ出し、早乙女たちも、ふんどしを締めたお尻を天に向けて、ふんどしの歌に合わせて苗をさします。野暮ったいオバサン達のしかめっ面を文字通り尻目に、ふんどし礼讃の歌をあげましょう。あの、胸もうずくような、『ふんどし』という言葉が世界の共通語になる日を目指して。

ふんどし万歳！

(おわり)

当代女武勇列伝

諸岡堅雄
滝　　子・画

今回は北小路（旧姓古田）敏子夫人（仮名）に登場を願うことにする。藤原義江氏の「流転」に菊子という女性が出てくるが、筆者にはこの菊子がどうも敏子のような気がしてならない。音楽会の会場に堂々と乗馬服で乗込むあたり、敏子そっくりだからである。

「そういった菊子は乗馬服のままであった。菊子は乗馬が得意で、よく婦人雑誌の口絵などに写真が出る、関西で有名な実業家の娘であった……菊子は乗馬だ、ドライヴだと、当時の言葉でいうとモダン・ガールだった。いうことが少々キザではあったが、ピチピチした十七娘だった。学校も東京で、私は帝国ホ

テルのお茶の会で彼女に紹介されたときから興味をもった。……ある夜ベルギー大使館でパーティがあり、そこへ彼女も私も呼ばれた。「はやくプロポーズして頂戴」音楽が大きく強くなったとき、彼女はこう私にささやいた……それから後は、坂道を転がる二つの小石みたいだった」（三十五年六月「中央公論」）

しかし古田敏子が藤原義江と浮き名を流したのは、彼女がF女学院の英文科を卒業して大阪南郊の帝塚山の実家に帰り、そして「浜寺の女王」として阪神の社交界に君臨していた当時であるから、年令も満で数えて二十一才になっていたはずである。その後、間もな

く彼女は北小路子爵家へ興入れしている。だから藤原氏のいう菊子と本篇のヒロイン敏子とは同一人物ではないかも知れないが、敏子の武勇伝を知りたい本誌の読者にとっては、そういうことはどうでもよいことかもしれない。

浜寺の女王といえ、年配の読者は「ああ、あの令嬢か」とすぐにも思い出されるにちがいない。浜寺の一つ先きの羽衣に古田家の別荘があり、彼女は毎日のように派手な乗馬服に身をかためて、松林の間を縫って馬を駆つ

た。夏には水着一枚で馬に跨り、乗馬のまま海中へ乗り入れた。水練馬術に長けていたのである。

彼女の馬術について書くだけでも、連載物になるほど材料がたっぷりあるが、武勇伝とは関係がないのでここでは省く。が、ただ一つ、書いておかねばならないことは、おそろしく気位が高く、傲慢で、勝気で、命令的で、人使いの荒い彼女であったが、馬にはひどく優しい女王であった。競技に出場するときのほかは、鞭ももたず、拍車もつけなかった。彼女にとって召使いたちは古田家の財産、いわば生命のない私物にすぎなかったが、愛馬は生き物であり、忠実な家来というよりも、従順な恋人でさえあったようだ。

古田家は一家挙げての乗馬狂だったので、持ち馬だけでも数頭いたが、手入れが大変なので、みんな厩舎に預けていた。しかし彼女だけは愛馬「多助」を手許に置き、防水服をきてホースで馬の軀を洗うことまでやった。多助とは人間みたいな名前であるが、別に深い意味はなく、彼女にいわせれば「塩原多助の多助。多助という男は馬を可愛がったから、そいつを馬の名前にしただけよ」というにすぎなかった。

読者諸兄姉は女王の騎乗する愛馬のことだから、多助は定めしサラブレットの血統馬と想像されるだろうが、多助はどこにもいる混血馬で、しかも年寄った老いばれ馬だった。

しかしいったん敏子を背に乗せると、多助は勇氣凛々と胸を張り、威風堂々と闊歩し、サラブレットの駿馬をさえ威圧する風情を示すのだ。それは鞭や拍車の責めのない安心からか、それとも美貌の女王に跨ってもらった誇りからか。「あたしが乗るとどんな駄馬でも勇氣づくのよ。それは不思議なくらい」——彼女はよくそういった。「馬を御すのは重心の移動と手綱さばき一つよ。馬は人間とちがって物がいえないので、いじめるのは可哀相。人間ならその点、容赦しなくてもいいけれどね……」

そのためか、彼女の馬上姿は優雅であった。ぴったりとした乗馬服がきれいな身体の線をそのままに現わした。馬が動くたびに豊かな臀部が上下、左右に躍動し、匂うばかりの色気を発散した。二科の海老原喜之助画伯が好んで彼女の乗馬姿を描いたのも、とうぜんだった。かれの傑作「裸婦の乗馬」は、敏子がモデルだったとあとになって聞いた。

二

ぼくが彼女を知ったのは、北小路子爵夫人となつてからのことだ。日華事変がどろ沼の様相を呈していたころ、ぼくはA社の従軍記者として現地に派遣され、二度目の従軍から帰ってきて銀座裏のバー・ルミでいっぱいやっていた。そのときである。

こっちは相当酔いがまわっていたが、毛皮のジャンパーに毛皮のズボン、そしてこれも毛皮の防寒帽に半長靴、しかも弾帯を腰に巻いた狩猟姿の色白な美貌の女性がツカツカと入って来て、一番奥の席にどっかと腰掛け、「マダム、ブランデーよ」と注文したのを見て、酔いがさめるほど、おどろいてしまった。

そこで思わず、そばにいた女給A子に「凄いのが来たじゃないか」といった。

「あの方？ マダムのF女学院時代のお友達……というより北小路子爵夫人といった方が通りがいいかな」

「へえ。あれが北小路の細君か」

北小路といえば数々のスキャンダルで有名なドンファンだったし、その妻も夫に劣らず社交界で醜聞を流していたので、はじめて聞く名前ではなかった。

「それにしても若いじゃないか」と、ぼくは、
A子に問いかけた。年はもうとっくに三十を
過ぎていたはずだが、二十四、五才にしか見

えなかったからだ。

「あたりまえじゃないの。毎日おいしいもの
食べて、乗馬だ、ドライブだ、ハンティング



(狩猟)だと遊びまわり、疲れればお雇いの
指圧師に身体を揉ませ、牛乳風呂に入ってい
ば年なんかとらないわよ」

「しかし、あんなきれいな細君をもちながら
北小路って男はなんでまた女狂いなんかする
んだろう？」

「あんな人を奥さんにもったら、北小路さん
に限らず、だれだって恋人つくりたくなるわ」
「どうしてなんだ？」

「あの人、小生意気で人を人とも思わないの
よ。それにさ。お酒飲むと暴れるし、しかも
腕っ節がとっても強い。大抵の男はノサレ
ちゃうわ。北小路さんなんか、しょっちゅう
殴られてるんですって。いやになるわよ。男
としたら……ええ？なに？ 紹介？ 紹介す
んのはわけないけど、興味なんかもつんじゃ
ないわよ。馬にされるのがオチだから……」
紹介されてみて、なるほどんでもない高
慢な女だとおもった。

「なあに？ 新聞記者？ あたしからネタで
もとろうっていうの」

「冗談じゃない。ぼくは政治部記者ですよ」
こっちも記者になりたてのはやはやだから
気負っていたし、若くもあった。名刺一枚で
首相とでも、財界の巨頭とでも自由に会える

職業なのだから、たかが華族の端くれの有閑マダムなど実は眼中になかった。紹介されて口がききたかったのは、彼女が狩猟や乗馬にどんな快味を味わっているかを知りたかったためだ。ぼくの体内にあるマゾ的性癖がそういう欲求をよび起したのだが、彼女のあくまで高飛車に出てくる高慢ちきな態度には我慢がならず、徹底的に反撃した。

「そうお。従軍もしたの。シナは広いでしょうね。あたしも、あの広い大平原を思うさま馬を走らせてみたいわ」

「ばかなこと言うもんじゃない。日本はいま戦争してるんだ。有閑マダムは、とうぶん隅にひっこんでるべきだよ」

たがいに酔ってもいたので、議論が口喧嘩になっていった。見るに見かねてマダムが

「もう二人とも止したらどう？ 議論じゃ、クリちゃんいくらいったってだめ。相手はジャーナリストよ」

眼がくりくりと西洋人形みたいな顔をしていたので、敏子は女学校時代にみんなからクリちゃんと愛称されていた。

「ジャーナリストがどうなのよ」

「ジャーナリストは勉強してるわ。クリちゃんなんか遊んでばかり。だから議論したっ

て勝てるはずがないわ」

「じゃ決闘で片をつけたら？ 諸岡さんっていったわね。どう、あたしと決闘しない？」

女が男に決闘の申し込みをする。考えられることではない。だからこっちは冗談半分に「うん。奥さんと決闘するならね。そのスタイルだと、さしずめ武器はピストルか」といつてしまった。

「ピストルOK。命が惜しければボクシングでも、フェンシングでもいいわ」

「そんな毛唐じみた真似、おれはきらいだ」

「じゃあ、日本古来の武道にしましょうか。柔道？ 剣道？ それとも薙刀？ 弓でもいいことよ」

女の口からこんな言葉を耳にしたのは、はじめてだった。暴ばれ娘のK子も、絶対不敗の自信をもっていたE子嬢も、こんな偉らそうな口をきいたことは一度もない。だから、ぼくは呆れ返った顔をして相手を見返すだけだった。するとマダムは「ふふふ」と笑い「こんどはクリちゃんの勝ち。諸岡さんの戦意、完全に喪失、目下潰走中なり。さあ、これで一対一。仲良くし乾盃をしましょうよ。今夜はあたしがおごるわ」

こんなことから北小路子爵夫人と知り合い

になったのだから妙なものだ。

三

もちろん、彼女は武芸百般に通じていたわけではない。しかしスポーツをやっても、武道をやっても、幼いころからすこぶるカンがよかったし、十一人兄弟のうち、女は彼女と二人の妹だけだったので、子供の頃からチャンバラや取っ組み合いの遊びが好きだった。

小学校は良家の子女に特殊な教育をするので有名だったT学院だったが、そこでも腕力が強いので男の子が逃げ出すほどだったし、家へ帰ると近所の腕白小僧たちを集めて「降参ごっこ」という遊びで、つねに無敵を誇った。降参ごっこは紅白二組に分れて、組み打ちし、相手が「参った」というまで抑えつける。「参った」といったものは、「死んだもの」として列外に去り、最後は双方の大将同士が決戦になる。決戦に残るのは紅組ではいつも敏子、白組では下駄屋のマサやん、会社員の子の大塚クンだったが、二人とも敏子にはどうしても敵わなかった。

終戦後、筆者は偶然の機会から阿倍野橋附近の飲み屋でマサやんと知り合い、当時の模様をつぶさにきいて大変おもしろかったの

で、ここでもマサやんの言葉をかりて情勢報告に代えようとおもう。

「わてもガキ大将で腕自慢やったから、女子おなこには負けまへん。けど、あんまり手荒いことして、お前もう遊んだらへん」と言われるのが恐わおました。下駄屋の俵が大きな屋敷へ出入りするだけでも光栄な上に、きれいなお嬢さんのお相手し、おやつには西洋菓子みたいな結構なもん食べられましたしな」

「それでワザと負けてやったの？」

「さいです。ところが、おかしいやおまへんか。しまいには負け犬みたいにしても勝てまへんのや。こうパツと組み付いても、いっこうに力が出まへんね」

「相手にのまれちゃったんですね」

「そうだな。パツと組み付くと、プンと牛乳の匂がしよる。こらあ育ちが違うと思うと、もうあきまへん。こっちはあんた下駄屋の俵、漬け物か干物で茶漬け食うてんのに、あの人はバターやチーズや牛乳や、血のしたたるビフテキばかり食べてるせいだな。身体から発散する匂がちがう。その匂かぐと、こっちは急に力が出んようになりまんね」

「なるほど。そうかも知れないね」

「それに書生たちがあの人に柔道の手え教え

てよりましてん。せやから、だんだんこっちが勝てんようになった。投げつけられる、押え込まれる、散々でしたわ」

「負けると家来にされたの？」

「いろいろありましたな。負けるのは何時も白組やからメンバーは入れ替えたけど、負け白組が四つ這いになり、勝った紅組を乗せて競争しまんね。一等賞はキャラメルやらミカンやらリンゴやら」

「たいていだれが一等になったの？」

「そらあ、身体が一番大きいわてか、大塚クンに乗ったもんにきまつりました。」

「それであの人が乗って？」

「あの方はできるだけ可愛い顔した子供を馬にしりましたが、ほんまの馬にでも跨ったつもりで足で締めたり、尻をぐんぐん動かしてよるので、馬の方が途中で参ってしもて、いつもビリカスや」

「あの方は子供のときから乗馬していたそうだね」

「そうだね。学校いくときも馬に乗って、わてらを見下しとりましたわ。それで遊ぶときでも本物の馬の心算や。馬にされたもんが堪りまへん。みんなを乗り潰したあとで、マサやん。こんどはお前が馬や。うち（あた

し）乗せて一等とんのよ”ちゅわけで、口到手拭いくわえさせて、その恰好いうたら……」

「ただのお転婆じゃなかったらしいね」

「そうだ。喧嘩かて強よおました」

「じゃあ。マサやんはあの人盗賊をひつとらえたこと知ってる？」

「その話、あとで聞きました。わて学校出たらすぐ天満へ奉公にいったさかい……」

四

「お嬢さん。大変です。いま賊が……」

女中の千代が、あたふたと駆け込んできてこれだけをいうのが、やっとだった。

「賊がどうしたっていうの？」敏子は落着いたものだった。冬季休暇で東京から帰っていたが、その日は一家中が留守で、女中と二人の書生が残っていただけだった。そこへ空巢が忍びこんできたのだ。しかしそこを千代に見え、いま書生が賊の跡を追いかけているというのだ。

聞き終ると彼女は、すつくと起ち上り、隣室から弟の木刀を取り出した。

「千代！お前もついておいで！」

いふなり賊の逃げたとおぼしき方向めがけ

て駆け出した。千坪もあろうかという宏大な庭だったが、間もなく二人の書生が賊を追いつめて睨み合っているのが目撃できた。

「お前たち、何してんの！ こんな虫ケラ相手に」と言いさま、つつつと賊の前に進み出した。

「お嬢さん危い！ こいつは刃物を……」と一人の書生が叫び終らぬうちに、彼女の木刀は一閃し、美事に相手の小手を打っていた。賊はポロリと刃物を落したが、相手が女とみていどみかかってきた。が彼女はそれを正面から向う見ずにも拝み打ち、脳天にしたたか一撃をくれたのである。

「うわッ」たちまちのけぞるのを、そのまま馬乗りに組み敷き、木刀をピタリと相手の咽喉に擬した。ものの数秒もかからなかった。

「いやあ、巴御前みたいや」と叫んだのは女中の千代だった。「勇しいわ。お嬢さんのその姿！」

巴御前には彼女もふき出してしまった。緊張がいっぺんに緩んだ。手にした木刀を書生の寺田に渡すと、

「千代や。巴御前だったら、こうするのよ、よく見ておおき」

といいながら、右膝で賊の左腕を抑え、左

腿で相手の右腕を逆にとり、小刀で賊の首をかく恰好をしてみせた。

「この男、どこのどいつか知らんけど、こんなきれいなお嬢さんの手にかかるなんて、男冥利やおまへんか」と千代はお世辞をいった。

賊は観念して目を閉じていた。たたき落された短刀は、五十嵐というもう一人の書生が持っており、いま一人は令嬢から手渡された木刀をさげて、暴ればおどろかかる姿勢をとっていたからだ。

「お嬢さん、東京で剣道お習いになったんですか」と寺田がきいた。

「さあ、どうだかね。習っても習わなくても、お前の棒振り剣術よりは強いわよ」

「恐れ入りました」

寺田は頭をかいた。すると先輩の五十嵐が「寺田君、こんど一つ、お嬢さんに一手、指南していただき給え」

といった。もちろん見え透いたお世辞だ。

「五十嵐、お前だって威張れないよ。柔道初段がこんな虫ケラ一匹、取り抑えられないの？ 寺田は棒振り剣術で、おまえのはバツタ柔道じゃないのかい」

五十嵐も彼女にかかれれば散々である。

「五十嵐さんも寺田さんも、これからようみ

っちりお嬢さんに稽古つけてもらいなはれ」千代はまた敏子に媚びるようにいったが、「千代！ お前よけいなおしゃべりしないで、早く警察に電話するのよ！」

鶴の一声、女中は母屋の方へ、すっとんていった。

五

南海沿線の工業化で浜寺の海もいまは昔の面影をまったくとどめていないが、敏子が女王として君臨していた当時は、羽衣から浜寺へかけての海浜は文字どおりの白砂青松で、別荘人種が色とりどりの乗馬服で松林を縫って駒を進める光景は絵のように美しかった。

別荘人種は単騎で馬を駆ることは、めったになかった。というのは付近の土着の農家の青年たちによく悪戯されたからだ。かれらは大抵イモづくりの貧しい百姓で、イモづくりのほかは磯舟を海へ漕ぎ出して小魚をとり、それを堺の町で売り歩いた。貧しいだけに別荘人種にたいする反感は相当なものだ、汲取りのときなどにもひどいイヤガラセをよくやった。柄杓（ひしゃく）を肥壺へ入れると、わざと掻きまわすのである。異臭が邸内にたち込め我慢ができなくなる。だから掃除屋が

来たとなると、家中は戦争のようにごった返し、線香をたてたり、香を焚いたりして臭気を防いだ。性質の悪いのになると食事時を狙って汲取りにやってきた。

乗馬していると石をぶついたり、棒切れで馬の尻を叩くなど普通のことであった。あの若い夫人は若者たちのため馬上から引き摺りおろされた揚句、辱しい目に遭されたこともある。

だから一人歩きは危険とされていたが、敏子は平気で、悪戯されると多助をおおてかれらを蹴散らしにかかった。だが、この日の悪口は、聞き流すにしては彼女のプライドが許さなかった。

「おい、偉らそうな顔さらして馬に乗ってても、わいらのつくったイモ毎日食うてんねやろ」と一人がいった。

「イモ食うて臭い屁たれてるくせに大きな顔さらすな」と、もう一人が罵った。

「せやせや。おまえのその大きなおいど(尻)で屁たれたらドン(号砲・当時は大阪城で正午の時報を打った)みたいやろな」

「いま屁たれてみい。馬、ドンかと思つて、びっくりしよるぜ」

この卑猥な罵声に、敏子は気が狂わんばかりに憤怒した。多助の背からとび下りると、ツカツカとかれらに近寄り、物も言わず一人の顔面にパンチを見舞い、身をひるがえしてもう一人にフックをくれた。顔面にパンチを食った若者は脳震蕩でもおこしたのか、倒れたまま起き上ることもできなかったが、腹部を強打された方は「痛い」と言いながらも組

み付いてきた。しかし彼女が寄ると見せて体を開き、膝頭で思い切り下腹を蹴り上げると、「うわッ」と叫んで仰向けに伸びてしまった。彼女は、すかさずその伸びた身体の上に跨り、相手の顔面めがけて鉄拳の雨を降らせた。終始無言であった。

「カニシテ(勘忍してくれ)！」



男の悲鳴に、敏子は打つ手をやめた。悲鳴を挙げたのも道理、男は彼女の上からの矢継早の猛攻を防ぎきれず、両眼は紫色に腫れ上がり、鼻からは血をふき出していた。顔全体は醜くゆがみ、押しひしゃがれて、二目とみられぬ形相だった。

そいつを敏子は冷かに見下していた。

「おまえたち不良だね？」

「ちがいま。不良やおまへん。警察だけはカニしておくれやす。その代りあんたのためなら、どないことでもしま。どないなことでも……」

「よし。警察だけは許してやる。これからはあたしたちに変な真似はしないか」

「へえ。もう二度としまへん。そやから……」

「ふん。あてになるもんかね」といってから、彼女はわれながらおかしくなってきた。

というのは、じぶんの腹部にガスの充満してきたのが分ったからだ。「その大きなおいどで屁たれたらドンみたいやろな」と罵ったこの虫ケラに、本物のご馳走をしてやる気になった。が、このままの姿勢ではおもしろくない。そこで腰を上げ、男の首の上に跨ると、丹田に力をこめ、思い知れとばかり、ズボン越しに息詰まるような熱風を送った。溜飲の



下がる思いだった。

「ぐッ」といううめき声がしたようだったが、彼女はそれを大きなヒップで、うんとばかり無難作に上から押し潰してしまった。

この出来事は、たちまち村中に知れた。

「東京から帰った娘で、ひとり強いやつがいるそうやないか」

「古田の娘とちがうか。あいつは、じゃじゃ

馬やさかい。言葉も江戸っ児（東京弁）や」

「屁かませるとは、えらいことしよるやつちゃ。しかも女のくせにまともにかませるちゃうのは、女やない、化けもんちがうか」

「こうなったら黙ってるわけにはいかん。見付け次第どつきまわして、小便しょうべんかけたる」

「どうせ相手は女の化けもんやさかい、カエルの面に小便やろうけど、このままでは腹の

虫がおさまらんわい」

「せや、せや。やったれ、やったれ。」

事件の全貌は別荘村にも伝えられたが、出入りの職人や御用聞きが面白半分に誇大に報告したので、聞き知った人の大半はあきれ顔に、「まあ、女だてらに大それたことを……嫁入りまえやというのに……」

相手が有力財界人の令嬢のことなので、口に出して非難はしなかったが、露骨に不愉快な表情を示した。しかし手を打って痛快がり、敏子を訪問して「実演して見せてえ」というおきんな若夫人や令嬢もいた。敏子にしてみれば、虫ケラをひねり潰したぐらいのことで、周囲のものが大騒ぎするのが、むしろ奇異でさえあった。しかし見舞い客には陽気に応待し、すぐ下の弟でK大学生の梓（あづさ）から習ったボクシングのあの手、この手を話し、暴漢退治はこれにかぎると煙にまいた。

六

このように敏子は一方では思いきった武勇伝を演じながら、他方では情事に浮名を流していたのだから恐れ入るよりほかはないが、子爵夫人となつてからの彼女は水を得た魚のごとく一層不羈奔放に振舞った。娘時代の武

勇伝は右にもみたように至極淡泊であつさりしたものだが、子爵夫人になると、そこに情事がからまつてきて、脂っこいものになってくる。そういったあと味の悪い武勇伝は、多くの趣味に合わないし、また本稿の狙いからも外れるのでいっさい割愛するが、彼女にそういう振舞いを許したのも、当時の貴族・上流社会がかつてのロマノフ王朝時代をしのばせるほど淫靡をきわめていたからだ。

庶民の風紀はつねに当局から追究されたが地位と名誉、ことに皇室の藩屏（はんぺい）という高い垣根の向う側では演じられていた幾多破廉恥な行為には、だれも文句のつけようがなかった。表沙汰になるのは刃傷、自殺、心中のときぐらいなもので、奉公人たちが淫獣の犠牲になつても、またかれらの変態行為で不具にされても、訴え出るところさえなかった。

垣根の外では、浜寺事件のように、敏子には虫ケラ一匹をひねり潰した程度の些細な事件でも、古田家が詫び証文を入れなければならぬほどの重大事件に発展したが、垣根の内側では、あの程度のことは日常茶飯事で、もしも子爵夫人に無礼を働いたとしたら、いや、そう認定されただけでも、はるかに手ひどい仕置きを受けなければならなかった。

彼女は馬に鞭をあてることを嫌ったが、人間を鞭打することには無神経であつた。

あるとき、ぼくはルミのマダムに

「あの女サディストじゃないのかい？」

ときいたことがあるが、彼女の答は否定的だった。

「そりゃね、男を鞭でひっぱたいたり、男を組み敷いて威張つてるところなんか、ちよつとしたサディストかも知れないけど、好きな人に決してそんなことしないわ。甘ったれの普通の女よ。ところが気位が高すぎるので受け身になりきれない。それでしょっちゅう不満で、生活が荒れてるわけねえ。完全な自己矛盾ね。どうしようもないわ。」

そういえば、彼女はよくに「双葉山みたいな素晴らしい男性に抱かれてみたいわ」といったことがある。「こう、どんとぶつかつていても、ぐうツと抱き締めてくれる男ね。」「ロシア公女の想い出」のヒロイン、公女バーバラはファゾツィアという無敵の力技士をさえ征服する。

「あの男、なんて凄い身体をしているんだろ。強そうだわ。あたし、あんな男好き。あたし勝負してみたいわ。どっちが勝つか。でも見ていてごらん。あたしが勝つから」と小

姓のアラスカに言い、そしてファダッイアに向い、

「おまえ、これまで、さぞ多勢の相手を倒したろうね。たった一ひねりでドシンと土に投げつけたの？ でもファダッイア。すこしばかり手ごわい相手だけど、このあたしと勝負してみない？」

そう叫んで彼女は軽く身にまとった部屋着を脱ぎすてると、すつくと立ち上った。

「おまえ、あたしの相手になれるか知ら？ 男たちを倒したように、あたしを降参させることができるか知ら？ それはとてもだめだろう？ ファダッイア。あたしの方がおまえに勝つにちがいないわ。そうよ。この女の持つてゐる力で！ おまえは、あたしの腕の中で天国のような幸福を味わうにちがいない。このあたしの胸でおまえを受けとめて、身動きできないようにしてやるわ。ファダッイア」

高貴の美女にいどみかかられて、無双の力士ファダッイアも、やすやすとバーバラ姫の餌食にされてしまう。彼女の美しく神々しいばかりの裸身に目がくらんで、怪力を発揮する余地がなかったのだ。

これはロシアのロマノフ王朝時代の実録だが、日本の貴族、上流社会でもこれをよく似

たようなことが行われた。敏子は、じぶんの裸身にも絶対の自信をもっていた。事実、彼女に蛇のようにからまれて、餌食にならずにすんだ男は、ほとんどいない。

彼女を取り巻く男性は、みんな貴公子風の華奢な連中ばかりだっただけに、色黒々と胸板の厚い、大木のような腕をした強そうな男性にたいする敏子の憧憬は大へんなものであった。

が、子爵夫人という身分が、かれらとの接近を妨げた。しかしそれでも、いろいろの伝手を介して、彼女の邸に出入りした拳闘家や大学相撲の選手など数人にとどまらなかった。

男らしい男の腕の中に抱かれるのが彼女の夢であったが、リングの上で、あるいは土俵の上で王者の貫禄を示したかれらも、ひとたび彼女の面前に出ると、みんな羊のようにおとなしくなり、ひたすら彼女の愛を求める奴隷になり下がってしまうのだ。

「ねえ。リングであいつを倒したように、あたしにも思い切りアッパーカット食らわしてみない？ あたし気を失うかも知れないわ。そうしたらあんだ、あたしを介抱するのよ。それからさきは、好きなようにすればいい」

しかし彼女をマットの上に這わしたものはだれもいなかった。「子爵夫人にご無礼があつてはならぬ」と言いふくめられてきたということもあったが、美しい彼女を思い切り打つなどは、当時の身分意識が許さなかったのかも知れない。

「ええッ。じれったいわね」
そうになると、彼女の方が積極的に打ち込んでいく。

「よし！ こうなりゃ、あたしがおまえを這わしてやる！」

逃げ回わる拳闘家に呼吸の乱れはなかったが、追いかける敏子の方に息切れが目立った。

彼としては夫人を散々疲れさせ、頃合いをみて腕の中へ抱き込めば、子爵邸へ伺候した目的は達せられたわけだ。

敗戦と同時に、貴族社会は音をたてて崩壊した。彼女の宏大な屋敷は戦禍からはまぬがれたが、米軍に接收された。のち返還されたが、彼女は再びそこには帰って来なかった。



責めと穴の魅力

川崎 進一

穴——私は穴に強い魅力を感じる。幼い日、砂場があれば私達は先ず穴を堀る。何も出てこなくても、その未知の暗い底に何か隠されているような漠然とした憧れ、そうした経験は誰にでもあると思う。

長じて、競輪・競馬の大穴、穴場に手を入れる時のスリル、パチンコの穴。事業に穴をあけ、家計の穴埋めにとび回ったり、穴があったら入りたい気持等は別として、私はこれから女体責の穴について考えてみたい。

私は穴を責める事が好きである。美しい女性のもつ穴、あまりむごたらしい事は

別として、適度な苦痛と羞恥は、その女性を更に美しいものとする。

先ず耳。ピンク色をした可愛い耳たぶ。おくれ毛がそっとかかった小さな耳はあまり立っていても、また寝ていてもいけない。その耳たぶをグッとつかんで引っ張る時、女性があげる「痛い！」という小さな叫び声にわくわくとしたものを感じるのは、私だけではない。あるまい。上に引張るもよし、耳たぶに紙ばさみをつけて、それに重しをつけるのもよし、ただ耳の穴は、そっと耳垢をとってやる時の女性の眼を細めた喜びに満足して、責の対象とはしないこととする。外耳炎、中耳炎の原因となることは、絶対に避けねばならぬ

が故である。

次に目。目は穴であるかどうかは疑問である。しかし敢えて穴とみるならば、物を云う目、うるおいのある目、目こそは女性をひき立てる最も重要な要素である。その目に小さな責を与えてみたらどうだろう。クリップでまばたきできぬように、上瞼を固定し、ごく少量の胡椒や塩を落してみたら——勿論あとで眼薬か水で充分、洗ってやろう。

顔の中央に、小憎いばかりにつんとすました鼻、鼻責めは既に愛好者各位が様々な責を与えて来た。猿轡と共にグッとつまみ上げれば、あの苦しい窒息責めに彼女の顔

は苦痛にみるみる真赤になるだろう。鼻のてっぺんを天井にむけて思いきり押しつぶすのもよい。左右の鼻腔に針金を引掛けて左右に押し開くのも一興であるし、こよりで右左、右左と擦ってもみたい。クシャミができる度、一つ二つと声を掛けながら、二十回もクシャミをさせたならば、如何に高慢な鼻を誇る彼女も哀願を余儀なくされるだろう。鼻腔の壁に穴をあけて金属環を通すことは空想の世界だけの事にして、彼女の鼻くそをほじってやる事も、女性にたまらない羞恥を与えるものであることを附記したい。

口といえは猿轡にとどめをさす。香水をふった絹のハンカチーフから、タオル、襟巻、さてはパンティ、褌から、すえた靴下、雑布迄、材料には事欠かない嗜虐の種々相。金属による箱口具、或はひきつるような皮具等々、古今洋の東西を問わず責にはまず猿轡を欠かす事はできない。救いを求める叫び声を消すためにも、悦虐の叫びを隣室にももらさないためにも、そしてどんな女性の顔をも猿轡は不思議にそれを引き立たせる。それは女性緊縛のアクセサリとして

最も重要なものと云わねばならぬと思う。

その外、唇に小指をかけて左右に思い切り引っ張るとか、上顎と下顎の間に箸を入れて長時間、口をあけたまゝにさせるとか、舌をペロチではさんで引っ張り出すとか、喉の奥にリゴール液を、たっぷりぬりつける。或は喉の奥を刺激して吐瀉させるとか数えあげれば口に対する責も少くないのに驚くのである。

次に挙げる臍は純粋には穴とは云い難いであろう。或は浅く、或は陰影を落して深く、等しく性格が十人十色の如く臍も腹の中央にありながら、千差万別な姿を呈している。臍の形でその人の性格が分るとか、臍こそ健康のシンボルだとか識者はいふ。何れにせよ、胎内にある時、それが生命源であっただけにそこに集る神経が実に微妙であることは言をまたない。私は妻に実験してみたのであるが擦りの対象として、腋、横腹、足の裏等に比して臍は決して勝るとも劣らない効果をもつものである。擦り以外にも、腹の中央であるだけにセロテープか何かで止めないとむずかしいのではあるが、太目のローソクを臍の穴に立ててみるのも面白いであろうし、鼻くそほりと同様に臍のゴマを取ってやるのも、女性に限

りない羞恥を与えるもののようである。

さて最後に、穴責はアーンヌスをもっととどめをさす。穴に関して最も愛好者も多く私もその一員であることを先ず告白する。

幼い日から度々浣腸という形で、羞恥と苦痛に彩られたアーンヌス責——勿論、母親は或は医者は、看護婦は、それを責とは思わなかったに違いないが、浣腸される身になつてみれば責以外の何ものでもなかったのではないだろうか。何度か浣腸される中自ら浣腸愛好者となると同時に、人にも浣腸してみたい、あの羞恥と苦痛にもだえさせてみたいと思うのも人情であろう。

——グリセリン液を一ぱいに吸ったガラスの浣腸器の嘴管が、ワセリンに鈍く光っているのを見た刹那、誰しも異様な興奮にかられるのではないだろうか。

間接的にはおむつ、おしめカバーによる強制排泄が、どんなに若い女性に羞恥を与えるかは今更、言をまたないであろう。

今考察し来った穴責は、勿論、緊縛あつての事であつて、一応身体を自由を奪った上で、生理的障害を与えない程度にその醍醐味を満喫したいものである。

連載小説

宇宙のどこかで

Ⅱ／＼無期懲役囚の手記よりⅡ

佐 治 麻 造

女囚ジーナの話 (8)

奴隷の身になってから半年も経った頃、ジーナに幸運が恵みましました。或る雨の降る夜のこと、客も余り現われず退屈した女達はサロンの床に紙屑を撒き散らしてジーナ達女奴隷に口で拾い集めさせたり、又ピーナッツを放り上げて口で受け止めさせて食べさせたり等して興じて居りました。

そこへ現われた、裕福そうな好青年。初めての客です。女達の眼が光り、ジーナ達奴隷は最初から諦めます。しかし、青年はジーナを買いました。マダムは、しこたま高くばった様で、満面愛想笑い

を浮べ御世辞たらたら、自ら部屋に案内致しました。ジーナは嬉しさの半面、女達の仕返しを恐れ乍ら積極的に奉仕しました。

ジーナの身の上話を聞いた青年は、ジーナがとても気に入ったらしく、飲物を取寄せて与えて呉れたり、タバコを吸わせて呉れたりして、やさしくしてくれました。

「ね、お願い！又、来て下さるわね」

「ウ、フ、フ、フ、僕はね、お前を買取るつもりだよ。マダムに早速、交渉してみよう。」

余りの幸福にジーナは本当とは思えません。

「あっ、もう出るの？じゃ、お願い！この……手錠、嵌めて……」

「いいじゃないか。こんなもの……」

「けど、私が困るんですの。ね、私は女奴隷の身なんですもの。御遠慮はいりませんわ。びしびし扱って下さいまし……」

「……じゃ……これでいいかい？」

「ええ、ありがとうございます……」

青年は直ちにマダムを擱えて談判に及び、足下を見るマダムのたまげる程の額で話をつけてしまった様です。気配を知った女達の羨望とねたみの視線を受け乍ら、ジーナは自分の肉体に心から感謝しました。

翌朝、早速、迎えに来た青年の自動車にマダムと一緒に乗り、奴隷登記所へ行きます。書類の手續処理が済み、ジーナは古いパンツ一枚の姿でマダムに尻をポンと叩かれて引渡されました。

「じゃ、ジーナ、手をお出し」

新しく所有者となった青年の手で手錠と足錠が嵌められます。

「嫌だろうけど、しきたりだからね……」

「……まあ、御主人様。奴隷ですもの当り前のことでございますわ」

青年の邸宅は郊外の高級住宅地にあります。青年は当然乍ら未だ独身で、父親の経営する大きな貿易商社に勤め、将来は当然、社長です。邸宅には父親と妹との三人暮らし。勿論、他に数名の召使いが居ります。母堂は夙に亡くなって居りました。

庭先に正坐させられ、暫くすると青年と共に父親が出てきました。銀髪の好紳士です。

「ウン、中々いい女だね。少し高かったけど、これならまあ値打があるよ。えーと……ジーナとか云ったな？お前の御主人はこのエミールだよ。いずれこれも結婚しなきゃならんが、それ迄のお相手

だ。女奴隷をおもちにするのが一番無難だからな。エミールもわしの言う事に従って呉れた訳だ。云々とくが、分不相応な振舞や、考えをしちゃならんぞ。そんな気配があつたら即刻、監獄へ帰す。わしはその積りになれば、終身刑にでもして仕舞うぞ。分つたな！」

「……ハイ……それはもう……よく分つて居ります。一生懸命に……勤めますから……御慈悲を……」

「ウン、よしよし。其の代りに、神妙にすればな、これに用がなくなつても、世間一般の奴隷より、うんと楽に暮させてやるし、刑期が済めば、あとの事も充分に考えてやるからな」

「ハイ、ありがとうございます」

「それから、云う迄もないが、家の中でお前が最も下なんだぞ。娘が可愛がつてる犬の方がお前より高価なんだからな。ハ、ハ、ハ、ハ……。エミールが居る時は彼の勝手な様にするだろうが居ない時は女中の指図に従え。女中は二人居るが……そうだな、若い方のマリに一応扱わせるか。おい、エミール！余り甘やかせちゃ駄目だぞフ、フ、フ、フ、……、戒具やなんかどうするんだ？」

「ええ、……詭える積りですよ。今日、寸法やなんか取りに来る筈です」

「フン。まあ、どんなのを作る積りか知らんが、別に世間一般で使つてる様な分も一通り買つとけよ。おい、ナンシー、マリ、ちよつと来いよ。それからエリザや。犬も可愛いからうがお前もおいで」

御嬢さんを始め三人の若い婦人にひき合わされ、絶対の服従を誓わせられました。

「それからな、戒具の鍵は充分、保管に注意する様に。万一のことでもあれば恥さらしだからな。じゃマリ、よく坊ちゃんと打合せ

しとけよ」

やがて父親とエミールは出勤した様子です。手錠足錠のまま、じっと地べたに正坐して居ますと、年増のおかみさん風の婦人がやって来てジロジロ眺めました。

「お前さんだね、若旦那様の御気に召した奴隷てのは。うちの人も云ってたけど成程いい女だねえ。私はね、御当家の運転手の家内よ。けど、凄く幸運をひき当てたものね。せいぜい可愛がって貰うといいわ。何て名？」

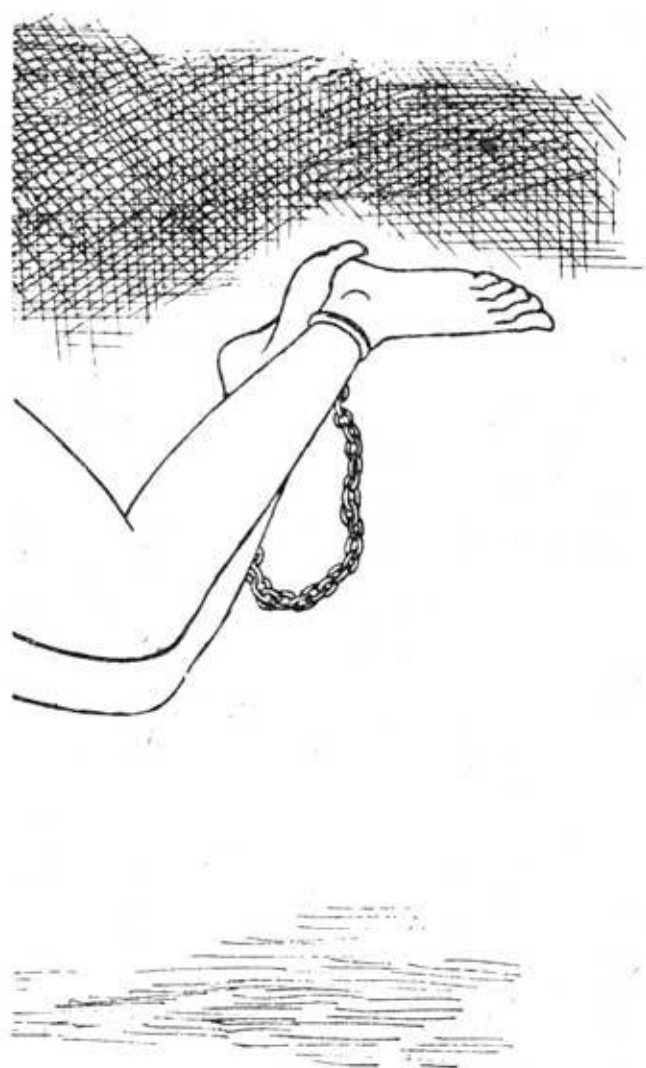
「……ジーナと申します。女奴隷ジーナでございます。何卒、御慈悲の程をお願い申し上げます」

「フン、刑期はあとの位あるの？」

「ハイ、確か……四年半位……」

女中のマリーがやって来ました。

「お立ち！」



鎖を鳴らして痺れた脚に顔をしかめ乍ら、よろよろと立ち上ります。

「何よ、そのツラは！ つけ上ると承知しないわよ」
両頬に激しく平手打を加えられました。

「私にも少し撲らせてよ」

二人から顔もはれるばかりに、心ゆく迄ビンタをもらいます。会ったばかりの同年配の婦人に、口答え一つ許されず撲られ放題を甘受せねばならない口惜しさに全身が熱くなりました。手錠を外して貰い、物置の隅を片付け、古いワラ蒲団を伸べ、便器を置きます。
「若旦那様の御寝間にくっつけて、檻を置いてやるからね。それ迄ここに寝るのよ」

やがて若い男がやって来て、ジーナの体中の寸法等を測って帰りました。

「若旦那様はどうなさるか知らないけどね。私が扱う限りは食事には手を使わせないよ。そら！ 手を後へ回して！」

あてがわれた残り物を床に這いつくばって口でじかに喰べさせられ、そしてまごまごしては罵られ小突かれてこき使われ、一日が暮れました。

女囚ジーナの話 (9)

それから四日間には若旦那、即ち主人はジーナに一指も触れられず一日中、意地悪い女中達に追いまわされて過ごしました。其の間、医師の検診を受け又職人達が入り出して何か造作して居ましたが、五日目には鉄の檻が運び込まれ、又註文の戒具も届きました。夕食後、初めて主人の寝室に入ること許され、足許にひれ伏します。



「辛かったかい？大分、苛められたらしいな。ナンシーもマリーもいい娘なんだが、まあ面白半分にかかったんだろ。これから我慢するんだね」

「……ハ、ハイ……」

「そら、あそこの壁をくり抜いて檻を据えたんだ。これから大抵あの中で暮す様になるよ。それから、こんな戒具を作らせたんだが……」

……。嵌めてみようか」

ジーナはいそいそと身をすり寄せて、主人の手で嵌められる戒具を受けました。首環、手錠、足錠、いずれも軽合金製、彫刻模様入りの凝ったもので、内側には全部柔らかな合成樹脂の布を張ってあります。首環には所有者名と登録奴隷番号が浮彫りになって居ります。いずれも鍵孔の他に小さな精巧なダイヤに文字盤の錠前付です。手錠と足錠の鎖も軽合金で環から着脱自在式になって居り、いろいろな長さのものがありません。腰枷兼用の赤い革の褌やパンツ様のものもあります。軽合金と樹脂で出来た軽い精巧な鼻環、しゃれた鼻鎖もあります。首や、手、足に当る環の柔い感触に、心ずかいの程を感じて嬉しくて鳴咽してしまいました。

「それからね、普通の戒具も一通り揃えたよ。嵌口具も鞭も……。そんなものは余り使わせない様にしておくれ。それから……。外出する時は服を着せてやるからな。これだけど、ちよっと着てごらん」粗末な出来合の服ですが何年振りかで着ける衣類！そして靴迄も。ジーナはガバと主人の前に身を投げ出し、スリッパに口ずけて涙を流しました。

「そんなに嬉しいかい。よしよし。さ、お風呂へお入り。檻の横手の扉を開けてごらん。急ごしらえだけど化粧台も化粧品も一応揃えといったから。云々とくけど、あそこの扉は僕のバスだからね。使っちゃいけないぜ」

其の夜は、それこそ全力をつくして献身的な奉仕を捧げ、主人も充分、満足した様でした。体中を拭いてマッサージします。

「じゃ、ジーナ、檻へお入り。首環と手錠と足錠を自分で嵌めて……」

ジーナは少し悲しくなりましたが、分際が分際ですから当然のこと、仕方ありません。自ら嵌めた戒具の検査をして貰い、十五センチ程の鎖で繋がれた両手で夜具を掛け額を床にすり付けた後、両足首を繋ぐ三〇センチ程の軽い鎖をチャラチャラ鳴らせ乍ら檻の扉を潜ります。手許のスイッチで格子扉が電気仕掛で静かに閉まり、微かにカチリと音が致しました。

「情けないのかい？おやじと相談した結果なんだから辛抱おし。それにだ、いくらお前が可愛いと云ったってさ、一晩中、用のない女奴隷を抱いて寝たって仕様ないものね。用があれば出して上げる。じゃ、おやすみ」

嗚呼、やっぱり私は浅ましい奴隷なのだわ。人間には扱っては貰えないんだわ、と少ししゅんとしたものの、品物同様に扱われるにしても、こんなに大切に扱って貰えるのは感謝しなければいけないと思ひ返し新しい薄い藁蒲団に横になるのです。朝になり、檻の中で正坐し、手錠の両手を腿の上において、鉄格子越しに主人の目が覚めるのを待ちます。電気仕掛で開く檻の扉。ベッドの側でひれ伏します。

「御主人様。おはようございます」

「ウン。コーヒー持っといで」

台所へ行き、女中達に額を床に摺付けてあいさつし足錠に注意し乍らコーヒーを捧げて運びました。ポットに残ったコーヒーを与えられて坐つてのみます。手錠だけ外され、着替えやら入浴に奉仕し自分も顔等を洗います。

「じゃ行つて来るよ。檻へお入り。マリーが何か指図するだろ」

赤い革の褌を嵌められ錠を掛けられ、後手錠にされて檻へ入れら

れました。

やがてマリーが来て残り物をあてがわれ、這いつくばって食べます。再び現われたマリーにより檻から出され、後手錠を外され、革褌を鍵で解いて貰い用便を済ませますと、寢室の掃除を命じられました。

「お前の仕事は、ここの掃除位のもんなだからね。性根を入れておやりよ」

隅から隅迄なめた様にしたつもりでも、マリーの検査には通らず小突かれ蹴られてやり直させられた末、再び後手錠にされて檻へ入れられ、主人の帰りをひたすら待ちました。

毎日毎日、殆んど檻の中の生活です。寢室の掃除の外には時々廊下の拭掃除や女中部屋の掃除を課される位で楽なものです。

一日おきに庭へ出され、戸外運動を兼ねて掃除や草むしり等させられます。

マリーが鍵で革褌を解いてくれないければ用便できないのと、昼間、檻の中の後手錠、そして手を使って食事させてもらえないのとが情けないのですが、文句等、云える身分ではありません。

主人が帰宅すると同時に戒具を解かれて入浴や化粧をし、再び戒具を施されて檻の中で正坐し、主人に引き出されるのを待つのです。考えて見れば、全く品物同様の扱いなのですが、女奴隷としてはこれ以上の暮しは先ず望めないでしょう。

主人の妹に当る令嬢エリザは、女奴隷ジーナなど、全く無視している様子で、姿を見てひれ伏しても、言葉はおろか、足蹴すらしません。

運転手は男だけに、ジーナの体をジロジロ眺めては、おかみさん

に叱られたり嫌味を言われたりしました。父親は時々無造作にジーナの体のあちこちを撫でたり、抓ったりしますが、その様な時にはどうしてよいか分らず、只、身を堅くしてされるままにして居る外ありません。

二人の女中が、ジーナにとっては矢張り恐怖的のです。何しろ絶対服従が当然の身ですから、苛めようとすれば訳はないことで檻の中で声を忍んで鳴咽することも度々ありました。奴隷の分際を忘れせないために、と云う理由で毎週一回、半ダース宛、革鞭を当てる事を提案したのも二人の女中でした。

「御主人様。あの…鞭だけは赦して頂けませんの？お願い！アッ、イ、イ、痛い…アッアッ」

毎日曜日毎に、主として婦人連中によって執行される鞭打ち。今日も今日とて、自分で手入れた革鞭の味をたっぷり味わさせられ口惜し涙を流したジーナは、夜のベッドで主人に奉仕し乍ら訴えます。

「そんなに痛いかい？音だけでも痛そうなものなあ。しかし、召使いには召使いの秩序というものもあってね。主人側にしても下手に口出ししたり変更したりは出来ないよ。まあ何だな、マリーあたりに泣きついてごらん」

しかし、マリーはじめ婦人連中は、ジーナが涙を流して哀願しても赦してくれず、毎日曜毎に庭の片隅へ追い立てるのでした。

女囚ジーナの話 (10)

主人のエミールは、奴隷としての範囲内では本当にやさしく扱ってくれました。

しかし、たまには昼間、何か不快なこと等があった時にはジーナに八つ当たりすることもあり、激しいビンタや足蹴り、そして革鞭迄振るうこともあり、きびしくいまして、檻へ蹴り込むこともあります。女奴隷ジーナとしては、主人の手で苦しめられるのは当然のことと考えて居ますので、恨めしい等と云う気はさらさら起らず、むしろ自分を苛めて気が晴れるならと、自ら進んで苦痛を与えて貰うのでした。

今夜もカードで大分、敗けが込んだらしく大荒れの後、ジーナの腹と腰と腿を革の窄衣で力任せに緊め上げ、全鋼鉄製の手錠足錠で逆海老にし、首には大きな分厚い木製の首枷を嵌めて鞭で追い立てて檻へ蹴込んでしまいました。

「くそ面白くもない。ジャラジャラしやがって……一晩中そうしてろ」

ジーナは、耳障りな呻き声等、洩らさない様にと脂汗を垂らして歯を喰いしぼり、一晩中、苦しみ抜くのでした。

「昨夜は可哀想なことしたなあ。つい気が立ってたもんだから…。苦しかったろう」

どんなに夜、立腹していても大抵、朝になればやさしいエミールに戻ります。そんな所が又ジーナにとっては堪らなく好ましい点です。

「…ウ、ウーッ…アア…。フーッ。御主人様。ジーナは御主人様の物でございます。たとえ責め殺されても……。御気が済むことでしたら、どんなに苦しい目に会わされても、あなた様の御手で責められるのでしたら、私、本当に嬉しいんです…」

ジーナが当家の奴隷になって三カ月程経ったでしょうか。友人二人と小旅行に出掛ける主人の御伴をさせられました。

革褌に錠を掛けられ、与えられた衣服や靴を嬉し泣き乍ら身につけ、革の膝枷を嵌められ、右肘に鎖で鉄札をつけられて、戒具の入った袋を手にとって連れて出られます。何年振りかで穿くハイヒールの歩き難さ。はだしに慣れた足裏が妙に擦ぐったく感じます。

駅で落ち合った同行の友人二人は、何れも同年配の青年紳士で、ひとりには夫人同伴、もう一人の方は若い女奴隷を連れていました。女奴隷は廿五、六才のブルーネットの小柄な女で、衣服と靴はつけさせて貰って居ますが、短い裾から膝枷の鎖が垂れて見え、又両手には鋼鉄の手錠を嵌められてうなだれて居ます。

荷物を全部持たされ、人々にジロジロ見られ乍ら列車に乗り、コムパートメントの床の上に二人の女奴隷は坐りました。

「ね、エミール。これは？」

友人の夫人は手で手錠の恰好をなさいます。

「いいじゃないですか。おいジャック。外してやれよ」

「駄目！甘やかしちゃ駄目よ。エミール。私に貸して……。どれに入ってるの？」

エミールは苦笑いして戒具の袋を示しました。

「アラ、こんな手錠、使ってるの？あなたのとこの奴隷は結構なものねえ」

見も知らぬ初めて会った婦人の手で手錠を嵌められ、ついでに二人共、足錠も嵌められました。

「足錠は交替よ。此の結構でせい沢な足錠はジャックの奴隷の方に嵌めましょ。足出して！」

ジーナの両足首には固くて痛い全鋼鉄製の足錠が噛みみました。

「奥様。ありがとうございます」



列車の動揺の度に骨にこたえる痛さをこらえて、じっと正坐を続けます。

「あんだ、足痛いでしょ。私も手錠が締まっちゃって……」

隣でうなだれて居る女奴隷が小声で話し掛けて来ました。「我慢しましょよ。それよりか、一体どこへおいでになるのかしら？」

賑やかに談笑している夫人のスナリした恰好のいい脚を恨めし

く眺め、不自由な手でジーナは、そっと口惜し涙を押えます。

「オヤ？お前達、何をコソコソ話しているの？口利いていい身分なのかい」

ポンポンとハイヒールの爪先で額を蹴られ、二人の奴隷は唇を噛みました。

途中、乗換えて約六時間程の間、一滴の水も与えられず、連れて来られた所はR温泉の山の中でした。

それぞれ二室続きのホテルの部屋を借りて奴隷達は裸に剥かれ錠の掛った革褌と手錠足錠を嵌められ室から出ることを禁じられました。

主人達は朝から晩迄楽しそうに遊び回っていますが、ジーナは室の片隅にじっと坐って主人の帰るのを待つ外ありません。主人が不在の間は食事を与えられないのは仕方ないとしても、用便が出来ないのは本当に辛いことで、掃除等に入りするメイドやボーイ達にさげすみの眼で見られるのも悲しい思いです。

主人は五日目の夜になって、とうとう脱線したらしく一晩中、帰りませんでした。

ジーナが部屋の中を歩き回るのを嫌った主人は、三日目からは首輪も嵌めて鎖でベッドの脚に繋いでしまいましたので、ジーナは飢えと渴きと、そして生理的要求とに苛なまれて、のた打ち回って呻きました。

朝が来て、入って来たメイドの若い娘に全身を震わせて哀願致しましたが、娘は面倒臭そうに掃除器の先でジーナの体を小突き回してそこらを掃除して、さっさと出て行ってしまいました。

ひる過ぎ頃、堪えかねたジーナは、とうとう洩らしてしまいました



た。脱線した主人は夕方近く、漸く帰って来ましたが、あくどく化粧した派手な婦人と一緒です。

「こんなもの連れて来てんの？」

恨めしく見上げるジーナの額が、ハイヒールの先でポンと蹴られ髪をひき摺られます。

「おいおい、他人のものだと思って手荒らに、するなよ。ジーナ、もう暫くそうしてろ」

「アラ、何だか……。あんた、大変よ……」

早くもみつけられてしまいました。

「此の敷物、弁償させられるわよ。高いわよう」

「フーン。堪え性のない奴だ。ともかく綺麗にしておいで」

足許にひれ伏して御詫びし戒具を解かれて身の始末を致します。

そして面白がったコールガールの手でタップリ鞭打たれました。

金を受取ったコールガールは立去り、主人は取替えた室のベッドの脚にジーナを繋いだまま、疲れたのでしよう、食事をそこそこに眠ってしまいました。

ジーナは漸くあてがわれた食事を済ませ、女心の恨めしさに胸一杯の涙を湛え、床に横たわるのでした。

十日程経ち、一行は更に山の奥へ入ってスキー等を楽しんで来る事となり、二人の女奴隷は送り返されることになりました。所有者の責任に於いて、奴隷の自送は認められて居り、交通機関等に於いても制度化されて居ます。

「明朝迄、我慢するんだぞ」

夕方近くになって堅く革褌を嵌められ、衣服をつけ靴を穿き、首環を嵌められます。腰枷を締められ、前手錠を腰枷に結ばれ、足錠の鎖は革褌の股下に吊られました。嵌口臭を噛まされ鼻環がつけられます。涙がホロッと流れました。手錠足錠は御慈悲の特製品ではなく、普通の全鋼鉄製の重くて頑丈な、緊まったら弛まない構造のものです。

ホールへ曳かれ、同様な戒具姿のジャックの女奴隷と鼻と腰を連鎖され、ホテル側で取寄せて準備した自送証の鉄札を首環にブラ下げられました。

自送証は最寄りの警察署で発行するもので、これをつけて居ない奴隷は脱走奴隷と見做されるのです。

「ジーナ。おとなしく帰るんだぞ。ジャックの家に先に寄って連鎖を解いて貰え」

運賃支払済証を左肘に鎖でつけられ、残りの戒具や鞭を入れた袋

を手錠の両手に持ち、ジュリアンの夫人の嘲笑を浴び乍ら裏口からホテルを出て、鎖を鳴らせてヨチヨチと駅へ急ぎました。

浅間しい我が姿に涙が嵌口臭を伝えます。やさしいエミールは、足錠を吊る鎖をかなり長くしてくれましたので、其の点ジーナは楽ですが、ジャックの奴隷は足錠の鎖も短く、更に腰へ吊る鎖もかなりきつくされて居て、膝、腰を曲げて、あえぎあえぎ歩いて居ます。とうとう足の鎖につまづいて前に倒れてしまい、同じ鎖に繋がれたジーナも、鼻の痛さに呻いて膝をついてしまいました。

「あれをこらんよ。哀れなものねえ、ホホホ……」

通りすがりの三、四人連れの若い娘にあざ笑われ、情けなさに嗚咽して立ち上り、両手首に堅く嵌まった手錠を悲しく眺め乍ら、思い切りうなだれて再び不自由な足を踏み出しました。

夕暮れ近い駅の手荷物積込口の附近で列車を待ちます。革褌だけの裸姿で、きびしく戒具を施された若い男の奴隷が背に袋を背負わされて独りでやって来しました。重い荷物に堪えかねて、地べたにへたり込んで肩であえいでいます。額の汗を積んである荷物に押付け拭う姿の哀れさ。行き交う人々は、ジーナ達を見ても、嘲り辱かしめこそしますが、憐れみの言葉一つ掛けてはくれません。

駅員に小突かれ罵られ乍ら運賃証等の検査を受け、手荷物車の一隅の鉄格子で区切られた床に坐りました。始発駅ですからジーナ達、三人だけです。乗換駅で再びじめめな気持ちで一時間程待ち、普通列車の荷物車へ自分の体を積み込みました。乗り合わせた七、八名の男女の奴隷達は、嵌口臭の顔を見合わして、眼と眼で慰さめ合うのでした。

ゴム引きの猿又を締められ、死んだ様に眼をつぶってじっとして

いる中年の男奴隷は、首の札から考えますと、既に一昼夜以上も自送させられ、目的地へは未だ十数時間はタツプリーあります。

ジーナも緊って来た手錠足錠の痛さと、空腹と渴きに悩み、悲しい己が境涯に泣き乍ら、固い床の上で揺られ、眠れぬ一夜を過ごしました。

女囚ジーナの話 (11)

ジャック邸で、鼻と腰の連鎖を解いて貰い、もはや交通機関には乗れませんので、トボトボと鎖を引摺って邸へ向います。

先程バスに乗ろうとして女の車掌に嘲笑と共に足で突飛ばされた口惜しさを味わい返し乍ら、道に迷いつつも約三キロ程をあえぎあえぎ漸く辿り着きました。道に迷っても口の利けぬ悲しさ。しかし交番の前で跪いて眼で哀願しますと、警察官は首環を調べて懇切に教えてくれました。マリーに戒具を外して貰った時の嬉しさ。裸に剥かれ、体の始末をして再び革褌、そして後手錠足錠を容赦なく施され、檻へ蹴込まれた時にはそれでもホッと致しました。

「奴隷の分際で温泉行とは洒落たことしたもののね。今日は鞭を一ダース程当てて上げるよ」

翌日は日曜日で庭に曳き出されて二週間分の革鞭を受けました。

五日程してエミールが帰って来た時の嬉しさ。

「まだ手錠のあとが残ってるね。オヤ足も。辛かったかい」

「……御主人様。そりやもう……痛うございましたけど……。当り前のことですわ。それよりか……もう……存分になさって……」

それから半年程過ぎ、とうとうジーナが御用済みになる日が来ました。

或る日曜日の午前、曳き出されて庭先に引据えられました。エミールと連れ立って若い婦人がテラスに現われました。

「これなの？そうお。これ、頭をお上げ。お前はね、今日でエミール様とはお別れよ。フフフ……。私かえ？私はね、エミールと婚約したの。もうお前なんかに触らせもしないわ。エミール、よくって？今日から此の女、私のところで預るわよ。式の日迄……」

マリーの口振りで薄々には感付いては居ましたが、はっきりと言い渡されたジーナは、悲しさで胸が一杯になりました。しかし如何することが出来ましようか、恨みごと一つ云うことも許されない悲しい身分です。

ツカツカと近寄った令嬢の手の鞭を見て、ビクッと震えたジーナは矢庭に蹴り転され、全身に激しい鞭の雨を浴び、後手錠の身を転げ回り、のたうち回って悲鳴を挙げて赦しを乞いました。無表情にタバコをふかしている主人の恨めしさ。

「分ったかい？え？何とかお云いよ」

「……ハ、ハイ……。御鞭ありがとう……。ございました。申訳ございません。御赦し下さりまし……」

「フン。そら、靴の底でもお舐め！何よ、奴隷の癖に。本当に生意気だわ」

其の日の夕方、涙乍らにエミールに御礼をいい、令嬢の手できびしくいましめられ、自動車の後部トランクへ投込まれて連れ去られたのでした。

令嬢の邸は、自動車で十五分位の所にあり、二人の女中と一人の中年の男の奴隷が召使われて居ます。

「これね、預り物だから檻へブチ込んでよ。二匹一緒でもいい

わ。後手錠と足錠は嵌めっぱなしよ。昼間は木の首枷つけとこうつと」

令嬢の冷酷な指示。それからの毎日毎夜の苦しさ。首環に吊られた後手錠は絶対に外して貰えません。朝から晩迄重い木の大きな首枷に挟まれて檻の中に過ごし、夜は同じ檻の男奴隷がうるさく身をすり寄せて苦しみ呻くのに悩まされ、後手錠の辛さに身悶えするのでした。時々、曳き出されて令嬢に鞭打たれ、余りの口惜しさに号泣し乍ら約一カ月、呻吟を極めました。

女囚ジーナの話 (12)



結婚式の翌日、漸く地獄の様な戒具から解放され、新居へ曳かれて、何やかと雑用に追回され乍ら、新夫婦が旅行から帰るのを待ちます。新家庭の女中は中年の人で、余り苛めません。それにしても当分、此の新しい夫妻の許で使役されるのだと知った時は、当然のことながら本当に情けなくなりました。

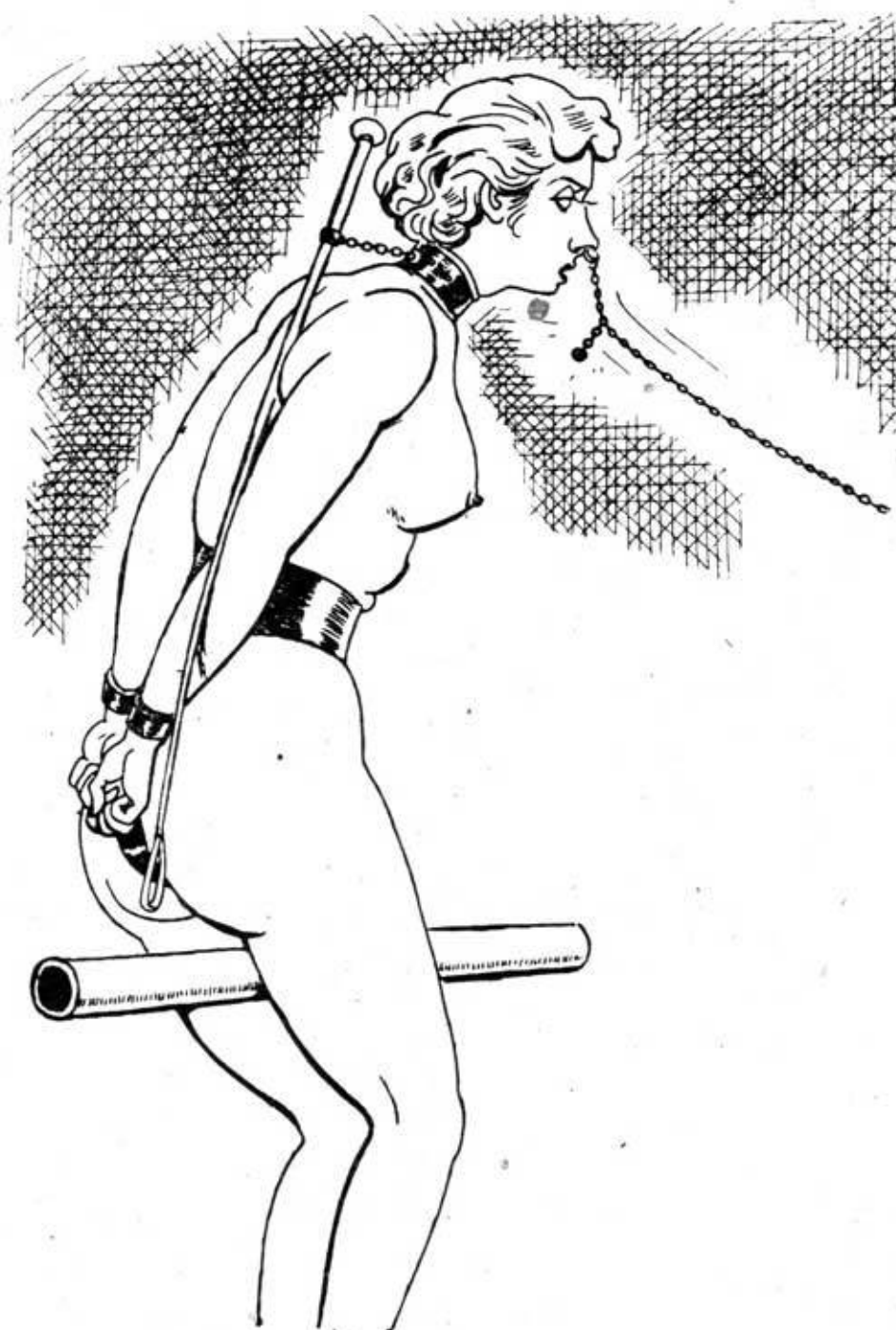
十日程で帰った二人は、楽しい新世帯を営みました。もはや、エミールには全然、齒牙にもかけて貰えず、若夫人に苛められ辱かしめられて、苦役を課されるのです。若夫人の夜の支度に奉仕した後両手を差出して手錠を嵌められ腰枷に固定される時の切なさ、口惜しさ、全く身を切られる思いでした。

「もう、よく分ったろうからね、眼障りだし、汚らわしいから、今日でお払箱よ。明日、御本宅へお行き！」

二カ月程、精神的な苦痛をたっぷり味わさせられた後本宅へ曳かれて帰りました。

今度は父親のおもちやにされます。と言っても、気が向いた時だけ奉仕させられ、平常の扱いは女奴隷としての労役をマリーの手で課され、必要のない夜は、地下の物置の隅へ移された檻へ入れられ、冷い手錠足錠を味わい乍ら寝るのです。日曜毎の鞭は相変らず赦して貰えませんが、それでも世間一般の女奴隷より楽なことは確かでした。ジーナの所有者も父親に切替わりました。

こうして更に半年程過ぎ、極東の君子国に新しく支店を置いた父親は、市場開発のため二、三年、本国を明けることとなり、社長に昇格したエミールに業務を任せてジーナを連れて旅立ったのです。



「仲々よく勤めるから、褒美として人間並みに扱って連れて行ってやるからな」

出立の半月程前から戒具や鞭のあとを手入れさせて貰い、主人の情婦として恥かしくないなりを整えて豪華な客船に乗りました。

鼻の障子にあけられた鼻環の孔だけはどうとも出来ませんので、できるだけうつむく様にするのでしたが、船員やボーイ達にマダム扱いされるのは天にも昇る嬉しさでした。主人のお供をして食堂やサロンへ出ますので、すぐ船客達とのつき合いができました。

身分がバレるのが恐ろしくて口数も少く万事控え目に振舞うジ―

ナに却って人々の好意が集まり、ジーナが進退窮まることも度々でした。

「ね、ジーナ。あなた何故イブニングをお召しにならないの？ 良く似合うでしょうに」

素肌に締め込まれた革褌は気付かれることは先ずないでしょうが、上膊部と背中に、奴隷番号を消すべくもなく刷込まれた身は、絶句して困り果ててしまいます。船室へ帰って主人と二人きりになると本当にホッとします。

「御主人様。もう：私苦しくて苦しくて：。思い切って本当のこと云ってしまおうかと考えますわ」

「ハハハ：しかしお前も仲々うまいものだ。わしは面白くて面白くて：誰が見破るか、それともお前が化けおおせるかと毎日々々見物してるんだよ。そりゃなお前がそう云うんなら、明日にでも鎖をつけて皆の前へ連れてってやるが：。」

既に十日以上も対等のつき合いをして来た婦人達の前へ浅間しい姿を晒す時のことを考えますと、身震いが出る程厭です。

「御主人様。お慈悲です。このまままでおいて下さいまし。一生懸命に何しますから：」

しかし、それから五、六日後、遂に化の皮がはがれてしまいました。催されたシヨ―の道化の滑稽さに、思わず顔を上げて笑ってしまったジーナの鼻の孔を、見惚れて居た青年が発見したのです。

シヨ―が済み、喫茶室に集まった人々が耳打ちしては白けた視線を向けるのに気付いたジーナは、ハッと致しました。

「フランソワ君。少し茶目気が過ぎはしないかね。君の連れてる婦人は、お見受けする処、我々と同席できる身分ではない様だが……」
初老の紳士が口火を切って主人を非難しました。

「ハハハハ……いやあとうとうバレたか。皆さん勘弁して下さい。ちよっと試して見たかったもんで……」

「そうアッサリおっしゃられれば、我々も過ぎたことは云いませんですよ。即刻、退らせて下されば、それで結構です」

「ねえ、フランソワさん。こんなに自由させておいて、もし万一のことがあったらどうなさるおつもり？衣裳を着せとくのはご勝手にすけど……。私達、ほんとにゾツとしてるんでございますよ」

「これはこれは、奥様。恐れ入りました。でもね、ホラ此の通り、準備はしてますよ」

主人様はポケットから手錠を取出して、全身、眞赤に恥入って居るジーナの両手に無造作に嵌め

「では、ちょっと失礼……」

と船室へ引立てました。

「フフフフ……二週間以上もったじゃないか」

面白そうにいますが、ジーナの身になれば面白い所ではありません。むしろ、初めから奴隷らしく扱われて居れば、諦めもついて居る事だし、此の様な精神的苦痛を味わわなくてもよかったのに、と主人が怨めしくなり、満座の中で嵌められた手錠が今更の様に骨身に喰い入るばかりの味でした。

「ではな、これから戒具をつけて、皆様にお詫びして来るんだぞ」

「アッ……。御主人様。そればかりは……お慈悲でございます……勘忍して下さいまし……」

「駄目々々。命令だぞ」

泣きじゃくり乍ら裸になったジーナの両手は、再び手錠で革鞭の腰枷の部分に結ばれ、三十センチ程の鎖の足錠、そして膝を「く」の字に曲げて足鎖を股下に吊られます。右肘につけられる鉄の札。首には冷い首環をガチンと嵌められてしまい、背筋に革鞭をブラ下げられ、そして嗚呼、鼻環がカチリと嵌まりました。

「……こ、こんな恰好で……アア……もう……」

「少し甘やかせてやったから埋め合わせだな。来い」

鼻環についた細い鎖を引張られ、再びサロンの中へ入った時の氣勢！膝に六十センチ程の棒を横にして挟まされ、膝を開いた中腰姿で立たされました。打って変る冷い視線が集中し、死んだ方がましだと迄思う程の情けなさです。

「皆さん。お詫びに連れて来ましたから、お氣が向いたら少しからかっておやりにならんですかな。鞭は背中に吊って居ますよ」

男達はジロジロとジーナの体を眺めているだけです、婦人達、特に上流階級の婦人達は却って残酷なもので、代る代る鞭を振り、悲痛な呻声を洩らすジーナをさんざんに痛めつけ、辱かしめて笑い興じるのでした。

つい先刻迄、共に談笑し合って居た上品振った婦人連とは、とても思えない程の冷酷な仕打ちです。

ジーナと同年配のイブニング姿の婦人がジーナの前に立ち、膝の棒のため身動きできないジーナの鼻鎖を左手に短く持って、右手で激しく頬に平手打。持ち替えて右の頬にも。鞭の痛さもさること乍ら、鼻鎖を上下左右に操つられつつ喰わされるビンタの口惜しさに奥歯をギリギリ噛んで身もだえします。此の手錠さえ嵌められてな

ければ、いや、せめて腰枷に結ばれてさえなければ、もうどうなってもいいから手向いしてやるのに、と迄思いますが手向いはおろか顔をそむけることすら出来ないのです。

体中に出来た赤いみみずばれにヨードチンキを塗りたくられ、身をよじって喚きます。とうとう膝の棒を落してしまい、罰として客が全部引取る迄、入口の所で鉄砲手錠にすることが、婦人客達から提案され直ちに実行されました。

室へ引取る人々が通る度に、苦痛をこらえ、必死の努力でひれ伏して頭を踏み付けられました。十二時を大分回って、漸く最後の婦人客を送り出し、主人の室へ帰り鉄砲手錠を解かれたジーナは、床にしがみついて号泣するのです。

女囚ジーナの話 (13)

支店の設置された首都の郊外に居を構えた主人の足許で、奴隷兼情婦の日夜を送りました。懲りたものか、お供して外出する時には必ず手錠足錠を嵌められます。諦めては居りますが、外人の女奴隷ジーナに浴びせられる好奇の視線に情けなさもひとしおでした。

情婦の様なものではありませんが、分際が分際ですから、主人が他の女性と交渉を持たれるのに対して怨みごと一つすら云える筈もなく、帰って来ない主人を待ちつつ檻の中で噁り泣く夜も数多くございました。他国の小娘の女中に顎でこき使われ、言葉が分らないとて鞭打たれ、足蹴にされる口惜しさ。そしてゲイシャガールにうつつを抜かした主人に構って貰えない悲しさに、ジーナはとうとう魔がさしてしまい、仕事上で足繁く訪れる同国人の青年社員に心惹かれてしまったのです。

「俺の手からはどうも出来ないけど、逃げて来たら何とかしてやるぜ。俺のアパートはここだよ。タクシーに乗ってそう云えば直ぐ来れるさ」

無責任な青年の言葉を愚かにも真に受けたジーナは、主人のポケットから小銭を盗んで檻に隠し、戒具の鍵の予備品のしまい場所を嗅ぎつけておいて機会を待ちました。

「ジーナや。今日はマリギクさんとゴルフしに行くからな。道具、持っておいで」

チャンスは次の日曜日に早くも訪れました。機会が仲々なければその間に反省することもできたでしょうが、皮肉なものです。

それにしても、憎い女を連れてのゴルフ遊びの同伴とは！女心の口惜しさに燃えたジーナは革褌の中へ盗んだ小銭を隠し、衣服をつけ、隙を見て戒具の鍵をベッドの小抽出から盗んだ後、自ら足錠を嵌め、ゴルフの道具を二人分、肩に掛け、玄関で憎い女の来るのを待たされます。やがて軽やかな粧いのゲイシャガール、マリギクが自動車で来て、ジーナの眼前で主人と寄り添って乗ったので、ジーナはカッと逆上してしまいました。

「わし達は車で行ってるからな。早く来いよ」

ゴルフ場迄は普通の足で歩いて十五分ばかり、足錠の身でも二、三十分で行けますが、車で行かれるのなら道具位積んで行かれたらいいのにと、ジーナは益々脱走の決心を固めました。

「あら、あなた、あれの手を括ったかないの？」

マリギクの手ぶりで気が付かれた主人はポケットから手錠を取出して、差出すジーナの両手に面倒臭そうにカチャカチャと嵌めてしまいます。

「…フン!…」

マリギクは眼を細めて嘲笑を洩らしました。走り去る自動車を無念の形相で睨み付けたジーナは暫くはゴルフ場の方へ鎖を鳴らせ乍らトボトボと歩いて行きましたが、人影を見定めて物蔭に身を寄せ革褌の中から取出した鍵で手錠足錠を外してしまいました。ゴルフ道具をそこいらに立てかけ一散に駆け出します。外した戒具は処置に困って胸の中へ入れました。眼の色を変えてタクシーを捕え、夢に迄繰返した行先を告げシートに崩折れますと、恐ろしさが全身をおのかせます。しかしもはや後戻りは難かしいでしょうし、あの憎い女を思い出して勇気を振りし起しました。

いとしい男の室をノックする時の期待と興奮。情熱の島コルスカに生れた南国の女、ジーナは前後の見境いを失い、手錠のあとを隠すのも忘れ、激しく男を呼びました。

「革褌の錠位、すぐ壊せるわ。それよりあの人出掛けてやしないかしら。日曜日だもの、まだ寝てるにちがいないと思うけど」

朝寝の夢を叩き起された男は、ジーナを見て眼を白黒させて驚きました。

「来たわよ!とうとう…」

息を弾ませ期待に胸ふくらませたジーナの夢は、砂上の楼閣と消え去ります。

「ま、ともかく入れよ」

眉にしわを寄せ腕組みして歩き回る男を見て、ジーナは眼前が暗くなりました。

「本当に困ったことしてくれたなあ。考えても見ろよ。お前は俺のボスの奴隷だぜ。そんな…お前の面倒が見切れる訳がねえじゃねえか」

ヘタヘタとジーナは床に崩折れます。

「……そう。そうだわねえ。あんたなんかの言葉を真に受けたのが馬鹿だったわ。あと……二年足らず辛抱すればよかったんだわ。ああ、御主人様は赦して下さるかしら。本当に……とんでもないことしてしまったわ……」

「諦めて帰った方がいいぜ。ともかくボスに連絡するよ。どこだいい?お邸かい?え、ゴルフかい。よし、電話して来るからな。よくお詫びしろよ。逃げちや駄目だぜ。おい?」

「逃げやしないわよ。そんなに心配だったら、そら!これ嵌めといてよ」

胸の中から、さっき外したばかりの手錠足錠を出して床に投げ出します。

「悪く思うなよ。お前は奴隷なんだから。ほう、鍵を盗み出したんだな。手を後へ回しな」

外したばかりの戒具が再び冷く骨身に喰い込むのを胸のふさがる思いで味わい、今は恨み重なる男の手であちこち撫で回されるの身をよじって逃げます。

「何するのさ、卑怯者のくせに。早く電話して来たらどうなの?」

報らせを受けた主人は烈火の如く激怒し、直ちに官憲の手に処置を委ね、ジーナが詫びることすら許されず異国の囚人となったのでした。所有者の物を盗んだ廉で懲役九年の宣告を受けたジーナは、浅間しい姿をマリギクに見物されて辱かしめられ、口惜しさの余り口答えをしてしまい、魂も吹き飛ぶ様な懲戒を受けました。九年の苦役を終えた後、ジーナは更に本国へ押送されて、今度は脱走罪に対する刑を受けねばならないのです。思えば哀れな女でした。(未完)

馬化狂通信総決算



——倉 仁 成 人——

一、お詫びと総決算のこと

私如き趣味の者にとっても昨年はまさに黄金の年であった。私も今までどちらかと云うと図に乗って失敗したり、他人様に不快な感を抱かせたりして惨々であった。それらに対するお詫びの意味もあり、今年は反省、謹慎

の年として、私は総決算をしたいと思います。

私は今迄本誌に投稿したものを始め、色々な原稿の下書きをノートに控えてあるが、今改めてそれを読んで見ると、新年号でも麻生氏に指摘されたように、確かに乗杉さんのものとそっくりな部分がある。只、私はここで弁解するつもりはないが、私はかって本誌上

に発表されたダイアナ夫人は殆んど暗記せんばかりに読みつくし、その文章や情景が頭の中に焼きついて了っている為、それらが再び出て了うのである。然しながら、この結果は他人のものを剽窃していると思われるも仕方のないことで、この点、深くお詫びしたい。

その他では私がF誌十一月号に投稿したものが、題名、内容、筆名までも変えられていたのには、びっくり仰天であった。

私は元来が非常に慎重派の方で、私が今迄撮影した乗馬女性の写真は優に千枚を越すと思うが、それらは出来るだけ発表しないようにしているの、時々私が発表するものは、よほど古いものとか、外人のものだけにしているわけである。

二、一般出版物、映画雑報

今年は前にも述べたように我々にとっても黄金の年であり、特に今秋は馬づいていたと云う程、非常に多くのものが目についた。これらを一々詳しく紹介してもよいが、一応、同趣味の方々には既に目についているであろうから簡単に挙げておこう。

先ず九月には麻生氏のおげられた週刊読売のグラビアの外に、週刊実話特報が四頁に亘

るグラビアで「馬とおねえちゃん」。十月に入って毎夕新聞の連載対談記事「怒れる若者と三十分」のうち「乗馬愛好家の巻」としてK短大乘馬クラブのリーダーである十八才の乗馬好きなビート娘二人との対談。十一月に入って週刊実話の東京レポ「乗馬クラブはB Gで一杯」これは女性の乗馬とスピード、スリル、セックスの三Sの関係にまつわるお話で至って通俗的だが、乗馬にはマゾ的セックスがあると云う説は変わっている。私の従来からの念願である3Sでなく、4Sにして貰いたいもの。同じ月の週刊事件実話誌のトップ記事「女性と同性愛」の中で、乗馬クラブで相手を漁るお嬢さんと云う章には女性が馬に乗った時の心理的生理的な面が相当詳しく書かれているが、内容は本誌に度々書かれていたものと同じ。その他、東京中日新聞、土曜色刷写真には乗馬学校の生徒たちと題して、華やかな服装のハイティーンが馬に乗っている。十二月にはマゾの小記事や人間馬の小写真と結構あるが乗馬と関係ないので省略しよう。以上が大体であるが、共通している事は記事がいくらか作り物の感があるし、写真は至ってお粗末、カメラマンのセンスを疑いたい位。尤も本誌の読者のセンスを当てはめよ

うと云うのは少々無理なのだが。その上、他誌からそっくりそのままの写真を転載しているの、写真がすっかりボケて了っている。

私は何年も前から女性の乗馬写真を集めているし、ある乗馬団体にも関係しているの、写真を目見れば、それがかって発表された事があるか、そして場所は何処かと云う事はすぐ判るし、時には、写っている人物から馬の名まで判る事もある。例えば週刊実話の写真は皇居内馬場の馬術大会で騎手はK大馬術部の今井嬢であり、亦、事件実話誌の写真はかつてアサヒグラフの特集写真でパレス乗馬クラブを扱った「お城の中をパカパカと」の中の一葉で、写っている騎手は服部時計店社長令嬢、服部香代子さんである。これらの事は記事についても全く同じで、週実誌に紹介されている乗馬好きのママが経営しているバーHと云うのは銀座のバー「拍車」の事だと思ふ。関心のある方は一度、訪ねてみるがよい、たしか銀座六丁目だと思った。但し、銀座のバーであるから入用なものはタンと用意してかかること。

次に映画の方では特に目立ったものは見当たらなかったが、いささか古い映画で今頃三流館で上映しているかも知れないので挙げて

置くが、洋画「悪党カシム」では名前は忘れたが主演女優の英国風の乗馬服に長靴と云うスタイルは素晴しかった。序いでにもう一つ、NHKテレビでは往年の名画を再び上映しているが、その上映予定の一つに「断崖」がある。この中でもジョーン・フォンテインが棒立ちになる馬を懸命に乗りこなそうとする場面があったのは今だに記憶に残っているが、テレビではどうなるか。新しい所ではこの雑誌が出る頃には既に封切られていると思うアメリカ映画「夜は泣いている」ではナタリー・ウッドの乗馬姿が見られる筈である、と云うのはスクリーン十二月号にこの映画のスクリーン写真が紹介されているからである。但し彼女のもは乗馬用長靴ではなくショッパーであるのが惜しい。亦、同誌のフランソワーズ・アルヌールの乗馬写真もやはりショッパーを履いているが、我々にとってはやはり長靴でないといけないらしい。もう一つ、同じスクリーン誌のゴシップ欄に於けるグラマー女優アニタ・エグバークは正に短いショート一枚で馬に跨っているのだから、その開放的な有様には恐れ入る。尤も、このアニタ・エグバークは非常にゴシップの多い女優で、その私生活は波乱に富み、新聞記者がやたらと

追いかけて回すので、遂に彼女はおモチヤの弓矢を用意して、ブン屋共を撃退するのだそうだが、先日はそれにも屈しないあるカメラマンとトックミ合いの格闘となりカメラをたたき落した程の武勇伝を発揮したと、スポニチ紙は写真入りで報道しているのは、本誌の「マゾヒズム天国」を思い出させて仲々面白かった。所で本誌の「マゾヒズム天国」とか「マゾヒティカ・ファンタジア」などはユーモアたっぷりで、とても楽しい読物であり、本誌のよくなアブ誌にはとかく懐情怪奇な物語が多く、内容も血腥ぐさい残酷なものが多い中で、このようなマゾ記事は貴重だと思う。別冊KKのグラフでも珍獣出現などは実にトボケテいて笑わせる。あの男の背に跨っている異国風の美人は素晴らしいが、新聞紙はただけにない。これから三対一、いや五対一でもよいからマゾ特集を発行して貰



えないだろうか。そして、それにはダイアナ夫人全部を一括してまとめて貰えば、どんなにか楽しい事だろう。

三、女性乗馬愛好家雑感

私は先にある乗馬団体に關係していると書いたが、その目的は何も乗馬を楽しもうと思

って入ったわけではない。真の目的は賢明な同好諸氏には判って貰えると思う。従って私の鞍数は数える程で、亦それだけの熱心さもなく、能書き一点ばりの所謂、仲間同志で云う口頭馬術家の一人である。私の見る所では各乗馬クラブ等の男性会員の中には私と同様な性向を持った者も多少いるのは明らかである。と同時に女性会員の中にはその反対にサディスティックな性格の婦人がいる事は当然である。私が他人の練習を見ている時でも「誰かよく効く拍車持っていないかしら？」と、きいて廻っている婦人を見かける。一般的に云って女性は馬の御法の本命である手綱や脚の操作、体重の移動による御法をしないで、いきなり拍車をけり込んだり、少しでも馬が動かなくなるとすぐに鞭打ったりする人が多い。本来、拍車などはけりつけるなと云う事より、馬に刺戟を与え注意を喚起

するのが目的なのだが、専門家に云わせると、女性がすぐ拍車や鞭を使いたがるのは女性特有の恐怖心のなせるわざだと云うが、それには異論があると思う。それともう一つは、多くの女性は暗示に引掛りやすいと云う事である。例えば、あまり経験のない婦人に「馬は人を見ますからねえ、少しきびしくしてやっただ方がいいですよ」と云うと、後々までも馬が少しでも反抗気味になったり、思う通りに動かなかったりすると、すぐに拍車や鞭を入れたがるものである。尤も、見ている私の方からすれば中々楽しい見せものなのだが。

ここで少し話は変わるが、女性の乗馬人口が増えた事は驚くばかりで、週刊実話の記事によればS会などは実に七割余りが女性だと云う。それだけに各種の競技会が多く開かれ、我々の目を充分に楽しませてくれる。その中で女性だけの大会では毎年六月頃、馬事公苑で開かれる関東女子学生馬術選手権大会がいちばんの見ものだし、その他の大会にも多くの女子選手が参加する。亦、競技会と云うより行楽的なものでは、S会で開かれる百貨店、馬術リーグ戦がある。これは私も前にはよく見に行ったものだが、何と云っても百貨店だけあって殆んど女性であり、学生とは亦違っ

た華やかさがある。服装だけを見ても黒と白の組合せだけではなく色とりどりで色彩感に溢れ、おまけに美人揃いときてるのには、あゝ種の艶めかしささえ感じられる。昔は、ずい分と服装もお粗末だったし、技術も拙劣だったが、最近は乗馬服や長靴も本格的になり、何より楽しいのは乗馬技術がグッと上達したことである。今年などは普通の障碍飛越では物足らなくなったのか、駆ける馬の上からオモチャのピストルで的を打つ現代的やぶさめを行ったそうで、見に行けなかったのが残念だった。

こと馬術に関しては男も女も全く同等だと云われていたのは昔のこと。最近は女性の方が優勢で、殊に昭和三四年の東京国体に於ける馬場馬術では一、二、三位を全部、女性が独占して了っている例もあり、馬場馬術では絶対である。亦、他方面でも同年の同じ国体に於けるスチーブルチェス（これは非常に長い距離の間に多種多様な障碍や水壕を設け、しかもある区間を一定時間で走らなければならない大障碍レースそのものの競技で、非常に危険を伴う。現に男性選手の中にはヘルメットを被り、カミナリ族顔負けのスタイルで参加しているものもいた）には横浜の平木嬢

と云う紅一点も参加し、しかも彼女は普通の乗馬服装で相当上位に食い込んだ。これは私も実際に見ていたのだからたしかである。そして今年度の熊本国体でも活躍した由。これらの事から想像すると、多くの人は中性的な女性を想像するかも知れぬが、どうしてどうして彼女は愛嬌のある淑やかな美人であるから恐れ入る。

次に個々の女流馬術家については一昨年の東京スポーツ特集、女のスポーツ、馬術の部では多くの昔から現在までの女流馬術家について解説されているが、これを全部書くと本格的スポーツ雑誌も及ばない程になるので省略しよう。尚この雑誌は特異な雑誌で、一部の書店にしか出ていないが、馬術関係には毎号多くのスペースをさいている。

最新の情報によれば次の東京オリンピックには女子だけの総合馬術競技を種目の中に入れると云う話もあり、そして女性の馬場馬術審判員を採用する事に決定したそうである。

四 乗馬女優列伝

映画女優の中で誰が一番馬術が巧いかと云う事は正確には判らないが、かつて内外タイムズの女優オリンピック特集の馬術競技では

「馬に乗ると食欲が出る」と云う位、熱心な大映の八汐ゆう子と云う事になっているが、立教女学院時代、既に乗馬教師の資格があった同じ大映の南佐斗子（平凡誌紹介）の方が巧いと思われる。二位は同紙では高倉みゆきであった。彼女の乗馬姿は一大学生をして、一種の気品がありさすが皇后だ、と云わせていたが彼女も今は皇后の座を追われて心の深傷は大きい。その他では、前に明星誌のグラマ―女優の座談会で「ひまさえあればいつも馬に乗っているの」とのたまひ、そして自分の趣味の乗馬についての随筆を映画ファン誌に寄せたグラマ―の元祖、前田通子。彼女は女優になる前は三越の店員で、三越乗馬クラブの会員でもあったのだから相当巧いだろう。因みに今年の百貨店馬術リーグ戦は三越が優勝した。彼女も新東宝を追われて相当、苦勞したろう。次に昭和三十五年一月の報知新聞に馬事公苑でのスナップと共に「妾は女優になる前は騎手になろうかしらと思っていたのよ」と云っている新珠三千代。彼女が黒い乗馬服と長靴で白馬に跨っている写真は小さいけど実に印象に残っている。今でも時々張り出しては眺めている次第である。その次は中学時代から馬を乗り廻し、平凡誌の伝言板

に「妾の乗馬にするんだから誰方か一頭、馬を世話してくれないかしら。出来れば白馬の方がいいわ」と求馬の一文を出したり、小説倶楽部のグラビアで活躍しているのは日活の南田洋子。そして同じ小説倶楽部を始め、平凡その他の映画雑誌に乗馬姿を見せ、自分自身、パレス乗馬クラブ会員である高千穂ひづる。東宝では前にも書いた新珠美千代と共に馬事公苑のスナップ写真におさまっていて「気がしゃくしゃくしている時は馬に乗ると胸がスーッとするし、何だか偉くなったみたい」と云う安西郷子。時折、上品な乗馬姿を見せたかと思うと、たまにはショート・パンツ一枚で、さっそうと馬に跨がる司葉子。同じく東宝に於ける青春スターで、かつてある写真家の個展の材料にされた篤るみ子。映画ファン誌に、さっそうとした乗馬振りを見せた（複写々眞参照）大映の中村玉緒。お次の東映では、さすが時代劇の大御所であり、乗馬には最も力を入れているだけあって、その東映乗馬クラブの有力メンバーである丘さとし、花園ひろみ、そして中村錦之助との共演映画「七つの誓い」で初めて馬に乗り、惨々ひどい目に遭いながらも「乗馬を私の趣味にして見せます」と負けん気を發揮して、すっか

り乗馬が巧みになった東映のグラマ―故里やよい等々。昔の人もその他に沢山いるが、特に乗馬の好きだったのは轟夕起子がいる。彼女の乗馬姿は昔の映画雑誌ではいくらかも見られたが、やや男性的である。大映の京マチ子も乗馬が好きだそうだが、生憎と私のスクラップの中にはないので省略。

外国映画では事情がよく判らないが、概して米国は西部スタイルが多いので集めていない。只、伊のシルヴァーナ・マンガノの乗馬好きは有名で毎朝一刻を自邸の馬場で馬に乗って過している、と云う記事が目についた位だ。最後に大事な人を忘れたが、六才の頃より馬に乗っていて、乗馬は大変巧みな鰐淵晴子さんがいる。彼女はまだ若く、外国人なみの身体でスタイルがよいから、将来きっと素晴らしい女流馬術家になれるだろう。

△附△最後に写真を一葉サービスしよう。これは数年前のさる馬術大会、馬場馬術競技に出場したアメリカ、ハイティーンガールだが、カメラの位置が低すぎるのであまりよい出来ではない。

（おわり）

人に見られてはと思うと気が気でなく、何処か違うところに隠しておこうと思ってとり出したのですが、手にすると怖いもの見たさでもいいでしょうか、昨日はあわてて充分みんな見てなかったもので、もう一度、気になってとり出しました。一枚一枚を勇をこして見ていたのです。

「B子さんがいらしたわよ。お見舞だって」
階下から母の声がしたので、あわてて机の上にはろげた写真を揃えようとした時です。

「どうしたの？ 休んだりして」
いきなり、うしろの障子が開いてB子さんが入ってきました。B子さんは、もうとっくに家に上ってきていたのです。

「あらッ」
あわてて写真を抱きこむ様にして机にしがみつきました。かくすひまなんか、ありやしないのですもの。

「なんだ、寝てんのかと思ったら、ちゃんとユニホーム着てるんじゃないの。どうしたっていうのよ」

B子さんは寄ってきました。私は、とっさにいいわけも出来ず、脇をはって写真をただカバーするに精一ぱいだったのですが、
「おや、何してんのかと思ったら」

B子さんは肩ごしに私の脇の間から写真を一枚ぬきとったのです。

「いやよ、いやよ」

それをとりかえそうとして手を伸ばしたのが却って悪く、身体でかくしていた写真がパアッとひろがってしまったのでした。

「やっぱり、そうだったの？」

B子さんは私の顔と写真をみくらべながら感心したように言うのです。

「いや、いやよ、いや」

私は、もうむきになって写真をかき集めましたが、もう顔中が火のように熱くなって参りました。

「そうだったの？」

B子さんは私の顔をみて、うなずいて感心したようにして

「あなた、あなたもS子みたいに、こんなことされるのが好きになったんじゃない？ そうね、きっと」

こういうのです。

「いや、いや、B子さんのバカ」

「そうよ、きっと。ネ、ほら、こうしてしばらくられるのが」

「いやよ、いじわる。いやよ」

B子さんは、そんな私の両手をとって背中

にまわし、手首を合わせて持つのです。

「あーッ」

そうされると私はハッとあのときのことか思い出され、まるで暗示にかかったようになってその手をふりきれないのでした。

「いやよ、はなして」

そういうだけで身体がいうことをきかないのでした。

「分かったわ、ちょっと待ってらっしゃい」

B子さんは何かモゾモゾしていました。いつの間にか私の両手首にひもがまきついていたのでした。

「いや、B子さん、こんなことなすっちゃあ」

私は驚いてふり向きしました。B子さんは只私の手を後に廻してみても、ちょっと真似ごとをするだけだろうと思っていたのに

「ホホホ、ハンカチでちょっとしばっただけよ。ホラ、そんな可愛い顔をして。いいわ、ちょっとそのまま置いてて」

そんな私をほって置いて、部屋の片隅のタンスの引き出しをあけるのです。勝手に分らないので、あちらこちら開いていましたが
「あら、いいのがあったわ」

私の和服の入っている引出しをみつめて帯止めを出してきたのです。私は自分の帯止め